

# 斎宮跡発掘調査報告Ⅲ

下園東区画の調査

出土遺物編

2021

斎宮歴史博物館



## はじめに

令和2年度、斎宮跡の発掘調査の歴史は50年の年輪を重ねることができました。現在国の史跡に指定されている斎宮跡は、全国屈指の広大な指定面積と飛鳥時代から南北朝時代に至る悠久の歴史を持っています。しかし、実際に指定された段階では、斎宮とその時代の遺構・遺物が地下に良好に残っていること、それが東西約2km、南北約700mの範囲に広がっていること以外は、ほとんどその実態がわからず、史跡指定後の調査と幅広い研究によりその価値を高めていくことが期待されていました。

現在、斎宮跡に関する知識は飛躍的に増え、方格街区という古代の都市計画による平安時代の斎宮の構造、その内部の斎王の宮殿である「内院」、斎宮寮の中心的な施設であった「寮序」の解明や、その成果としての史跡公園の整備が進められています。

また近年では、平成28年度に策定しました「史跡斎宮跡発掘調査基本方針」に基づいて飛鳥～奈良時代斎宮の中心的施設の解明を進めており、とりわけ飛鳥時代の斎宮の解明が飛躍的に進んでいるところです。

一方、斎宮歴史博物館は、過去の発掘調査成果を整理し、地区ごとに総括しなおす正報告書の刊行事業を併行して実施することにより、これまでの調査成果から新たな斎宮の価値の発見・公開を進めています。今回は方格街区の下園東区画の出土遺物の再検討結果を上梓することができました。

こうした斎宮跡で築き上げてこられた大きな調査研究成果は、多くの方々の支援の賜物もあります。平素から斎宮跡の調査研究に貴重なご指導をいただきております斎宮跡調査研究指導委員の諸先生方をはじめ、文化庁、明和町などの関係機関、発掘調査の実施にご理解・ご協力をいただいております地元関係者のみなさまに、あらためて厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

斎宮歴史博物館

館長 上村 一弥

## 凡 例

- 1 本書は、三重県教育委員会（昭和43年度から平成19年度）および、三重県（平成20年度から令和2年度）が、文化庁の国庫補助等を受けて実施した史跡斎宮跡の発掘調査の中で、史跡東部に位置する方格街区（方格地割）内の下園東区画での発掘成果のうち、出土遺物を総括したものである。
- 2 斎宮跡の方格街区における各区画の名称については、現在の小字名に基づく名称を採用している。
- 3 遺構・遺物の時期区分の指標となる段階設定は、「斎宮跡の土器編年の再検討」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』2019）での段階区分に基づき、その表記は「第1段階第2期」などを便宜的に「I-2期」と記述している。
- 4 本書に関連する遺構表示記号は次のとおりである。

S A : 墓・壙	S B : 据立柱建物	S D : 構	S F : 道路	S K : 土坑	S H : 積穴建物
S Z : 落ち込み・その他					
- 5 遺物が出土した遺構番号の表記は『斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編』に則り、従来、遺構番号の桁数を合わせるために用いてきたSK0555のような表記はせず、SK555のように番号の頭に0をつけない表記に切り替えている。
- 6 遺物の漢字表記については、材質の違いによる漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし参考文献からの引用はこの限りではない。
- 7 遺物実測図の縮尺は1/4を基本とし、一部については1/2を用いた。
- 8 本書の執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の大川勝宏が行った。なお、刊行に向けての編集作業や、出土遺物の整理作業・図版作成には、下記の協力を受けた。

斎宮歴史博物館調査研究課  
中山由紀子 川部浩司 宮原佑治 八木光代 森本周子 中西宏美
- 9 本書の執筆にあたっては、「斎宮跡調査研究指導委員」の各委員の指導・助言を受けた。本書刊行時点の委員は下記のとおりである。（五十音順 敬称略）

浅野 聰（三重大学大学院教授）	稻葉信子（筑波大学名誉教授）	小澤 稔（三重大学教授）
金田章裕（京都大学名誉教授）	京樂真帆子（滋賀県立大学教授）	黒田龍二（神戸大学名誉教授）
増瀬 徹（京都橘大学教授）	松村恵司（奈良文化財研究所長）	本橋裕美（愛知県立大学准教授）
渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）	綿貫友子（神戸大学大学院教授）	仁藤智子（国士館大学教授）

また、報告遺物の検討にあたって、下記の方々に格別のご協力をいただいた。

杉山 洋（龍谷大学教授） 間瀬 剛（三重県総合博物館（当時））

## 目 次

第1章 序言	
第1節 刊行の方針	1
第2節 刊行の体制	1
第2章 下園東区画の出土遺物	
第1節 建物遺構出土の遺物	2
第2節 土坑・溝の出土遺物	
(1) 斎宮II－1期を中心とする遺構出土遺物	6
(2) 斎宮II－2～4期を中心とする遺構出土遺物	12
(3) 斎宮III～IV期を中心とする遺構出土遺物	18
第3節 下園東区画を特徴づける遺物	
(1) 墨書き土器	20
(2) 刻書き土器	21
(3) 緑釉陶器・貿易陶磁	21
(4) 研類	21
(5) 祭祀具類	23
(6) 特徴的な土器類	23
(7) 金属製品・石製品・ガラス製品	23
(8) 製塙土器・土錐	23
第3章 下園東区画の出土遺物の検討	
第1節 第23次調査出土の唐鏡について	41
第2節 西加座北区画との比較について	
(1) 須恵器壺G	43
(2) 緑釉陶器	45
(3) 志摩式製塙土器	46
(4) 祭祀具類	49
(5) 墨書き土器・刻書き土器	49
(6) 研類	52
第4章 遺物編総括	
第1節 出土土器群からみた下園東区画	53
第2節 特徴的な遺物からみた下園東区画	53

## 表 目 次

第1表 出土遺物観察表(1)	26
第2表 出土遺物観察表(2)	27
第3表 出土遺物観察表(3)	28
第4表 出土遺物観察表(4)	29
第5表 出土遺物観察表(5)	30
第6表 出土遺物観察表(6)	31

第7表	出土遺物観察表（7）	32
第8表	出土遺物観察表（8）	33
第9表	出土遺物観察表（9）	34
第10表	出土遺物観察表（10）	35
第11表	出土遺物観察表（11）	36
第12表	出土遺物観察表（12）	37
第13表	出土遺物観察表（13）	38
第14表	出土遺物観察表（14）	39
第15表	出土遺物観察表（15）	40
第16表	『延喜斎宮式』にみる諸国調庸雜物と殿部司の年料	51

## 挿 図 目 次

第1図	下園東区画及び周辺調査区位置図	2
第2図	下園東区画の建物遺構出土の遺物（1）	3
第3図	下園東区画の建物遺構出土の遺物（2）	4
第4図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（1）	7
第5図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（2）	8
第6図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（3）	10
第7図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（4）	11
第8図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（5）	13
第9図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（6）	14
第10図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（7）	16
第11図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（8）	17
第12図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（9）	18
第13図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（10）	19
第14図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物（11）	20
第15図	下園東区画を特徴づける遺物（1）	22
第16図	下園東区画を特徴づける遺物（2）	24
第17図	下園東区画を特徴づける遺物（3）	25
第18図	第23次調査出土唐鏡実測図・写真	42
第19図	斎宮跡出土須恵器壺G実測図	44
第20図	斎宮跡出土須恵器壺G分布図	44
第21図	下園東区画と西加座北区画の綠釉陶器出土分布図	46
第22図	西加座北区画出土の綠釉陶器	47
第23図	下園東区画と西加座北区画の製塙土器出土分布図	48
第24図	下園東区画と西加座北区画の小型模造品出土分布図	48
第25図	下園東区画と西加座北区画の墨書き器・刻書き器出土分布図	50
第26図	下園東区画と西加座北区画の陶硯類（定型硯）出土分布図	50

## 第1章 序 言

### 第1節 刊行の方針

本書は、史跡斎宮跡東部で確認されている方格街区のうち、下園東区画からの出土遺物を総括的に報告するものであり、斎宮歴史博物館がすでに令和元年度に刊行した『斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編』(以下『遺構編』)というと対になるものである。

下園東区画については、『遺構編』の中で、区画の規格、外周の区画道路の変遷、区画内建物の変遷をA～F期に画期づけている。その中でも斎宮跡土器編年<sup>(1)</sup>のII-1期新相～2期古相に併行する下園東区画B期には、東接する西加座北区画でII-1期の古い段階から造営された、5間×2間の掘立柱建物を区画内に16棟を均等に配置した「寮庫」の構造が下園東区画でも敷行され、二区画が一体的に「寮庫」機能を有した段階があることが確かめられた。また、天長元(824)年～承和六(839)年にかけて斎宮全体が度会郡の離宮院に移設され、この空白期のち度会斎宮の火災に伴って、再び多気郡に斎宮が戻された後は、区画内の少なくとも南東部分は、南の柳原区画との機能的一体化が進んだとみられること、下園東区画E 1期 (II-3期新相～4期頃) に北半中央で区画溝 (SD913・1140) による細分が行われたことなど、区画全体の流れが示されている。

本書では、下園東区画の性格や変遷を示す出土遺物を報告するが、掲載する資料は、遺構出土遺物のうち残存状況の良いものや一括性の高いもの、あるいは主要遺構の時期決定の根拠となるもので、これまで未整理で公開されていないもの、および遺構外からの出土も併せて下園東区画の性格を反映すると考えられるものに重点を置き、これまでに刊行した概要報告に掲載されたものは、重複を最小限にするため、特に重要性が高いなど、今後の研究の良好な資料となるものに掲載をとどめた。

本書での遺物の時期の表現は、斎宮跡の土器編年による段階表記に拠り、「第II期第1段階」は煩雑さを避けるため「II-1期」のように記載している。

なお、出土遺物の写真図版は、遺構写真と合わせて別途刊行している<sup>(2)</sup>。

#### 【註】

(1) 「第3章 斎宮跡の土器編年の再検討」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』斎宮歴史博物館 2019

(2) 『斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 写真図版編』斎宮歴史博物館 2021

### 第2節 刊行の体制

本書の刊行に向けて、令和元年度から出土遺物の抽出や整理作業を行っている。

令和元年度から2年度にかけての刊行の体制は下記のとおりである。

館長 上村一弥 調査研究課 大川勝宏・山中由紀子・川部浩司・宮原佑治

八木光代・森本周子・中西宏美

また、刊行にあたっては「斎宮跡調査研究指導委員会」の指導と助言を受けている。委員の構成は下記のとおりである(五十音順 敬称略)。

浅野聰(都市工学)・稲葉信子(文化遺産学)・小澤毅(考古学)・金田章裕(歴史地理学)・京樂真帆子(女性史)・黒田龍二(建築史学)・仁藤智子(古代史・令和2年度から)・本橋裕美(国文学)・増渕徹(文化財学)・松村恵司(考古学)・綿貫友子(中世史)・渡辺寛(古代史)

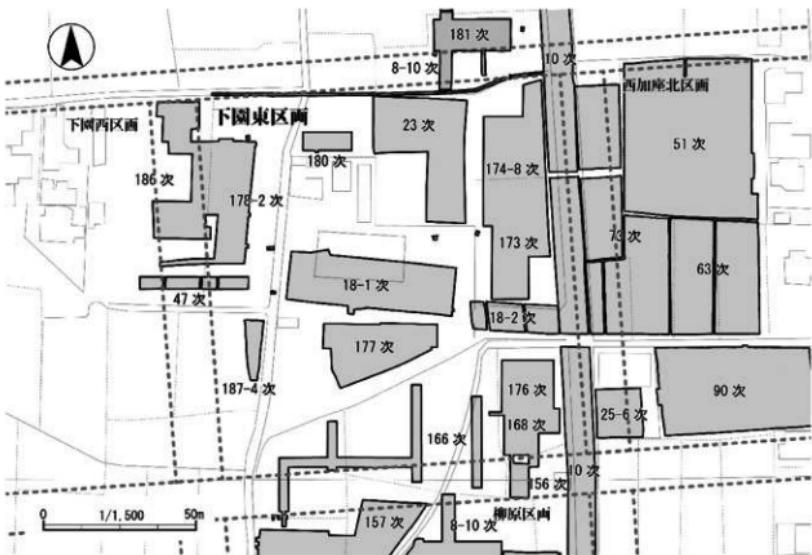
## 第2章 下園東区画の出土遺物

### 第1節 建物遺構出土の遺物

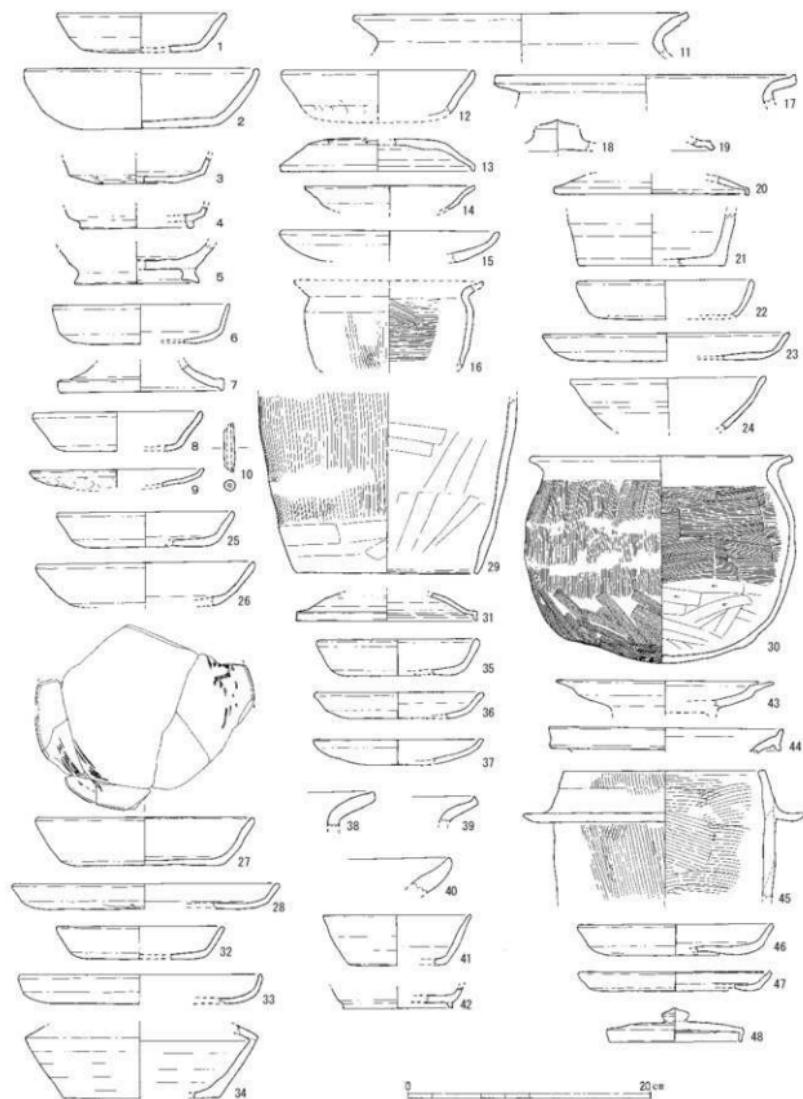
下園東区画は、『遺構編』において、円墳である第174-8次調査のS D11139以降、奈良時代後期に遡る可能性のある土坑以外は、次のような区画内の変遷を想定している。まず斎宮跡の土器編年<sup>11)</sup>の段階区分でII-1期古～中相にあたる下園東A期から建物遺構が現れ、II-1期新相～2期古相に、約400尺四方を基本とする方形区画内に5間×2間の東西棟の掘立柱建物が11棟以上規則的に配置され、東接する西加座北区画と並列して「寮庫」の機能を有したとしている。その後、天長元（824）年に斎宮が度会郡の離宮院に移転した際には、下園東区画の規則的な建物配置は解体され、承和六（839）年に度会郡の斎宮が火災に遭い、再び多気郡に戻された下園東C期には、新設された区画道路により、区画の一部が南接する柳原区画に取り込まれていたと考えられている。このC期以降は、区画全体に及ぶ規則的な建物配置はみられなくなる。出土土器のII-4期新相～III-1期に相当すると考える下園東E期には、区画内部をさらに分割するような溝S D913・1140が現れ、区画内の各所に主たる建物とそれに付属する建物の群が、下園東区画の外周道路に沿って複数成立し、III-2～3期の下園東F期以降、建物は消失していくとみている。

これらの建物遺構から出土した遺物は、ごく一部を除いて大半が土器類である。本節では、この区画の主たる掘立柱建物の柱穴から出土した遺物のうち、図化できたものを紹介していく。

**S B1170(1・2)** 第23次調査で検出した4間×2間の南北棟で、柱間寸法は10尺（3.0m）を基本とする。下園東A期に属し、当該期の区画内最大規模の建物である。同じ調査区のS B1160・1180とは棟方向が直交し、同時期と考えている。調査時期が古く、出土遺物が柱穴掘形出土か柱痕跡出土かの鑑別がつけられないが、(1)の土師器杯Aは型式から斎宮跡の土器編年でII-1期中～新相、(2)の土師器碗A1はI-3期新相～II-1期古相のものと考えられる。いずれも器表面の磨滅が進んでいる。

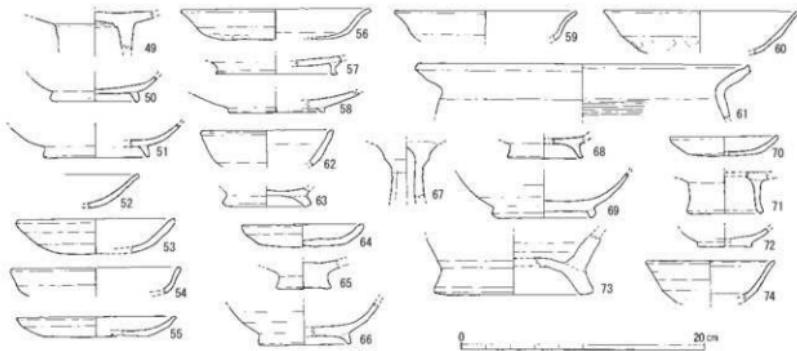


第1図 下園東区画及び周辺調査区位置図（1500分の1）



第2図 下園東区画の建物遺構出土の遺物（1）

S B1170 (1・2)	S B1180 (3～5)	S B1160 (6・7)	S B935 (8～10)	S B10873 (11～13)	S B930 (14～21)	S B11130 (22～24)
S B10490 (25～31)	S B10887 (32)	S B10630 (33・34)	S B900 (35～42)	S B932 (43～45)	S B10511 (46)	S B10512 (47・48)



第3図 下園東区画の建物遺構出土の遺物（2）

S B931 (49~56) S B924 (52~55) S B929 (56~58) S B933 (59~61) S B921 (62~63) S B11150 (64~66) S B11140 (67~69)  
S B11149 (70~72) S B10882 (73) S B11170 (74)

**S B1180 (3~5)** 第23次調査で検出した、S B1170に直交する桁行4間以上、梁間2間の東西棟である。図化できたのは須恵器のみだが、(3)の杯A、(5)の胴部が卵形になる長頸壺などは折戸10号窯式期のものとみられよう。

**S B1160 (6~7)** 第23次調査で検出した、これもS B1170と直交する東西棟で、第174~8次調査区まで延びれば桁行5間、梁間2間の建物となる。第180次調査区のS B10633とともに柱筋を描えている。土師器杯A (6)は底部から口縁の立ち上がりが強く、型式的にはII~1期古~中相のものとみられる。(7)は焼成がやや軟調な須恵器の器台脚部とみられるが、調査時に後世の遺物が混入した可能性がある。

**S B935 (8~10)** 第18~2次調査で検出した、A期に属するとみられる3間×2間の東西棟である。B期とみられるS B930の柱穴に重複されている。土師器杯A (8)はII~1期中~新相のものだが、土師器皿A (9)は型式的にはII~3期以降のもので、調査時の混入とみられる。

**S B10873 (11~13)** 第178~2次調査で検出した、A期に属するとみられる3間×2間の東西棟である。出土遺物は、土師器杯A (12)はII~1期中相のもの、須恵器蓋(13)は鳴海32号窯式期のものとみられるが、いずれも柱掘形からか柱痕跡からのものか判断できない。

**S B930・11130・10490・10887・10630 (14~34)** 下園東区画B期の「寮庫」を構成する5間×2間の東西棟から出土した遺物である。第18~2次調査のS B930出土遺物(14~21)のうち、土師器杯A (14)はII~3期の型式であり、外表面をロクロケズリで調整する無釉陶器壺(21)は調査時の混入品とみられる。第174~8次調査のS B11130出土遺物(22~24)のうち土師器杯A (22)と皿A (23)はII~1~2期古相のものである。須恵器壺(24)は底部を欠損するが、口唇部が肥厚し、斎宮跡ではあまり類例を見ないものである。第177次調査のS B10490出土遺物(25~31)では、土師器杯A (25~27)・皿A (28)はII~1期中相の型式である。(27)の内面には墨痕もみられる。土師器壺A (30)は破片の一部が柱痕跡からも出土していることから、概要報告ではS B10490に先行するS B10491(A期)の遺物が混入したと判断して建物時期をII~2期としているが、(30)も底部外表面はハケ調整し、古い調整技法を残しており、出土遺物全体でII~2期以降とみられる要素は見受けられない。須恵器蓋(31)も口縁の屈曲が強く、折戸10号窯式期のものとみられるので、全体にII~1期中相頃のものとみて矛盾はない。第178~2次調査のS B10887柱穴から出土した土師

器杯A(32)はII-1期中相頃のもの、第180次調査区のSB10630出土遺物のうち土師器皿A1(33)は外面をヘラケズリしており、I-3期新相～II-1期のものとみられる。以上の状況から下園東B期に規則的に配置される5間×2間の掘立柱建物出土遺物は、後世の混入遺物も若干みられるものの、斎宮の土器編年でII-1期中相を中心としており、遺構の実年代観も8世紀末から9世紀初頭とすことができ、「寮庫」の成立を度会郡への斎宮移転に先行する時期と考えることができるだろう。

**SB900(35～42)** 第18-1次調査で検出したC期の5間×2間の東西棟で、柱擁形が一辺約1m、柱間がおよそ8尺の、区画内では大型の建物である。土師器杯A(35)・皿A(36・37)は器壁も厚く、II-1期中～2期古相とみていいだろう。土師器盤(40)は細片になっているため、正確な口径は測れないが、おそらく径30cm以上の大型の皿の形態になるものだろう。須恵器杯A(41)・杯B(42)はいずれも折戸10号窯式期のものとみられる。

**SB932(43～45)** 第18-2次調査で検出した区画南東部の5間×2間の東西棟である。黒笛90号窯式期の灰釉陶器段皿(43)が出土している。土師質の土管(45)はジョイント部分に羽釜状の跡がある。内外面を粗いハケ調整する。使用痕跡は判別できない。土管は、下園東区画では第10次調査で、区画東辺道路の西側溝であるSD520からも出土している。

**SB10511(46)・10512(47・48)** 第177次調査の東辺で検出している。SB10512は第18-2次調査のSB932と南側の柱筋を描えている。土師器皿A2(46・47)はII-1期中相～2期古相の型式である。灰釉陶器蓋(48)は黒笛14号窯式期のものであろう。

**SB931(49～51)** 第18-2次調査で検出した3間×2間の南北棟である。須恵器高杯(49)の他、灰釉陶器で折戸53号窯式期とみられる椀(50)・黒笛90号窯式期後半とみられる椀(51)が出土している。(50)は混入品であろうか。

**SB924(52～55)** 第18-2次調査で検出した3間×2間の南北棟とみられる建物である。土師器杯A(52)・皿A(55)はII-3期中相頃のもの、皿A2(54)はII-1～2期のものである。『遺構編』では大型建物SB10330と直角のL字形配置となることから、下園東D期としている。土師器杯D(53)は判別が難しいが、III-1期頃の遺物の混入だろうか。

**SB929(56～58)** 第18-2次調査で検出した桁行4間以上、梁間2間の東西棟である。II-3期の土師器杯A(56)が出土しており、下園東D期に位置づけている。

**SB933(59～61)** 第10次・18-2次・173次調査にまたがって検出した桁行5間以上、梁間2間の東西棟である。土師器杯A(59)・椀A2(60)はII-3期、土師器甕C(61)はII-1～2期のものである。建物は下園東E1期に位置づけており、この期では区画最大の建物である。

**SB921(62・63)** 第18-1次調査区の南東隅で検出した、東西2間以上南北2間の建物である。図示した遺物はいずれも黒色土器A類の椀でII-4期～III-1期頃のものであろうか。

**SB11150(64～66)** 第174-8次調査で検出した5間×2間の東西棟である。土師器皿D(64)・ロクロ土師器小型杯(65)はIII-2期頃のものである。無釉陶器椀(66)は第2形式の山茶椀とみられる。『遺構編』では下園東E期に置いたが、若干後出のものである可能性がある。

**SB11140(67～69)** 第174-8次調査で検出した5間×2間の東西棟で、下園東区画E～F期では最大の規模になる。京都系土師器である高杯(67)、東山72号窯式期の灰釉陶器椀(68)、第4型式の無釉陶器椀(山茶椀69)が出土している。

**SB11149(70～72)** 第174-8次調査で検出した3間×2間の東西棟である。III-2期頃の土師器皿D(70)・杯B2(71)、ロクロ土師器杯(72)が出土している。E期より若干後出するかもしれない。

**SB10882(73)** 土師器の台付鉢(73)は、破片の断面観察から高台部を成形し、その後体部から口縁部を積み上げる成形法を取っている。胎土にも砂粒が多く全体に粗雑な作りである。類例が少ないが、斎宮III-3期の基準資料であるSK1074(第20次調査)によく似た成形法の台付椀がある。

**SB11170(74)** 第10次から174-8次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟で、大宰府分類で白磁V類の小椀(74)が出土している。斎宮跡ではIII-2期～IV期にかけての遺構で出土する遺物である。

## 第2節 土坑・溝の出土遺物

### (1) 斎宮II-1期を中心とする遺構出土遺物

今回、出土遺物を図化できた遺構では、斎宮編年のII-1期以降で、下園東区画の時期区分ではA・B期に当たるもののが最も多い。

**S K1156 (75~77)** 第23次調査で検出した、直径約0.9mの円形の土坑である。ほぼ完形に復元できる須恵器鉢(75)、土師器杯A(76)・盤(77)が出土しており、あまり一般的ではない(77)などを伴っていることから埋納的な遺構であつた可能性がある。土師器杯A(76)は厚めの器壁で、底部外面をヘラケズリするb手法によっており、形式的にI-3期まで遡る可能性がある。しかし、土師器盤(77)は、I-3期新相～II-1期古相のものは精良で赤く発色する胎土を用い、外面をヘラミガキし、しばしば把手を付けるが、(77)は器表面の摩耗が進んでいるものの外面は底部附近をヘラケズリ、体部上半はナデ調整か、あまり丁寧ではないヘラミガキとみられ、把手もないことから後出的なものとみて、おおむねII-1期古～中相と考えられる。須恵器鉢(75)は口径14.7cm、高さ8.0cmを測るが、斎宮跡では出土例は乏しい。色の明るい胎土でやや軟調な焼成となっている。美濃須衛窯の製品であろうか。

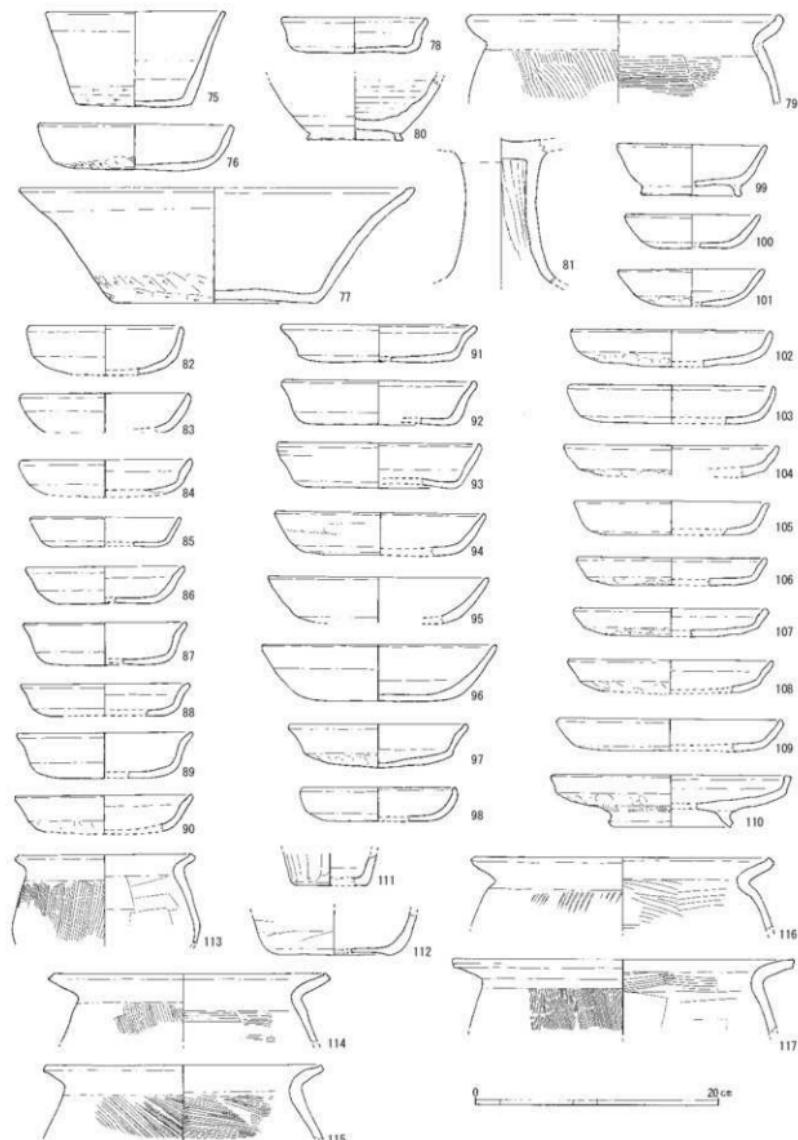
**S K11205(78~81)** 下園東区画南東の第10次調査で検出した、直径約2.8mの不整形円形土坑で、区画東辺道路西側溝のS D520に沿って道路内に掘削されている。斎宮II-1期古相の形式の土師器杯A(78)や折戸10号窯式期のものとみられる須恵器長頸壺(80)などが出土している。側溝際とはいえ道路上に掘削されているため、後代に掘削された土坑にS D520埋土の遺物が混入している可能性はある。

**S D520(82~134)** 第10次調査で検出した、下園東区画と西加座北区画間の区画道路S F11209の西側溝にある。この側溝がいつまで機能したかは不明で、『遺構編』では下園東C～D期頃までは何らかの形でS F11209は存続した可能性があるとしている。S D520の出土遺物には、下園東区画の南北中心軸付近で路面上まで非常に多数の不整形土坑が掘削されており、S F11209が後続するS F11210に変遷した後の遺物の混入も若干みられるが、大部分はII-1～2期の土器類で、大型の破片も多い。土師器杯G(82・83)のうち(83)は、残存率が少ないものの径高指数が40.23と扁平な器形であり、II-1～2期のものとみられる。杯A(84～94)は器壁が厚く、平坦な底部から強い屈曲で口縁部に向かって立ち上がる器形で、II-1期古～中相のものとみられ、同じ杯Aでも(97)はII-1期新相～2期にかけてのものとみられる。土師器皿A1(102～104)・A2(105～109)も同様にII-1期古相～2期までの幅がみられる。このように方格街区の区画道路側溝が、造営期とあまり間をあけない時期の遺物を伴って埋没している事例は、南接する柳原区画の東辺道路側溝であるS D530でもみられる。土師器杯D(98)は類例の乏しい器種だが、内寄する口縁部を持ち、外面はナデ調整で一部ヘラケズリを施した可能性もある。土師器短頸壺(118・119)もこれまで類例の乏しい器種である。砂粒の少ない精緻で橙色の胎土である。土管(120)は下園東区画では第18-2次調査のS B932、その他にも史跡西部古里地区での第39次調査のS K2250(奈良時代)や、斎宮跡II-2期古相の基準資料でもある東加座地区の第77次調査のS K5200にみられる。

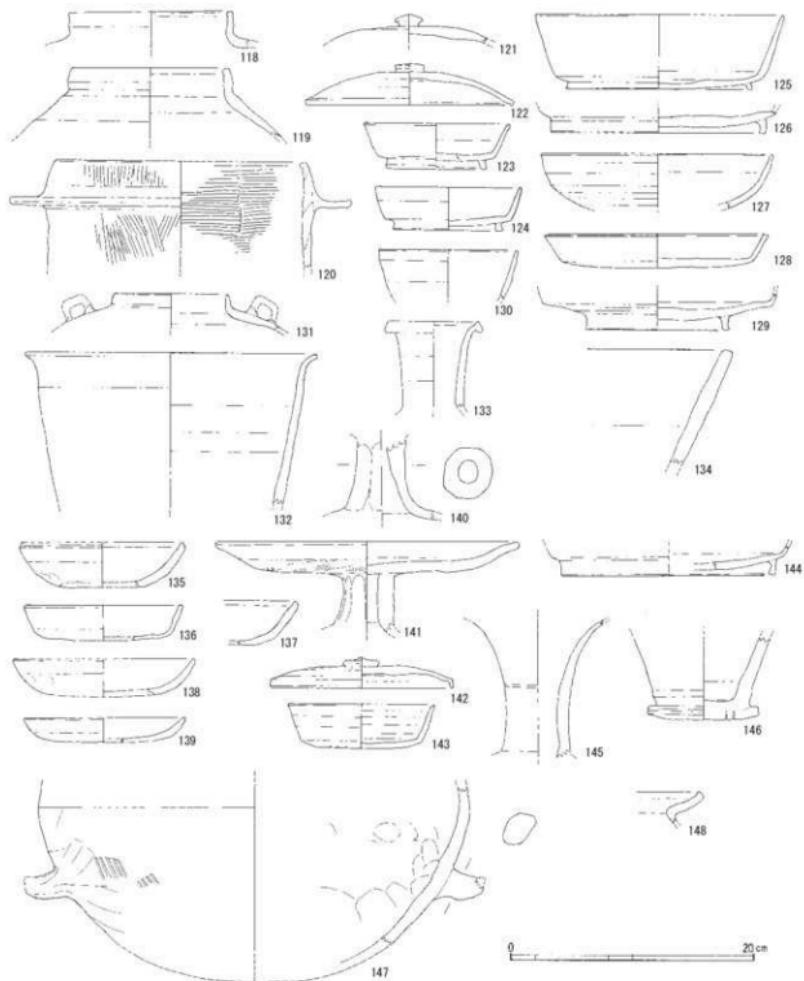
須恵器では、蓋(121・122)・杯B(123～126)・台付盤(129)の器形から、鳴海32号窯式期～折戸10号窯式期のものとみられる。口径が約24cmに復元される深鉢(132)は、II-1期頃ではこれまで類例を見ない器種である。器壁が薄く精緻な胎土を用いている。(134)も類例が乏しく、大型の盤状の器形になるとみられるが、口縁端部を丸く収めていること、陶器質ながらやや粗鬆な胎土であることから、III期の遺物が混入した可能性もある。

**S D515(135～146)** S D520の北側延長にある。S D520との間に擾乱土坑があり、これまで分けて遺物を収納してきたことから、そのまま遺構番号を残している。S F11209西側溝にあたるが、方格街区北辺道路の南側溝に接続することなく、約5mの間隔をあけている。

図化した土師器杯G(135)・杯A(136～138)・皿A1(139)・高杯(140・141)の他、須恵器でも蓋(142)・杯A(143)・杯B(144)はII-1～2期のものあるいは長用したものが同時に埋められたとみて矛盾はない。ただ単純口縁の長頸瓶(145)は7世紀まで遡る可能性があり、後述する(621)同様、第174-8次調査で検出した円墳SD11139に関連するものが混入した可能性が考えられる。



第4図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（1）  
SK1156 (75~77) SK11205 (78~81) SD520 (82~117)



第5図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（2）  
SD520 (118~130) SD515 (135~146) SD529 (147) SD1627 (148)

**S D529(147)** 下園東区画南辺道路S F11211の北側溝で、第10次調査で検出している。検出長は長くないが、図化できる出土遺物としては、丸底になるとみられる須恵器鍋B(147)がある。柳原区画の東辺区画道路側溝S D530からほぼ完形の鉄鉢形の須恵器鉢が出土しており、これらは関連するものかもしれない。

**S D1627(148)** 第25~6次調査で検出した、S F11209の東側溝である。出土遺物は西側溝に比較して少ないと、口縁端部を上方へわずかに擒み上げる土師器甕Cの口縁部(148)が出土している。

**S K10888(149~190)** 下園東区画北西部の第178~2次調査で検出した、5.6m×4.4m、深さ0.2mの大型土坑だが、重複するS K10889も含めて複数回の掘削と土器の廃棄が想定される。『遺構編』ではA期に属すとしている。土師器杯G(149)は径高指数0.26とII~I期の幅に収まるものである。土師器杯A(150~161)は器壁が肉厚で、平坦な底部からの屈曲が明瞭なII~I期古~中相の形式のものが多い。(156)には内面に焼成後の線刻が三本みられる。土師器椀A 2は外面をヘラミガキする(162)とナデ・オサエで調整する(163)がある。同じく土師器椀である(164)は、口唇部をわずかに肥厚させており、金属器を意識した形態かもしれない。土師器平底鉢はI~3期新相~II~3期にかけて、主に方格街区で見つかっている。(177)は、外表面をヘラケズリで調整する。

須恵器は杯A(178)・杯B(179~183)・蓋(184~185)は、いずれも折戸10号窯式の範疇に収まるものであろう。(178)の口縁部内側には灯心による油煙が付着する。皿A(187)は、内面に焼成前の「安」の線刻がある。同様の刻字は伊賀国府跡で須恵器蓋が2例見つかっている他、伊賀市唐木谷遺跡・森脇遺跡・中出向井遺跡でも見つかっている<sup>(2)</sup>。また伊賀国府では(187)によく似た須恵器皿も出土しており、伊賀との関連がうかがえる資料である。

この他、志摩式製塙土器(188)や鉄製品(189~190)が出土している。鉄製品は被断面の形状から刀子と考えられる。

**S K10883(191~195)** 第178~2次調査で検出した、1.0m×0.9m、深さ0.15mの略円形の土坑である。土師器杯A(191)・椀A 2(192)や、高杯(193)など、II~I期の土器が出土しており、A期に位置づけている。

**S K11200(196~201)** 第10次調査の区画道路西側溝S D520に沿って集中的に掘削された土坑の一つで、長径は約1.1mとみられるが、遺構の重複のため正確な大きさはわからない。II~I期新相~2期の土師器杯A(196)・椀A 2(197)・皿A(198)・平底鉢(199)が出土している。土師器甕A(200)は球形の体部の外表面下半をヘラケズリし、頭部から「く」の字の強い屈曲で口縁部を作る。II~I期でも後出のものとみられる。焼成がやや軟調な須恵器広口壺(201)が出土しており、口縁のゆがみが大きい。A期に位置づけている。

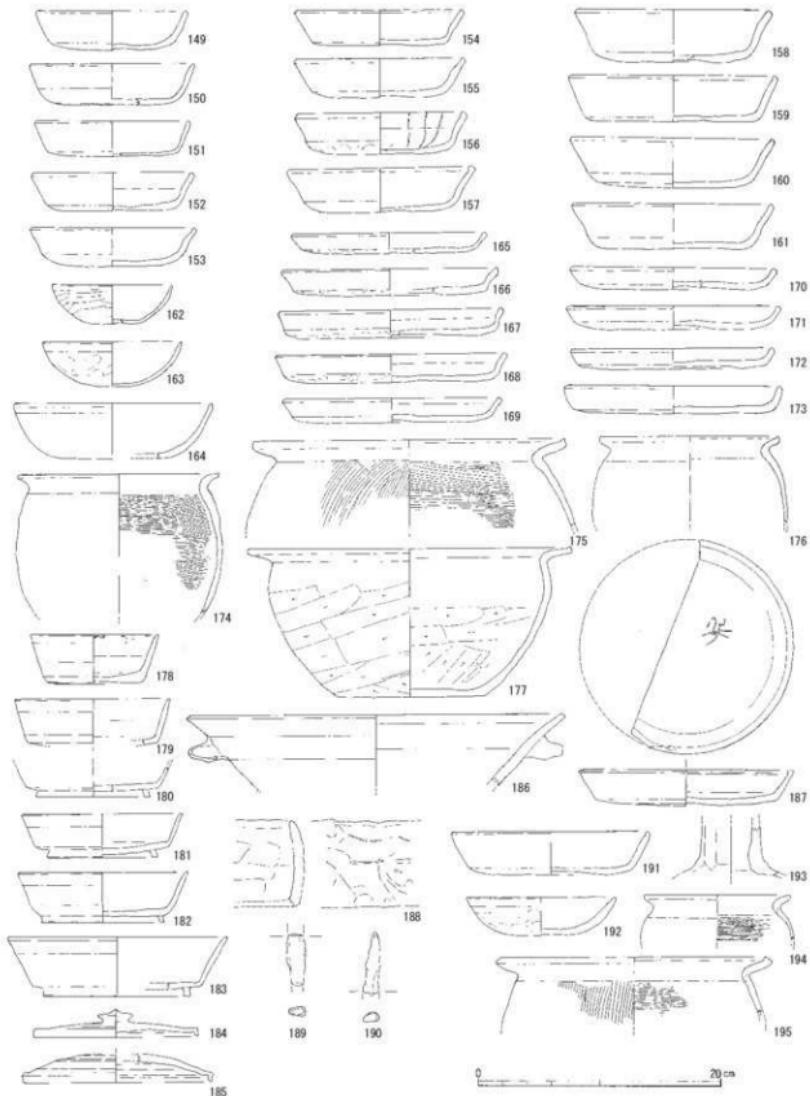
**S K526(202~206)** 下園東区画の南東部の第10次調査で、区画道路側溝であるS D520に重複して検出した、東西5.0m、深さ0.3~0.5mの不整形の土坑である。II~I期の土師器杯A(202~203)・皿A 1(204)がある。(206)は大型の土師器瓶である。外表面をタテハケとケズリ、内表面をヨコハケとヘラケズリ調整する。須恵器杯B(205)は折戸10号窯式期のものとみられる。S K526にはS D520埋土の遺物が混入した可能性はあるが、A期に位置づけている。

**S K11197(207~212)** S K11200と同様、第10次調査のS D520に重複して区画道路内に掘削された土坑群の一つである。土師器杯A(207~208)・椀A 2(209~210)・高杯(211)はII~I期中相の形式とみられる。須恵器杯B(212)も折戸10号窯式期のものとみてよいだろう。A期に位置づけている。

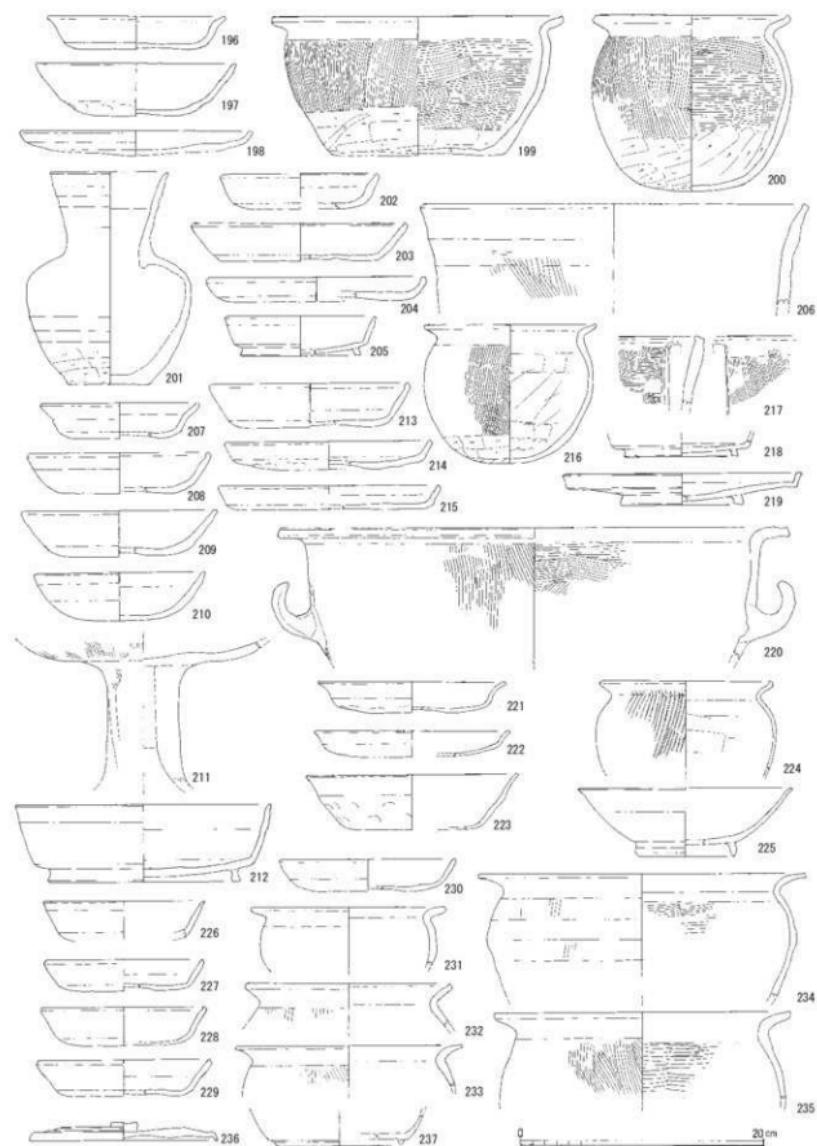
**S K527(213~220)** 第10次調査で検出した、一辺約2.5m、深さ約0.15mの方形の土坑である。下園東区画南東隅に単独で掘削されており、遺構の重複はない。II~I期中相の土師器杯A(213)・皿A 2(214~215)の他、土師器風炉(217)がある。風炉は第98次調査でII~3期とみられるものが出土している他は例がない。鉢形の体部に細長い方形の透かし穴を四方向に設けるものであろう。須恵器杯B(218)・台付盤(219)はいずれも折戸10号窯式期のものとみられる。A期に位置づけている。

**S D291(221~225)** 第10次調査で検出した、方格街区北辺道路の南側溝にあたる溝である。何度も再掘削されていてみられ、II~I期~III期に及ぶ遺物が出土しているが、遺構の初現はII~I期とみられる。土師器皿A 2(222)や椀A 2(223)は器壁も薄くII~3期の形式で、灰釉陶器椀(225)は黒窯90号窯式期の後半の型式である。

**S D901(226~237)** 下園東区画の中央部、第18~1次調査の北西隅で検出した、長さ7.5m、幅0.5mの溝である。図示できた遺物は、土師器杯A(226~229)・皿A 1(230)などはいずれもII~I期の形式に収まる。須恵器蓋(236)は、



第6図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（3）  
SK10888 (149~190) SK10883 (191~195)



第7図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（4）

SK11200 (196~201) SK526 (202~206) SK1197 (207~212) SK527 (213~220) SD291 (221~225) SD901 (226~237)

II-2期古相の基準資料であるSK1045に類似した資料があるため、遺構の時期はII-2期古相併行まで下る可能性がある。SD901はC期と考えられる大型のSB900と位置的に重複するが、出土土器の年代観では懸隔があり、同時期のものとは考えにくい。

**SK10889(238~245)** 第178-2次調査で検出した、1.6m×1.0m、深さ0.3mの略楕円形土坑で、大型のSK10888と重複している。II-1期中～新相の土師器杯A(238)や皿A2(239・240)・高杯(241)とともに、SK10888と同様、土師器の平底鉢が複数出土している点が注目される(242～244)。遺構番号の上では二つの土坑に分けているが、本来は同一かあるいはほとんど時期差がないものと考えられる。

**SK10865(246~253)** 第178-2次調査で検出した、1.7m×1.2m、深さ0.15mの不整形土坑である。形式的にII-1期新相とみられる土師器杯A(246)・杯B(247)・皿A1(248)・甕A(249・250)がある。鳴海32号窯式期とみられる須恵器蓋(252)もあるが、A期に位置づけられる。胸部中央が若干膨らむ小型の土錐(253)も出土している。

**SK10874(254~261)** 第178-2次調査で検出した、南北1.5mの不整形土坑で、土師器杯A(254)はII-1期中相ころのものとみられる。椀A2(255)は器壁が薄く外面を丁寧にヘラケズリし、砂粒の小さなきめの細かい胎土で、堅敏な焼成だが外面に黒斑がみられる。斎宮周辺以外からの搬入品と考えられる。型式的には平安京編年の京II期中～新相に近い<sup>(2)</sup>。皿A2(256・257)はII-1期新相～2期のもの、須恵器蓋(259)は折戸10号窯式期のものであろう。小型の土錐(261)も出土している。B期に位置づけている。

**SK11181(262~265)** 第23次調査の南半部で検出した、1.5m×1.3m、深さ0.15mの楕円形土坑である。土師器椀A(262・263)の他、須恵器蓋(264)、灰釉陶器椀(265)がある。(265)は口縁部を端反りさせる黒雀14号窯式期のものである。B期に位置づけられる。

**SK11204(266~268)** 第10次調査で検出した、南北2.9m東西1.5m以上の不整形土坑である。区画道路S F11209の西側溝SD520とSD525の交点部分に接する。SD520でも出土している土師器短頸壺(266)がみられる。土師器甕A(267)は口縁部が水平に近くなり、やや新しい要素と考えられることから、B期に位置づけられる。

## (2) 斎宮II-2～4期を中心とする遺構出土遺物

**SK1177(269~276)** 第23次調査の南半で検出した、2.1m×1.8m、深さ0.3mの楕円形土坑である。土師器皿D(269)・椀A2(270)・皿A(271・272)はいずれもII-2期に位置づけられる。須恵器の高脚の盤(274)は黒雀14号窯式に相当するだろうか。土師器の型式的に幅もみられるため、遺構はB～C期の幅の中に位置づけている。中型の土錐(276)が出土している。

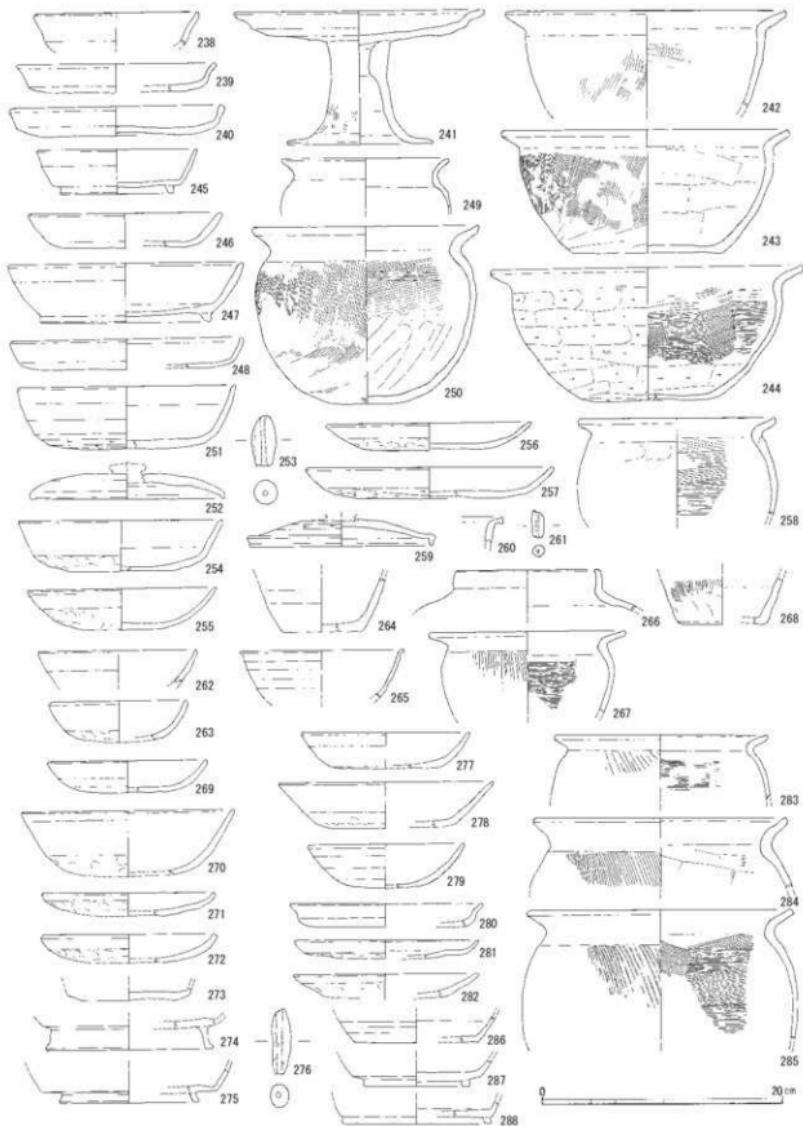
**SK11136(277~288)** 第174-8次調査の北端近くで検出した、2.5m×2.0mの略円形土坑である。C期のSK11137に重複される。土師器杯A(277・278)・椀A(279)・皿A(280～282)・甕A(283～285)はII-2期～3期の型式幅がある。B～C期の幅の中に位置づけている。

**SK1184(289~292)** 第23次調査南半で検出した、2.3m×1.5m、深さ0.1mの不整形土坑である。図示した土師器皿A(289)や須恵器蓋(290)・皿(291)・短頸壺状になる甕C(292)の他にII-3期の土器片もみられ、斎宮が度会郡の離官院に移転した断絶期からC期にかけてのものとみられる。

**SK1157(293~297)** 第23次調査北半で検出した1.8m×1.6m、深さ0.3mの楕円形土坑である。図示した須恵器杯A(293)・杯B(294・295)・蓋(296)、志摩式製塙土器(297)の他に灰釉陶器片などが出土している。斎宮が多気郡に戻されたC期に位置づけている。

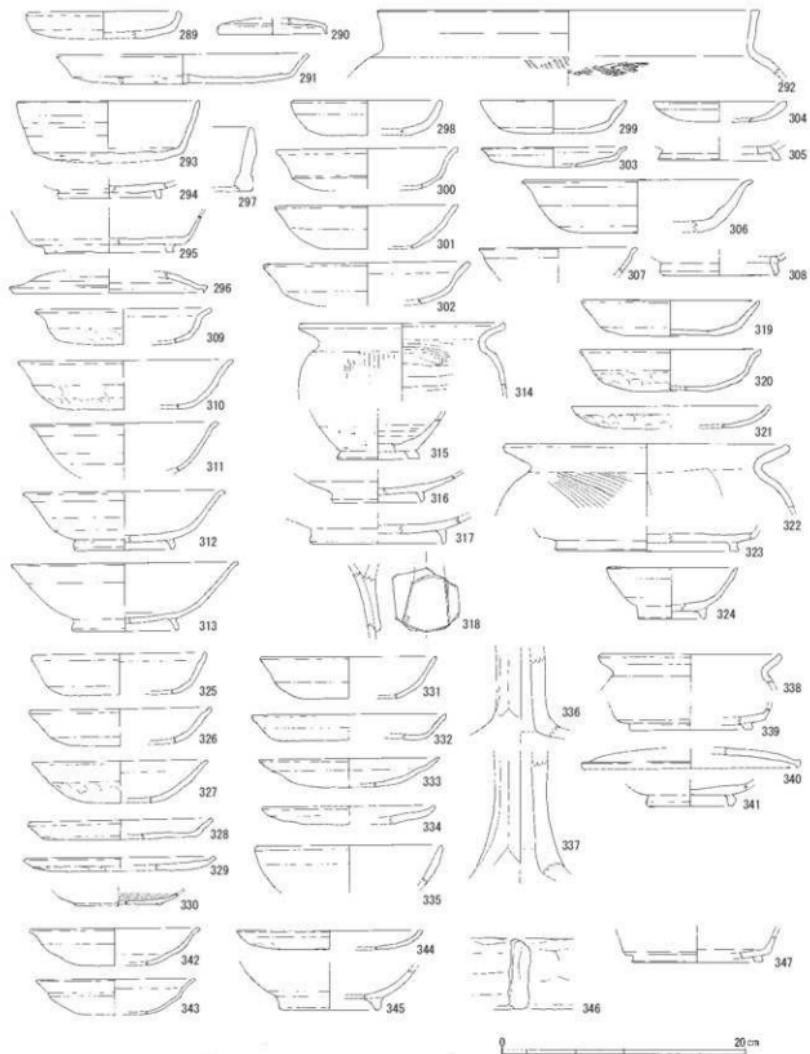
**SK919(298~308)** 第18-1次調査の北東隅で検出した、4.3m×1.7m、深さ0.6mの不整形土坑である。II-2期の土師器杯A(298・299)、II-3期古相の土師器杯A(300～302)がある。灰釉陶器椀(307・308)は小片ではあるが黒雀9号窯式期のものであろうか。C期に位置づけている。

**SK11202(309~313)** 第10次調査で区画道路S F11209の西側溝SD520に沿って道路上に掘削された土坑群の一つである。1.2m×0.8mの不整形形を呈する。II-2期の土師器杯A2(309)・椀A2(310)の他、黒雀9号窯式期の灰



第8図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（5）

SK10889 (238~245) SK10965 (246~253) SK10874 (254~261) SK1181 (262~265) SK11204 (266~268) SK1177 (269~276)  
SK11136 (277~288)



第9図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（6）

SK1184 (289~292)	SK1157 (293~297)	SK919 (298~308)	SK11202 (309~313)	SK1056 (314)	SK11173 (315~318)
SK1153 (319~324)	SK1166 (325~330)	SK905 (331~341)	SK925 (342~347)		

軸陶器椀(311～313)がある。C～D期の幅の中に位置づけられる。

**S K10876 (314)** 第178-2次調査の北東部で検出した、東西2.0m×南北1.6mの楕円形土坑である。重複するC期のS K10875と出土遺物が混交している可能性がある。図示したのはII-2～3期のものとみられる土師器甕A(314)である。本土坑もC期に位置づけられる。

**S K11173 (315～318)** 第174-8次調査のほぼ中央で検出した、東西2.7m×南北1.9mの楕円形土坑である。須恵器長頸甕(315)はII-1期まで遡る可能性があるが、灰釉陶器椀(316・317)と縁釉陶器把手付瓶の把手部(318)は黒窯9号窯式期のものである。C期に位置づけられる。

**S K11153 (319～324)** 第23次調査の北半で検出した、2.5m×1.7m、深さ0.1mの不整形土坑で、II-2期の土師器杯A(319・320)・皿A(321)が出土している。灰釉陶器の小椀(324)は、折戸53号窯式期以降のもの可能性がある。C～D2期の幅の中に位置づけている。

**S K11166 (325～330)** 第174-8次調査のほぼ中央で検出した、1.1m×0.8m、深さ0.2mの隅丸方形の土坑である。土師器杯A(325・326)・椀A(327)・皿A(328)はII-1期新相～2期の形式のものだが、土師器皿A(329)や黒色土器A類椀(330)はII-3期中～新相からII-4期のものである。C～D期の幅の中に位置づけられる。

**S K905 (331～341)** 第18-1次調査の北西端で検出した1.4m×1.1m、深さ0.1mの楕円形土坑である。図示した土師器杯A(331)・皿A(332～334)・高杯(336・337)はII-2期～3期新相のもの、土師器甕A(338)はII-3～4期のもの、灰釉陶器椀(341)は折戸53号窯式期のものとみられる。C～D期の幅の中に位置づけられる。

**S K925 (342～347)** 第18-2次調査で検出した1.9m×1.6m、深さ0.15mの隅丸方形の土坑である。土師器杯A(342・343)・皿A(344)はII-3期新相とみられるが、土師器椀B(345)はIII-1期から出現するとみられ、この他にも折戸53号窯式期まで下るとみられる灰釉陶器片がある。D期のS B924の柱穴が重複しているため、これらからの調査時の混入があるかもしれない。

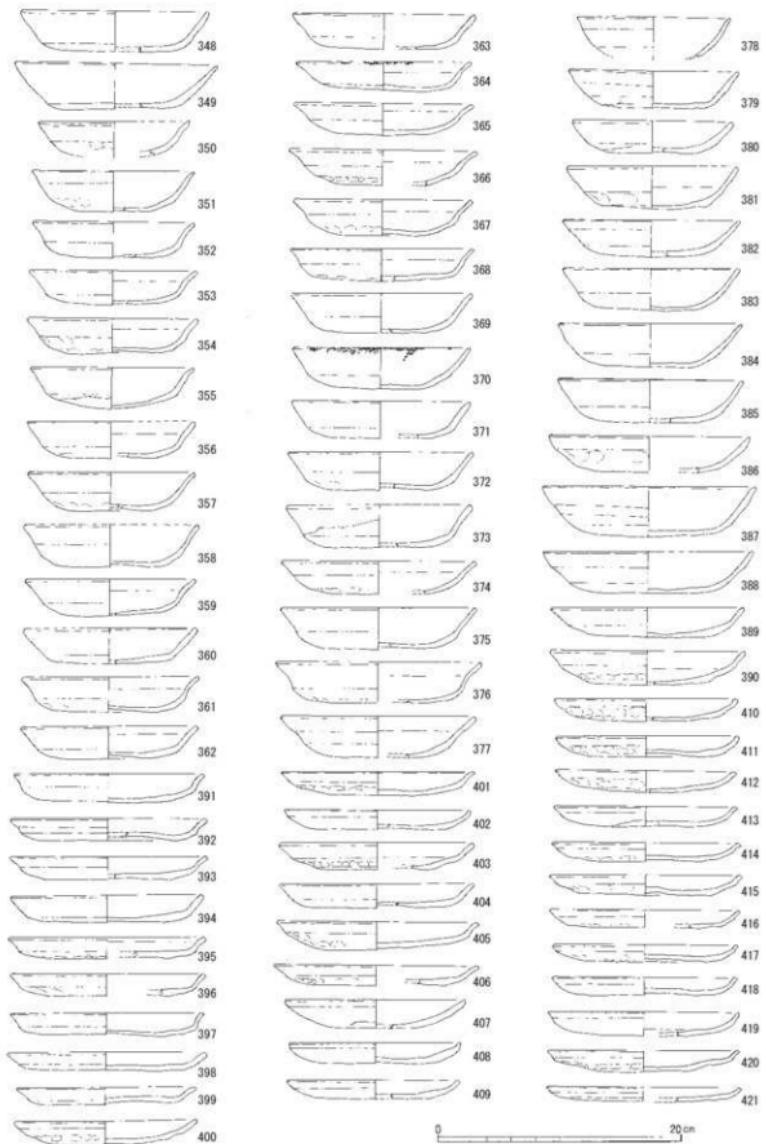
**S K926 (348～464)** 第18-2次調査で検出した2.0m×1.6m、深さ0.15mの隅丸方形の土坑である。遺構の規模に比べ遺物の出土量は多く、遺物整理箱で15箱分の出土をみた。土師器杯AはII-1期まで遡る可能性があるもの(348～350)も含むが大部分(351～377)や土師器椀A(378～390)はII-2期～3期古相のものである。皿Aも(391)などはII-2期に含まれるとみられるが、大部分(392～421)はII-3期の型式に属する。なお、土師器杯A(364・370)は口縁端部に油煙が付着している。

その他の土師器には台付椀になるとみられる(422)・台付杯(423～425)・蓋(426)・壺(427)・高杯(428～430)・甕A(431～437)・甕C(438・439)・壺(440)・平底鉢(441)といった多彩な器種がある。平底鉢(441)は体部から底部の境が不明瞭になっていく最終的な形態のものであろう。

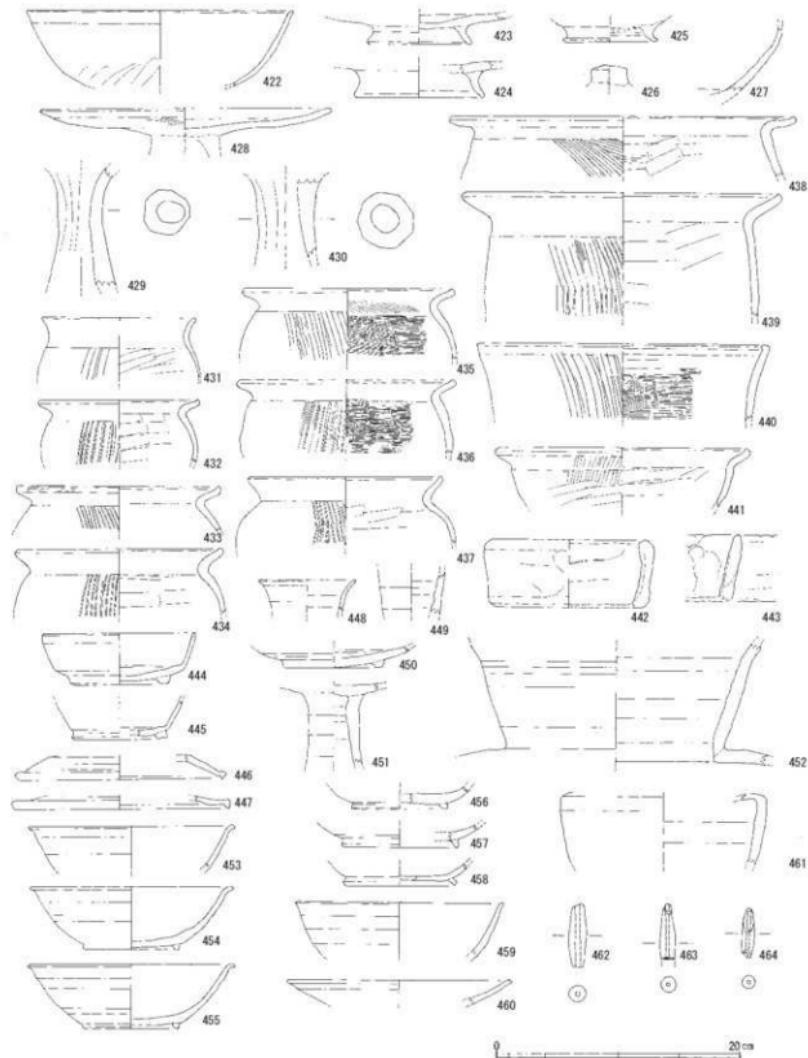
須恵器には杯B(444・445)・蓋(446・447)・台付盤(450)・高杯(451)・壺(452)があるが、多くはII-1～2期のものが混入しているとみられる。灰釉陶器椀は黒窯14号窯式期のもの(453～456)も目立つが、黒窯9号窯式期のもの(457・458)や東山71号窯式期まで下る可能性のある深椀(459)もみられる。調査時の混入であろうか。

この他、志摩式製塙土器(442・443)や中型の土鍤(462～464)も出土している。S K926は、おおむねC～D期の幅を持つ、下園東区画有数の廐棄土坑と考えられるが、第18-2次調査区には、C期のS B932、D1期のS B10330、D2期のS B929と9世紀後半の下園東区画の最大級建物が近接していることと無関係ではないと考えられる。出土遺物の構成は、「内院」地区の廐棄土坑に見られるような9割以上が土師器供膳具というのではなく、煮炊具や陶器類も多い。また縁釉陶器を含まないものも相違点である。南接する「寮庭」と推定される柳原区画にも土器の廐棄土坑はあるが、縁釉陶器など高級品を伴わない点は共通するが、柳原区画ではS K926よりも土師器供膳具が多いという相違点がある。この差異は区画の性格を反映するものと考えられる。

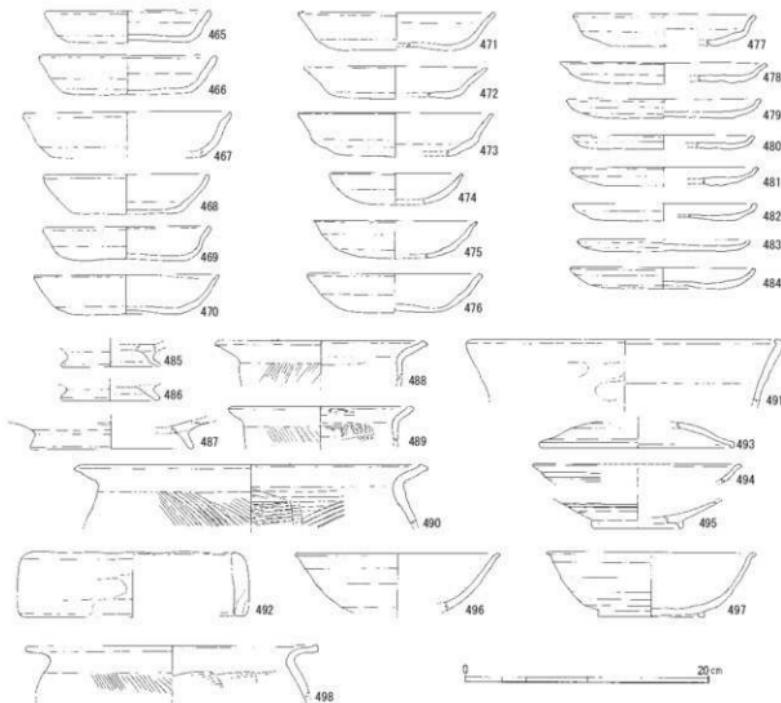
**S K928 (465～497)** 第18-2次調査で検出した、東西3.2m×南北0.9m以上、深さ0.1～0.15mの隅丸方形とみられる土坑である。土師器杯A(465～473)・椀A(474～476)・皿A(477～484)はII-1～3期の型式幅がある。灰釉陶器椀も、黒窯14号窯式期のもの(496・497)と黒窯9号窯式期のもの(495)がある。その他、土師器杯B(485～487)・甕A



第10図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（7）  
SK926 (348~421)



第11図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物（8）  
SK926 (422~464)



第12図 下園東区画の土坑・溝の出土遺物（9）

SK928 (465~497) SK11187 (498)

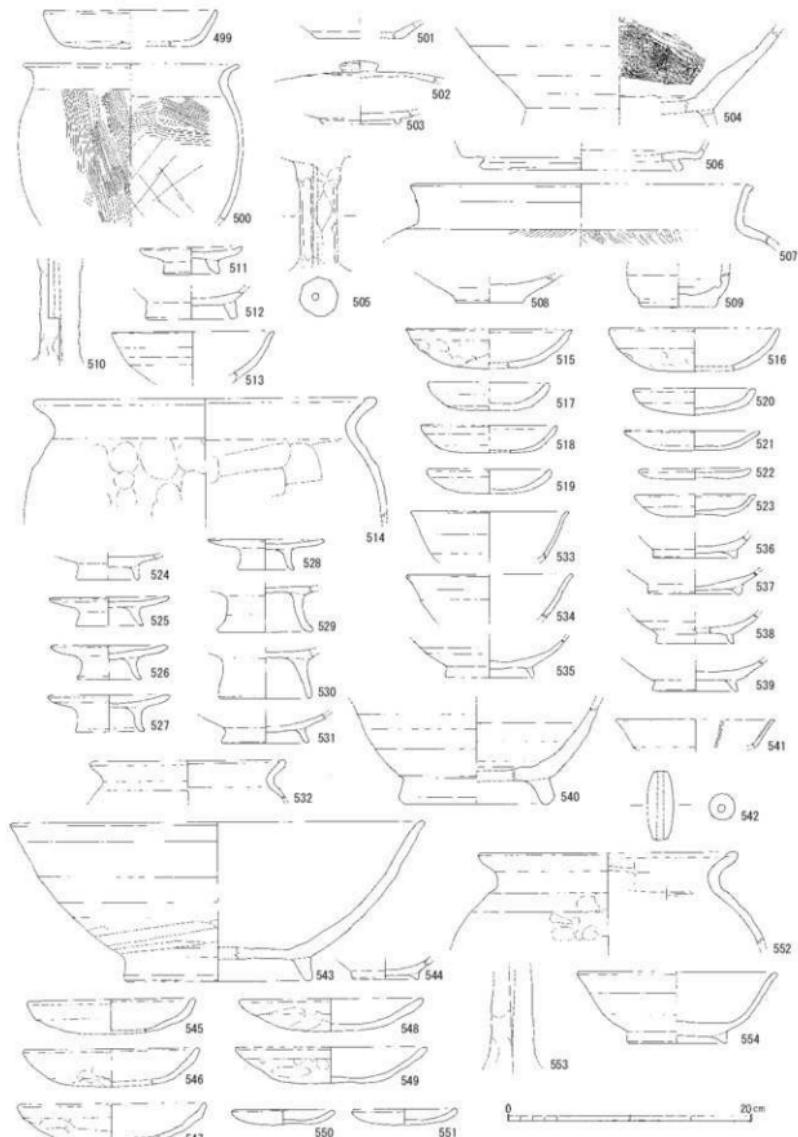
(488・489)・壺C (490)・瓶(491)、須恵器蓋(493)・台付の椀ないしは皿(494)、志摩式製塙土器(492)がある。規模は小さいがSK926と同様の性格が考えられる。

**SK11187 (498)** 第10次調査で検出した区画道路西側溝SD515に重複する長径1.6m×短径1.2mの楕円形土坑である。図化できたのは土師器壺C (498)のみで、II-2～3期ころのものであろうか。

### （3）斎宮III～IV期を中心とする遺構出土遺物

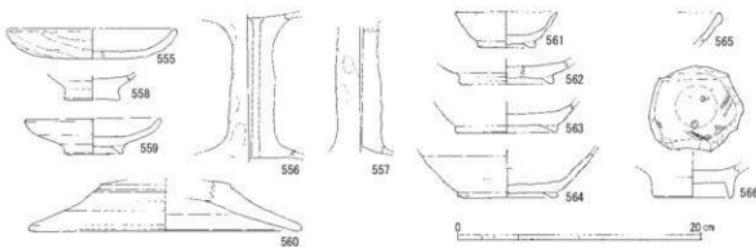
**S D913 (499～504)** 第18-1次調査で検出した南北長約12.0m、東西長23.0m、幅0.6～1.0mの「L」字形の溝で、下園東区画内を縦分するためのものであろう。土師器杯A (499)・壺A (500)・須恵器蓋(502)はII期の範疇に入るが、ロクロ土師器杯(501)、無釉陶器椀ないしは皿(503)・台付鉢(504)はIII-1期以降のものである。

**S D1140 (505～509)** 第23次調査の北から東に沿って掘削された「L」字形の溝で、SD913とは対照的な位置関係にある。下園東区画の北半中央を縦分する区画溝の可能性がある。京都系の土師器高杯(505)、須恵器杯B (506)・壺C (507)、無釉陶器杯(508)・壺(509)を図示した。(508)は底部に糸切痕が残り、形態だけみればロクロ土師器杯Aと区別がつかない。SD1140は、III-1～2期頃まで存続したのであろう。



第13図 下園東区画の土坑・溝の出土遺物(10)

SD913 (499~500) SD1140 (505~509) SD1167 (510) SK1152 (511~514) SK11186 (515~542) SK11195 (543~544)  
SK11207 (545~551)



第14図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物 (11)

SK10877 (555~566)

**S D1167 (510)** 第23次調査の北東部で、区画溝と考えられる S D1140から東に分岐するもので、東の第174-8次調査区では続きが検出されていない。III-1～2期のものとみられる土師器高杯の脚部(510)を図示した。

**S K1152 (511～514)** 第23次調査の北半で、C期の S D1141の南端に重複して掘削されている。1.8m×1.2m、深さ0.2mの不整形土坑である。小型の土師器杯 B 2 (511)・甕 A (514)、無軸陶器椀 (512・513)を図示した。(514)は口縁端部を内側に丸めるように作られ、球状の胴部を持つことから、III-2期の型式とみられる。下園東区画ではE 2～F期に位置づけられる。

**S K11186 (515～542)** 第10次調査の方格街区北辺道路南側溝のS D291近くで検出した、東西1.5m以上、南北1.2m、深さ0.6mの隅丸方形の土坑である。土師器杯D (515・516)・皿D (517～522)・杯B 2 (524～530)・台付椀(531)・甕A (532)はIII-1～2期の形式のものである。灰釉陶器椀 (533～535)は東山72号窯式期から現れる深椀を含む。無軸陶器台付鉢(540)・椀(536～539)は、山茶椀の第2～3形式とみられる。白磁輪花椀(541)は薄手の器壁で透明感のある釉がかかり、大宰府分類のXII類に相当する。全体的に甕III-2期に併行するとみられ、F期に属する。

**S K11195 (543・544)** 第10次調査区内で、S D520の西側で検出した1.8m×0.9m、深さ0.25mの長楕円形土坑である。無軸陶器の台付鉢(543)・第4型式の小椀(山皿 544)があり、F期に属する。

**S K11207 (545～554)** 第10次調査で検出した東西1.0m以上、南北1.0m、深さ0.25mの楕円形土坑である。土師器杯D (545～549)のうち、(545～547)は口縁端部を肥厚させるIII-3期頃の特徴を持っている。他の杯D (548・549)・皿D (550・551)・球胴化し口縁部を内側に巻き込む甕A (552)・高杯(553)もIII-2期新相～3期のものとみられる。無軸陶器椀(554)は第3型式のいわゆる初期山茶椀である。こうした内容からS K11207はF期に属する。

**S K10877 (555～566)** 第178-2次調査で検出した不整形土坑である。風削木痕の可能性がある。中世的な形態に変化した土師器皿D (555)・高杯(556・557)や、III-2～3期の柱状高台を持つロクロ土師器小型杯(558)、無軸陶器の台付小皿(559)・器台の脚部(560)、渥美湖西窯編<sup>(4)</sup>のII-a期頃とみられる小椀(山皿 561)・椀(山茶椀 562～564)が、この他に大宰府分類で白磁II類の椀(565)・V類椀(566)があり、III-3～4期に併行するとみられる。下園東区画F期以降のものである。

### 第3節 下園東区画を特徴づける遺物

#### (1) 墨書き土器 (567～575)

下園東区画で判読が可能な墨書き土器の出土は少ない。調査次数別に見ていくと、下園東区画の南東隅で実施した第168次調査では、甕III-1期、下園東区画の画期でA期の S K10248から須恵器杯A (567)の底部外面に「上大口」と墨書きされている。三文字目はうがんむりの漢字であり、「宮」などの可能性が考えられる。また、包含層から出土したII-1期新相～2期古相の土師器杯A (568)の底部外面に「殿部」の墨書きがある。これら(567・568)は甕III-1期の墨書き土器の中でも能筆であり、特に「殿部」はこれまでに鎌治山地区の第29次調査で「殿」と刻書した土

師器皿(II-2期頃)が、東加座地区の第57次調査で「殿司」と墨書きした土師器皿(II-1期)が出土している。第168次調査周辺は、下園東区画の中でもB期以降、SD525によって特に区画され、D期まで高い建物密度を保っている。この他SK10248からは内面に墨書きのある土師器皿A2(569)があるが判読できない。

第176次調査ではピットから須恵器皿A(570)の底部外面、II-2~3期のSK10480から土師器碗A(571)の底部外面に漢字とみられる墨書きがある。(570)は判読できないが、(571)は「桧」あるいは「柊」「於」などの可能性がある。人名に関係するものだろうか。「桧」は鍛冶山地区の第44次調査で出土している。

第173次調査では、灰釉陶器柄・皿類(572~574)がある。II-2期のSK10325のもの(574)は記号状の交差する線を描く。II-3~4期のSK10329の(572)とIII-1期のSK10326の(573)はいずれも漢字とみられるが判読できない。第166次調査では、表土から底部外面に「にく□□のす□」とひらがなを墨書きした山茶碗(575)が出土している。

## (2) 線刻土器(576~581)

下園東区画の南東隅に位置する、第168次調査のII-1期のSK10248から出土した土師器皿A2(576)の底部外面に「木」字状の線刻がある。

区画北西隅の第186次調査の区画西辺道路SF10850の東側溝の位置に重複する遺構からの出土が多い。II-1期のSK10856からドーマン状の交差する5本×2本の線刻が土師器高杯(577)の見込み部に施されるもの、土師器皿A1(579)の見込み部に「井」字状の線刻を施すもの、SD10852から土師器皿A1(578)の底部外面に「奉」を線刻するものがある。「奉」の文字は、下園東区画南東隅近くの第156次調査でも、II-2期古相の土器を主体とするSK9689から土師器高杯の脚部に「奉」と墨書きされたものや、土師器碗A1の外面に「奉」や「子」など多数の文字を墨書きしたものがある。これらは、区画道路交差点付近での祭祀に用いられた可能性も考えられる。II-1期のSK10857からは土師器皿A1(580)の見込み部に複数の線刻がみられる。同じく下園東区画北東部の第178-2次調査区では、区画道路SF10850の東側溝に近い位置にあるSK10888からも土師器碗A1(581)の内面に三本の線刻を施すものがある。「井」字状の記号は、斎宮跡では墨書きのものと線刻のものがあるが、ドーマン状の記号は線刻のみである<sup>(8)</sup>。

下園東区画中央付近の第177次調査のII-2期の遺物が出土するSK10502からは土師器皿A1(581)の見込み部に不定方向ながら円をつくるように複数の線刻したものがみられる。

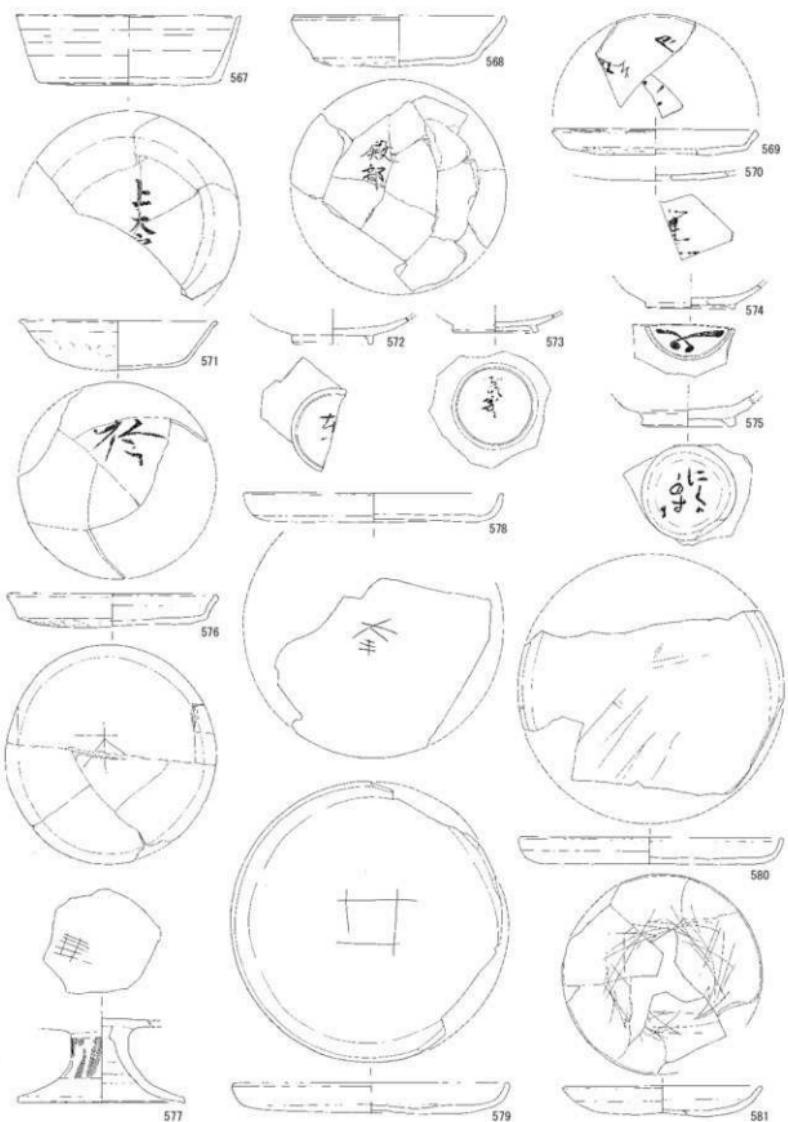
## (3) 線釉陶器(582~595)・貿易陶磁(596~605)

下園東区画から出土した線釉陶器は、現在管見に触れたもので約120片であり、斎宮跡の中では決して多くはない。猿投窯系の外面上に陰刻花文を施す蓋(第166次 582)、見込み部に大きく陰刻で法相華文を施す碗(第173次 583)、把手付瓶(第173次 584)は比較的希少性もある器種といえるが、この他は無文の碗・皿類である。先述のもの以外に、猿投窯とみられるもの(318・585~589)、京都産とみられるもの(590)、東濃産とみられるもの(591)、近江産とみられるもの(592~595)がある。

貿易陶磁では(596)の玉縁口縁の碗が大宰府の陶磁器分類の白磁II類、(597)はIV類、(74・598~602)が白磁IV類ないしはV類の碗とみられる。(603)が青白磁の合子蓋、(604)が龍泉窯系の青磁碗、(605)が同安窯系の青磁碗である。斎宮跡で出土する貿易陶磁の出土状況は、白磁I類が斎宮跡土器編年のII-3期まで遡る可能性が、白磁II・IV・V類はIII-2期頃から、同安窯・龍泉窯系の青磁はIII-3~4期から出現している。また、貿易陶磁類の中でもII-2期頃から出現する越州窯系青磁は、南接する柳原区画や「内院」の牛葉東・鍛治山西区画の他、西加座北・南区画でも出土しているが、下園東区画では確認されていない<sup>(8)</sup>。

## (4) 砥類(606~615)

定型砥は少なく、須恵器円面研が2点出土しているのみで、風字砥や形象砥等は出土していない。第174-8次の(606)は脚部外面に縱方向のヘラ描き沈線を、第186次調査の(607)は鏪状工具を押した列点文を施す。



第15図 下圓東区画を特徴づける遺物（1）  
墨書き器（567～575） 線刻土器（576～581）

0 20 cm

転用硯は複数見つかっている。須恵器蓋(608)、無軸陶器の碗や皿(609~611)などがある。灰釉陶器碗を転用した第174~8次の(70・612・613)は内面に朱墨の痕跡を残し、灰釉陶器片の(614・615)には赤色の顔料が付着する。

### (5) 祭祀具類(616~618)

東接する西加座北・南区画に比べ数少ないが小型模造品の土師器壺A(616)、土師器椀(617)がある。(617)の内面は棒状工具を引っ掛けようにして成形した痕跡がそのまま残る。

第186次調査で出土した土師質の土馬(618)は中実の胴部から尾部にかけてが残存している。胴部に脚部の接合のためとみられる棒のようなものを挿入した痕跡とみられる直径約6mmの孔がある。

### (6) 特徴的な土器類(619~627)

区画北半中央の第23次調査から灰釉陶器の香炉(619)が出土している。舟状の脚部には直径5mmの円孔が二個一対で開けられている。同様の形態の香炉は第109次の被熱痕のある体部の他、第130次調査の蓋を含め縁釉陶器のものは出土例があるが、灰釉陶器は唯一の例である。

土師器杯Aの底部に少なくとも三個の焼成後穿孔がある(620)は、下園東区画南東隅の第168次調査区SK10247から出土しており、同じ調査区内のSK10248から「木」字状の線刻土器(576)も出土している。

須恵器高杯(621)は第178~2次調査の包含層から出土しているが、第10次調査区SD515出土の須恵器長頸瓶(145)と同様、本来は円墳SD11139に伴う可能性がある。須恵器壺Gは、(622)と第18~2次調査のSK926出土の二片(448・449)の三例がある。土師器壺(623)は第10次調査区で出土しているが、完形品でありながら出土遭構・状況はわからぬ。内面に煤が付着しており、使用痕はある。口径14.8cm、高さ16.0cmで、小型模造品とは言えないが小型品である。通常の大きさの壺とは異なる使用目的も考えられる。小型の短頸壺である壺Eには土師器のもの(111・268・624)、須恵器のもの(625・626)がある。薬種などを保管した可能性がある。灰釉陶器の器台脚部(627)は燭台であろう。

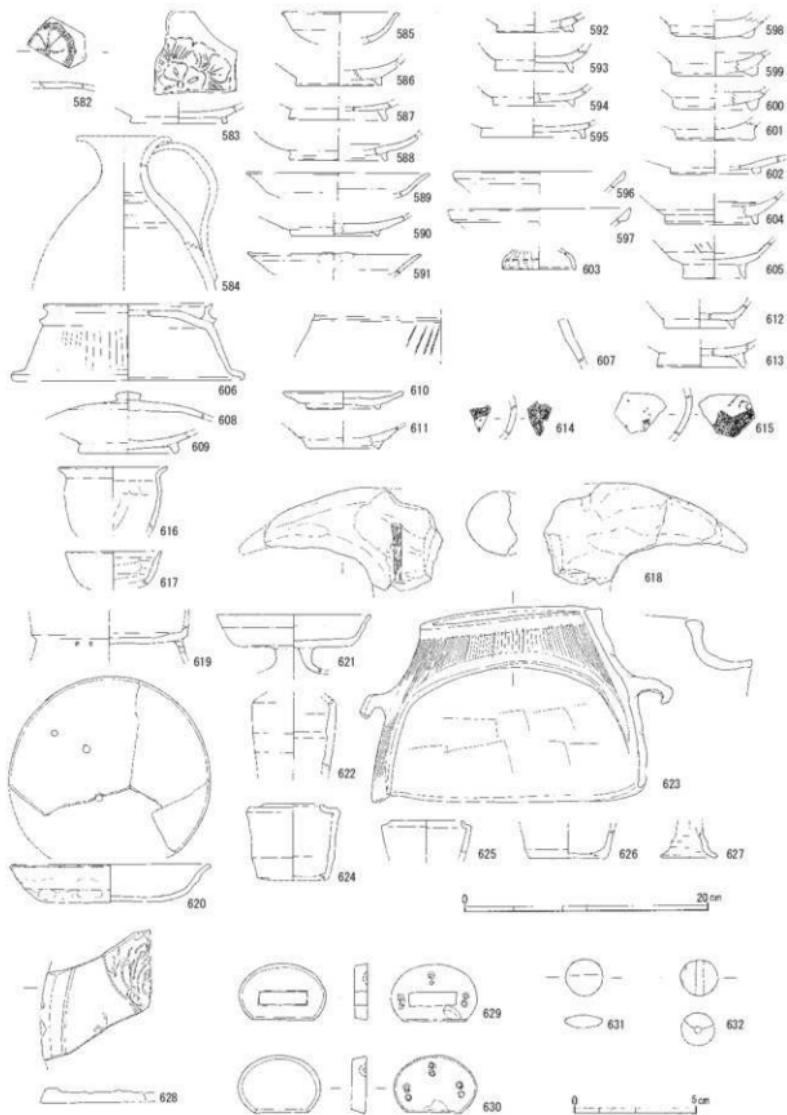
### (7) 金属製品(628)・石製品・ガラス製品(629~632)

(628)は第23次調査で出土したとされる八花双鸞鏡の破片とみられる。破断面は研磨されておらず、意図的な破鏡はうかがえない。出土状況はよくわからないが、第3章で検討を試みた。石帶(629・630)はいずれも第23次調査区のII-2~3期のSB1155の柱穴から出土したものである。いずれも丸鞘で三箇所のかがり孔を持つ。(629)は横3.5cm、縦2.3cmで方形の透かし穴を持ち、黒灰色を呈する<sup>(7)</sup>。(630)は横3.4cm、縦2.3cm透かし穴を持たない灰色を呈する。(631)は第178~2次調査の表土から出土した直径1.5cm、厚さ0.5cmの白色の基石とみられるものである。(632)も第178~2次調査の表土から出土した直径1.6cmで、径3mmの穿孔がある水色のガラス玉である。このガラス玉については、平成28年度に三重県総合博物館の間瀬創氏により、ハンドヘルド型の蛍光X線分析装置を用いて成分分析を行った。その結果K(カリウム)の含有率が低く、Pb(鉛)の比率が高いことから鉛ガラスの可能性が高い。状況的に中国産が舶載された弥生時代のものとは考えにくく、朝鮮半島産の7世紀初頭~中葉のものか、国内で生産が開始された7世紀後半以降のものと推測できる。この他、加工はされていないが、II-2期の土器類を出土する第177次調査区SK10502から拳大の石英塊が出土している。薬種などとして意図的に搬入されたものだろう。

### (8) 製塙土器(633~636)・土錐(637~663)

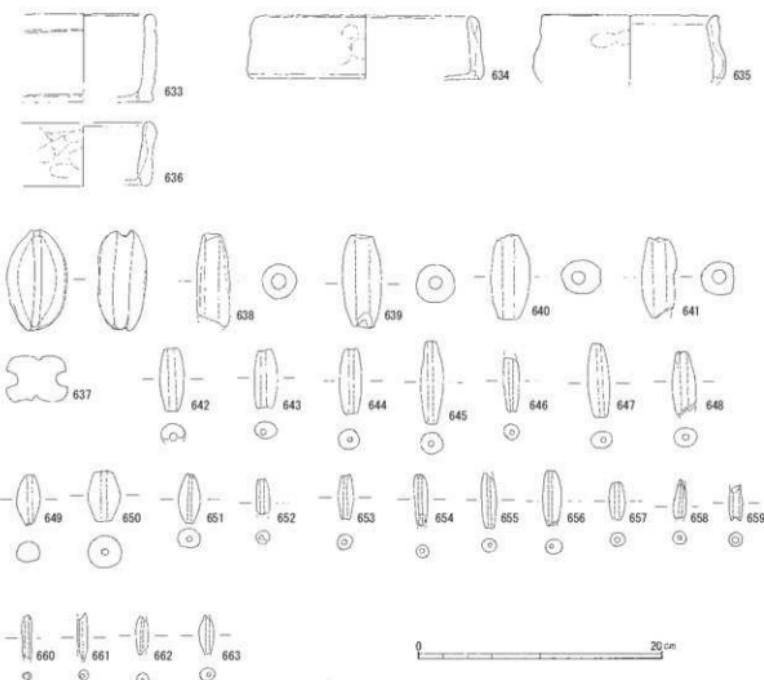
第173次調査の遭構から出土した志摩式製塙土器を掲載した。(633)はSK10321出土のII-1期のもの、SK10325出土の(634・635)・SK10318出土の(636)はII-2期のものである。

土錐のうち(637)は下園東区画で唯一の大型有溝土錐である。重さ141gで四方向に網を固定するための溝がある。外洋で使用される有溝土錐は、この他鎌冶山地区の第108次調査出の出土例があるが斎宮跡では少ない。斎宮跡で一般的な有孔土錐では、長さ5~7cm、重さ30~70gの大型品(638~641)、長さ4~6cm、重さ6~30gの中型品(642~649)、



第16図 下園東区画を特徴づける遺物（2）

鍵袖陶器 (582~595) 貿易陶器 (596~605) 瓦類 (606~615) 小型模造品 (616~617) 上馬 (618) その他の土器類 (619~627) 金属製品 (628)  
石・ガラス製品 (629~632)



第17図 下圓東区画を特徴づける遺物（3）

製塗土器（633～636） 土鍬（637～663）

長さ3~4cm、重さ3~6gの小型品（650~662）がある。中型品の中でもそろばん玉状に胴部が張る（648・649）がある。これらが漁網鍼とすれば、想定される漁網の目の大きさから内水面での使用が考えられるだろう。斎宮跡での土鍬の出土は、柳原地区の第143次調査のS H9001で150点以上が一括で出土している例を除き散発的だが、史跡内各地で相当量出土しており、今後総体的にその意味を検討すべきだろう。

【註】

- (1) 第3章 斎宮跡の土器編年の再検討『斎宮跡発掘調査報告II 柳原区画の調査 出土遺物編』斎宮歴史博物館 2019  
また、他地域の土器・陶磁器との比較の上で、下記の文献を参照した。  
  - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 畜業I 古代 猪根系』愛知県 2015
  - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 畜業I 中世・近世 濱戸系』愛知県 2007
  - ・小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本法律的土器様式の成立と展開、7~19世紀—』京都編集工房 2005
  - ・太宰府市教育委員会編『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』2000
- (2) 竹内英昭『伊賀国府跡（第6次）』『研究紀要 第13号』三重県埋蔵文化財センター 2003
- (3) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本法律的土器様式の成立と展開、7~19世紀—』京都編集工房 2005
- (4) 鈴木敏則『涙美湖西窯の山茶碗編年』『涙美窯編年の再構築』東海土器研究会 2013
- (5) 大川勝宏『斎宮跡の祭祀と出土遺物』『三重県史 資料編 考古2』三重県 2009
- (6) 大川勝宏『斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究』『斎宮歴史博物館 研究紀要十九』2011
- (7) 駒田利治「一三 ■帶」『明和町史 斎宮編』明和町 2005

第1表 出土遺物觀察表（1）

番号	登録番号	器種	形態	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	保存度	備考
1	癩III-09-02	土師器	杯A	23次	SB1170	台傍 既高 既高	14.9 19.4 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰赤褐 5185/6	口径の 1/2以下 全体の 約90% 表面に 摩耗多い
2	癩III-09-01	土師器	楕A 1	23次	SB1170	台傍 既高 既高	19.4 6.5 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	底盤の 約1/4 表面に 摩耗多い
3	癩III-09-03	須恵器	杯A	23次	SB1180	底盤 既高 既高	6.5 2.0	体部ヨクロナデ、底盤外面ヨクロケ ズメリ	密	良	灰黄 2.5V7/2 ~3mmの小石含む	底盤の 約1/4
4	癩III-09-04	須恵器	杯B	23次	SB1180	台傍 既高	9.4 1.6	体部ヨクロナデ・點付高台	密	良	灰白 517/2	高台傍の 1/6
5	癩III-09-05	須恵器	長頸壺	23次	SB1180	台傍 既高	10.2 2.9	体部ヨクロナデ・貼付高台、底部外面 ヨコナデ	密	良	灰黄 2.5V7/2	高台傍の 1/4 内面に自然 釉付有
6	癩III-18-01	土師器	杯A	23次	SB1180	台傍 既高 既高	14.4 14.2 2.2	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/2
7	癩III-18-02	須恵器	踏台?	23次	SB1160	台傍 既高 既高	13.8 9.3 2.2	口縁部ヨコナデ・体部ヨクロナデ	密	やや軟	灰黄 2.5V7/2	高台傍の 1/12
8	癩III-38-04	土師器	杯A	18-2次	SB935	台傍 既高	14.4 1.5	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5187/6	口径の 1/12
9	癩III-38-05	土師器	皿A	18-2次	SB935	台傍 既高	14.4 1.5	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5.5V7/6	口径の 1/12
10	癩III-36-05	土製品	土師	18-2次	SB935	全長 既高	4.1 2.8	外縁ナデ	密	良	褐色 5186/6	全体の 約90%
11	癩III-21-01	土師器	甕C	178-2次	SB11673	口縁 既高	27.6 3.5	口縁部ヨコナデ	密	良	浅黄褐 10V83/3	口径の 1/12
12	癩III-21-03	土師器	杯A	178-2次	SB11673	口縁 既高	13.8 3.5	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/12
13	癩III-21-06	須恵器	蓋	178-2次	SB11673	口縁 既高	15.8 2.7	口縁部ヨコナデ・体部外面ヨクロケ ズメリ・内面ヨクロナデ	密	良	褐色 7.5V7/1	口径の 1/12
14	癩III-34-04	土師器	杯A	18-2次	SB930	口縁 既高	13.0 1.9	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	灰白 7.5V7/1	口径の 1/12
15	癩III-34-01	土師器	皿A 1	18-2次	SB930	口縁 既高	18.0 2.5	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/12
16	癩III-34-08	土師器	甕A	18-2次	SB930	口縁 既高	12.6 6.9	口縁部ヨコナデ・体部外面ヨクロケ ズメリ	密	良	にぶい 褐色 7.5V7/4	口径の 1/6
17	癩III-34-02	土師器	甕C	18-2次	SB930	口縁 既高	24.8 2.6	口縁部ヨコナデ	密	良	浅黄褐 7.5V86/6	—
18	癩III-34-06	土師器	蓋	18-2次	SB930	既高	2.5	外縁ナデ	密	良	褐色 5187/6	つまみ足 のみ残
19	癩III-34-03	須恵器	蓋	18-2次	SB930	既高	1.1	外縁ヨクロナデ	密	良	灰 7.5V6/1	口径の 1/12以下
20	癩III-34-05	須恵器	蓋	18-2次	SB930	既高	15.8 1.6	口縁部ヨコナデ・体部外面ヨクロケ ズメリ・内面ヨクロナデ	密	良	灰白 7.5V7/1	口径の 1/12
21	癩III-34-07	無輪陶器	蓋	18-2次	SB930	既高	12.0 4.3	外面ヨクロケズメリ・内面ヨクロナデ	密	良	灰黄 2.5V7/2	底盤の 1/6
22	癩III-18-03	土師器	杯A	174-4次	SB11130	口縁 既高	14.4 1.9	口縁部ヨコナデ・体部ナデ	密	良	灰白 10V89/2	口径の 1/12
23	癩III-18-06	土師器	皿A 2	174-8次	SB11130	口縁 既高	20.2 2.2	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5187/6	口径の 1/4
24	癩III-18-04	須恵器	楕	174-8次	SB11130	口縁 既高	15.8 4.2	口縁部ヨコナデ・体部ヨクロナデ	密	良	灰白 517/1	口径の 1/6
25	008-04	土師器	杯A	177次	SB10490	口縁 既高	14.2 2.8	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/12
26	008-03	土師器	杯A	177次	SB10490	口縁 既高	17.6 3.5	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/12
27	012-01	土師器	杯A	177次	SB10490	口縁 既高	17.5 4.0	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/4 内面に墨痕
28	008-02	土師器	皿A 2	177次	SB10490	口縁 既高	21.9 2.1	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	灰 12.5V6/1 2.5V86/2	底盤に粘土 1/12 結合有
29	008-05	土師器	楕	177次	SB10490	口縁 既高	14.6 4.5	体部外面ヨクロケズメリ・底盤付近ハラク ズメリ	密	良	にぶい 褐色 7.5V86/4	底盤の 外側にスス 付着
30	009-01	土師器	甕A	177次	SB10490	口縁 既高	21.1 4.9	口縁ヨクロケズメリ・体部既高タマキズメリ・方向向 けヨコナデ	密	良	にぶい 褐色 7.5V86/4	全體の 外側にスス 付着
31	008-01	須恵器	蓋	177次	SB10490	口縁 既高	14.6 2.3	口縁部ヨコナデ・体部外面ヨクロ ナデ	密	良	灰 516/1	口径の 1/4
32	癩III-21-04	土師器	杯A	178-2次	SB10887	口縁 既高	13.8 2.6	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	褐色 5186/6	口径の 1/4
33	006-02	土師器	皿A 1	180次	SB10630	口縁 既高	19.4 6.0	口縁部ヨコナデ・外側・ヘラケズメリ・ 内面ナデ	密	良	褐色 5187/8	口径の 1/6 1/12
34	006-03	須恵器	平瓶	180次	SB10630	既高 既高	13.0 6.0	体部外面ヨクロナデ・底盤付近ハラク ズメリ	密	良	灰黄 2.5V7/2	底盤の 1/12
35	癩III-31-01	土師器	杯A	18-1次	SB900	口縁 既高	13.2 3.0	口縁部ヨコナデ・体部ナデ	密	良	にぶい 褐色 7.5V7/3	口径の 1/6
36	癩III-31-02	土師器	皿A 2	18-1次	SB900	口縁 既高	14.0 2.1	口縁部ヨコナデ・体部ナデ	密	良	褐色 7.5V6/6	口径の 1/6
37	癩III-31-03	土師器	皿A 1	18-1次	SB900	口縁 既高	13.8 2.1	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい 褐色 5186/6	口径の 1/6
38	癩III-31-04	土師器	甕	18-1次	SB900	既高	3.0	口縁部ヨコナデ	無縫な砂粒多い	真	にぶい 褐色 7.5V7/4	—
39	癩III-31-06	土師器	甕	18-1次	SB900	既高	2.2	口縁部ヨコナデ	密	良	浅黄褐 7.5V86/6	—
40	癩III-31-05	須恵器	蓋	18-1次	SB900	既高	2.9	口縁部ヨコナデ・内面ケズメリ	密	良	にぶい 褐色 10V7/3	—
41	癩III-31-06	須恵器	杯A	18-1次	SB900	口縁 既高	13.1 4.1	口縁部ヨコナデ・体部ヨクロナデ。	密	良	灰 7.5V6/1	口径の 1/12
42	癩III-31-07	須恵器	杯B	18-1次	SB900	台傍 既高	9.0 1.8	体部ヨクロナデ・貼付高台、底部外面 ナデ	密	良	灰 7.5V6/1	高台傍の 1/6
43	癩III-35-04	須恵器	底座	18-2次	SB932	口縁 既高	18.0 2.6	体部ヨクロナデ・口縁部ヨコナデ。 既高既深	密	良	素地:灰黄 2.5V7/2 輪郭:銀白色 865	全體の 約1/4
44	癩III-37-04	須恵器	蓋	18-2次	SB932	口縁 既高	9.0 2.1	口縁部ヨコナデ	密	良	灰白 7.5V7/1	口径の 1/12
45	癩III-37-01	土製品	土管	18-2次	SB932	口縁 既高	16.5 10.5	外縁ヨクロナデ・内面ヨコナデ。	密	良	にぶい 褐色 7.5V7/4	口径の 1/6 被破痕あり

第2表 出土遺物觀察表（2）

番号	登録番号	器種	形態	調査回数	構成・層位	直徑(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	保存度	備考
46	010-02	土師器	皿A 2	177次	SB10511	口径 15.7 底高 15.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/4	体部に粘土 混合物
47	010-03	土師器	皿A 2	177次	SB10512	口径 15.5 底高 15.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 2.SYR6/6	口径の 1/12	
48	010-04	灰釉陶器	蓋	177次	SB10512	口径 10.7 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ	密	良	素地:灰白 2.5SYT/1 輪:抹茶 8.38	1/12以下	内面に重ね 焼き痕
49	雅皿35-01	楕円器	高杯	18-2次	SB931	直径 5.8 底高 3.4	体部クロナデ、内面ナデ	密	良	灰白 2.5SYT/1	細部の 一部	内面に黑色 物付着
50	雅皿35-02	灰釉陶器	楕	18-2次	SB931	直径 7.2 底高 2.3	体部クロナデ、貼付高台、灰釉焼 付けかげ	密	良	素地:灰黄 2.5SYT/2 輪:山茶 8.49	1/3	台形の 9
51	雅皿35-03	灰釉陶器	楕	18-2次	SB931	直径 10.4 底高 2.8	体部クロナデ、底部ケズリ、灰釉 焼付けかげ	密	良	灰白 2.5SYT/1	1/6	
52	雅皿31-09	土師器	杯A	18-2次	SB924	口径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/12以下	
53	雅皿33-08	土師器	杯D	18-2次	SB924	口径 13.1 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	浅黄緑 2.SYR6/6	口径の 1/6	
54	雅皿31-11	土師器	杯A	18-2次	SB924	口径 13.8 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 2.SYR6/6	口径の 1/12	
55	雅皿31-10	土師器	皿A	18-2次	SB924	口径 12.8 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 2.SYR6/7	口径の 1/12	
56	001-05	土師器	杯A	18-2次	SB929	口径 15.1 底高 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 2.5SYT/6	口径の 1/12	
57	001-04	須恵器	杯B	17-2次	SB929	口径 12.9 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、貼付高台、底部外 面切痕	密	良	素地:灰白 2.5SYT/1	内面に重ね 焼き痕	
58	001-06	灰釉陶器	皿	18-2次	SB929	口径 7.5 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、貼付高台、底部外 面切痕	密	良	素地:灰白 2.5SYT/1 輪:紺色 800	内面に重ね 焼き痕	
59	雅皿38-02	土師器	杯A	18-2次	SB933	口径 14.8 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 2.5SYT/6	口径の 1/12	
60	雅皿38-03	土師器	楕A 2	18-2次	SB933	口径 16.0 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 2.SYR7/4	口径の 1/12	
61	雅皿38-01	土師器	變C	18-2次	SB933	口径 27.4 底高 4.1	口縁部ヨコナデ、体部内面ヨカハケ、 外側ハカケ	密	良	浅黄緑 10SYR8/3	口径の 1/12	
62	雅皿33-04	黑色上器	楕	18-2次	SB921	口径 11.9 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	褐灰 10SYR5/1	口径の 1/6	
63	雅皿33-02	黑色上器	楕	18-2次	SB921	口径 7.2 底高 1.6	口縁部ヨコナデ、貼付高台	密	良	褐灰 10SYR6/1	口径の 1/4	
64	雅皿16-04	土師器	皿D	17-4次	SB1150	口径 9.6 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰白 10SYR9/2	全体の 約50%	
65	雅皿16-05	ロク口 小型杯	小型杯	17-4次	SB1150	口径 4.4 底高 2.3	口縁部ヨコナデ、底部外面部切痕	密	良	浅黄緑 10SYR8/3	高台部 のみ残存	
66	雅皿16-06	無釉陶器	(山茶碗)	17-4次	SB1150	直径 7.6 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、貼付高台、底部外 面切痕	密	良	灰白 5SYT/1	内面に墨塗 あり、乾燥化	
67	雅皿17-03	土師器	高杯	17-4次	SB1140	口径 2.7 底高 1.5	外側ナデ、7-8面の裏取り	密	良	浅黄 2.5SYR/3	—	
68	雅皿17-02	灰釉陶器	楕	17-4次	SB1140	口径 6.2 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、貼付高台、底部外 面切痕	密	良	灰白 5SYT/1	高台部 のみ残存	
69	雅皿17-01	無釉陶器	(山茶碗)	17-4次	SB1140	口径 8.4 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、貼付高台、底部外 面切痕	密	良	素地:灰黄 2.5SYT/2 輪:抹茶 8.4	高台部 のみ残存	
70	雅皿16-01	土師器	皿D	17-4次	SB1140	口径 8.8 底高 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	浅黄緑 2.SYR8/4	全体の 約40%	外間に被熱 痕
71	雅皿16-02	土師器	杯B 2	17-4次	SB1149	口径 6.3 底高 3.3	体部ナデ、貼付高台	密	良	壁 SYR6/8	高台部 のみ残存	
72	雅皿16-03	ロク口 土師器	杯	17-4次	SB1149	口径 4.4 底高 1.5	口縁部ヨコナデ、底部外面部切痕	密	良	素地:灰 10SYR7/3	底部の 1/2	
73	雅皿22-02	土師器	台付杯	17-8次	SB1082	口径 6.0 底高 5.0	口縁部ヨコナデ、貼付高台 底部外面部切痕	密	良	浅黄緑 10SYR8/3	見込み部に 黒斑	
74	雅皿15-01	白磁	楕	17-4次	SB11170	口径 10.4 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、見込み部に園窓	織密	良	素地:灰黄 2.5SYT/2 輪:抹茶 9.47	口径の 1/4	大差別分類 のV型
75	雅皿01-01	楕円器	蓋	23次	SK1156	口径 14.7 底高 8.0	口縁部ヨコナデ、口縁部クロケズリ、 底部外面部切痕	織密	良	灰白 2.5SYT/1	全体の 約70%	
76	雅皿01-02	土師器	杯A	23次	SK1156	口径 15.8 底高 9.0	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・オサエ	密	良	壁 SYR6/6	全体の 約70%	
77	雅皿01-03	土師器	盤	23次	SK1156	口径 31.8 底高 9.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部外 面切痕	密	良	壁 2.SYR6/6	全体の 約70%	
78	雅皿07-04	土師器	杯A	10次	SK11205	口径 11.9 底高 7.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	壁 SYR6/8	全体の 約40%	
79	雅皿06-01	土師器	變C	10次	SK11205	口径 26.1 底高 7.4	口縁部ヨコナデ、体部外面部タハケ、 内面ヨカハケ	密	良	壁 SYR6/8	口径の 1/12	
80	雅皿07-06	楕円器	良細器	10次	SK11205	口径 7.8 底高 5.1	口縁部ヨコナデ、貼付高台、底部外 面切痕	密	良	オリーブ灰 10SYR6/1	高台部の 1/6	
81	雅皿06-04	楕円器	高杯	10次	SK11205	口径 11.8 底高 10.8	外側ナデ、内面シボ痕	密	良	灰白 2.5SYT/1	脚部部 のみ	
82	雅皿20-3	土師器	杯G	10次	SK020	口径 12.6 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	素地:灰 2.5SYR6/2	内面に黑色 物付着	
83	雅皿03-02	土師器	杯G	10次	SK020	口径 13.6 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰白 2.5SYR6/2	口径の 1/6	
84	雅皿24-05	土師器	杯A	10次	SK020	口径 14.2 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	壁 10SYR7/4	口径の 1/6	
85	雅皿23-06	土師器	杯A	10次	SK020	口径 12.2 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/12	
86	雅皿04-05	土師器	杯A	10次	SK020	口径 12.9 底高 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 SYR6/6	全体の 約20%	
87	雅皿24-03	土師器	杯A	10次	SK020	口径 13.4 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/3	
88	雅皿24-06	土師器	杯A	10次	SK020	口径 13.6 底高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/6	
89	雅皿24-24	土師器	杯A	10次	SK020	口径 14.6 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ・ オサエ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/12	
90	雅皿18-03	土師器	杯A	10次	SK020	口径 14.6 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	壁 SYR6/6	口径の 1/6	

第3表 出土遺物觀察表（3）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	構成・層位	直徑(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	埋深度	備考
91	雅田04-02	土師器	杯A	10次	S0520	口径 15.8 深高 10.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ 底部内面ケタツリ	密	良	櫻 SYR7/6	全体の約30%	
92	雅田04-04	土師器	杯A	10次	S0520	口径 16.3 深高 3.6	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外 面ケタツリ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/10	
93	雅田23-04	土師器	杯A	10次	S0520	口径 17.0 深高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/5	
94	雅田21-06	土師器	杯A	10次	S0520	口径 17.8 深高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ハラケズ 内面ナデ	密	良	櫻 SYR6/8	口径の 1/4	
95	雅田05-02	土師器	楕A 2	10次	S0520	口径 17.8 深高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 2.5SYR6/8	全体の 約20%	
96	雅田04-01	土師器	楕A 2	10次	S0520	口径 19.2 深高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR7/6	全体の 約30%	
97	雅田18-06	土師器	杯A	10次	S0520	口径 14.8 深高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR7/6	全体の 約40%	
98	雅田04-07	土師器	杯D	10次	S0520	口径 12.5 深高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ	密	良	櫻 SYR6/6	全体の 約15%	
99	雅田05-04	土師器	楕B	10次	S0520	口径 12.0 深高 4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ 底部高台	密	良	櫻 SYR7/8	高台径の 9/10	
100	雅田24-04	土師器	楕A 2	10次	S0520	口径 11.2 深高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	櫻 7.SYR7/6	口径の 2/5	
101	雅田20-01	土師器	楕A 2	10次	S0520	口径 11.9 深高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 7.SYR7/6	全体の 約30%	
102	雅田18-07	土師器	皿A 1	10次	S0520	口径 18.6 深高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	全体の 約30%	
103	雅田20-04	土師器	皿A 1	10次	S0520	口径 16.7 深高 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 7.SYR7/6	全体の 約40%	
104	雅田22-03	土師器	皿A 1	10次	S0520	口径 17.6 深高 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 7.5SYR6/6	全体の 約10%	
105	雅田21-05	土師器	皿A 2	10次	S0520	口径 15.7 深高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ハラケズ 内面ナデ	~3mmの小石含む	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/4	
106	雅田22-02	土師器	皿A 2	10次	S0520	口径 15.6 深高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	全体の 約30%	
107	雅田22-04	土師器	皿A 2	10次	S0520	口径 15.6 深高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	全体の 約30%	
108	雅田24-01	土師器	皿A 2	10次	S0520	口径 16.6 深高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/10	
109	雅田21-07	土師器	皿A 2	10次	S0520	口径 18.2 深高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ハラケズ 内面ナデ	密	良	櫻 SYR7/6	口径の 1/12	
110	雅田22-07	土師器	皿B 2	10次	S0520	口径 19.6 深高 4.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ 底部高台部分にケヤキ・白樺内面ナデ	密	良	櫻 SYR6/6	全体の 約30%	東北か
111	雅田24-09	土師器	皿	10次	S0520	口径 6.2 深高 2.7	外輪柱テ方向のナデ、内面不定方向	密	良	櫻 SYR6/6	底径の 1/3	
112	雅田21-04	土師器	皿	10次	S0520	口径 6.7 深高 2.6	外輪柱テ方向ナデ、内面ナデ、底部外 面ハラケズ	~1.1mmの小石含む	良	櫻 7.SYR7/6	底径の 2/10	
113	雅田18-08	土師器	甕A	10次	S0520	口径 14.6 深高 7.3	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ 内面タテハケ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/12	
114	雅田19-04	土師器	甕A	10次	S0520	口径 23.1 深高 6.7	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ 内面ヨコナデ	密	良	櫻 7.SYR6/6	口径の 1/6	
115	雅田22-06	土師器	甕A	10次	S0520	口径 22.6 深高 6.0	口縁部ヨコナデ、体部外面斜め方向 のナケ、内面ヨコナデ	密	良	櫻 7.SYR7/4	にぶい壁 口径の 1/6	
116	雅田22-05	土師器	甕C	10次	S0520	口径 24.0 深高 5.9	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ 内面ヨコナデ	密	良	櫻 7.SYR7/4	にぶい壁 口径の 1/12	
117	雅田25-01	土師器	甕C	10次	S0520	口径 27.8 深高 6.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ 内面ヨコナデ	~2mmの小石含む	良	櫻 7.SYR7/6	口径の 1/12	
118	雅田02-06	土師器	短頸甕	10次	S0520	口径 12.8 深高 3.0	口縁部ヨコナデ、端部をわざわざに内 面に肥厚させらる。体部内面ナデ	密	良	櫻 7.5SYR6/6	口径の 1/10	
119	雅田02-07	土師器	短頸甕	10次	S0520	口径 12.8 深高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ	密	良	櫻 7.5SYR6/6	口径の 1/3	
120	雅田03-01	土製品	土管	10次	S0520	口径 9.0 深高 9.0	外輪柱テハケ、内面ヨコナケ、貼付ナ ベ	密	良	櫻 7.SYR7/4	にぶい壁 口径の 1/10以下	表面にスズウ の黒色物附着
121	雅田20-02	須恵器	盃	10次	S0520	口径 2.5 深高 2.5	外輪柱ヨロケズ・内面ヨコナケ	密	良	灰白 7.SYR7/1	全体の 約10%	
122	雅田22-01	須恵器	盃	10次	S0520	口径 16.8 深高 5.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨロケズ 内面ヨコナケ	密	良	灰黄 2.SYR6/2	全体の 約40%	
123	雅田24-08	須恵器	杯B	10次	S0520	口径 19.2 深高 5.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨロケズ 内面ヨコナケ	密	良	灰黄 2.5SYR6/2	全体の 約40%	
124	雅田04-06	須恵器	杯B	10次	S0520	口径 11.8 深高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデ 内面ヨコナケ	密	良	灰黄 10SYR6/2	全体の 約50%	
125	雅田23-03	須恵器	杯B	10次	S0520	口径 20.2 深高 6.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨロケズ、底部 内面ヨコナデ切妻ヨロケズ・ナゲ、貼付高 台	~1.1mmの小石含む	良	灰黄 2.5SYT/2	全体の 約40%	
126	雅田18-01	須恵器	杯B	10次	S0520	口径 17.6 深高 2.0	外輪柱ヨロケズ・ナゲ、貼付高 台	密	良	灰黄 2.5SYT/2	全体の 約50%	
127	雅田23-01	須恵器	盤	10次	S0520	口径 18.8 深高 4.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨロケ ズ・内面ヨコナケ	~2mmの小石含む	良	灰白 2.5SYT/1	口径の 1/10	
128	雅田23-02	須恵器	皿A	10次	S0520	口径 17.5 深高 4.5	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナケ	~2mmの小石含む	良	灰黄 2.5SYT/2	口径の 1/10	
129	雅田18-02	須恵器	台付盤	10次	S0520	口径 11.8 深高 3.1	口縁部ヨロケズ、見込み部ナデ、底 部外面ヨロケズ・ナゲ、貼付高 台	密	良	灰黄 2.5SYT/2	全体の 約70%	
130	雅田25-02	須恵器	楕A	10次	S0520	口径 11.1 深高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ヨロケズ	密	良	灰黄 2.5SYE/2	口径の 1/12	
131	雅田25-05	須恵器	耳杯	10次	S0520	口径 9.2 深高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ヨロケズ。 鷹の耳と2曲所以上貼付	密	良	暗灰黄 2.5SYT/2	口径内部側 に苔生え	
132	雅田04-03	須恵器	耳杯	10次	S0520	口径 23.8 深高 12.5	口縁部ヨコナデ、体部ヨロケナデ	織密	良	灰白 5SY/2	口径の 1/4	
133	雅田05-05	須恵器	長瓶	10次	S0520	口径 7.4 深高 7.1	口縁部ヨコナデ、体部ヨロケナデ	密	良	灰 SY6/1	口径の 3/4	
134	雅田05-01	須恵器	盤	10次	S0520	口径 13.4 深高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨロケナデ。	密	良	灰白 5SYT/2	口径の 1/12以下	
135	雅田25-04	土師器	杯G	10次	S0515	口径 13.1 深高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 5SYT/4	口径の軸上 後傾側	

第4表 出土遺物觀察表（4）

番号	登録番号	器種	器形	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	種度	備考
136	雁田26-05	土師器	杯A	10次	SK0515	口径 12.4 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	口径の 1/2	
137	雁田25-07	土師器	杯A	10次	SK0515	口径 3.6 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい緑 SYR5/3	口径の 1/2以上	
138	雁田26-04	土師器	杯A	10次	SK0515	口径 14.8 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~1.5cmの小孔含む	良	7.SYR7/6	口径の 1/6	
139	雁田25-05	土師器	皿A 1	10次	SK0515	口径 13.1 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	淡黄緑 10YR8/4	口径の 1/6	
140	雁田26-02	土師器	高杯	10次	SK0515	口径 6.9 底高 2.9	外輪部ヘラケタミで10倍の面取り、内 面ナデ、脚部ヨコナデ	密	良	緑 2.5YR6/6	脚部のみ 残存	
141	雁田26-01	土師器	高杯	10次	SK0515	口径 24.3 底高 2.5	口縁部ヨコナデ、外輪部ヨコナデ・ナナメ 斜め、内輪部ヨコナデ	~1.5cmの小孔含む	良	緑 SYR6/6	口径の 1/2	
142	雁田25-05	須恵器	蓋	10次	SK0515	口径 14.7 底高 2.5	口縁部ヨコナデ、体部外輪ヨコナデ	~2mmの小孔含む	良	灰 SYR6/6	口径の 1/2	
143	雁田25-06	須恵器	杯A	10次	SK0515	口径 11.9 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、底部外輪ヨコナデ 及外輪ヨコカケマツリ	~1.5cmの小孔含む	良	にぶい緑 SYR5/3	口径の 4/5	
144	雁田26-03	須恵器	杯B	10次	SK0515	口径 17.3 底高 2.8	台形 体部ヨコラコナデ、貼付高台、底部外 輪ヨコカケマツリ	~3mmの小孔含む	良	淡黄緑 2.5Y7/3	高台部の 1/6	
145	雁田27-04	須恵器	長頸瓶	10次	SK0515	口径 11.3 底高 6.9	瓶頭部内外面ヨコナデ、外面部に一 列の孔穴	~3mmの小孔含む	良	灰 NA/	須恵器のみ 残存	
146	雁田27-03	須恵器	二ね鉢	10次	SK0515	口径 9.0 底高 6.6	体部ヨコナデ、底部外輪ナデのち 後部ヨコカケマツリ	~2mmの小孔含む	良	灰白 SYT/1	須恵器のみ 残存	
147	雁田12-01	須恵器	罐B	10次	SK0529	口径 35.4 底高 2.9	側面外輪ヨコカケナダのちナラグ、内 面ナデ・オサエ、貼付把手	~3mmの小孔含む	良	灰白 SYT/2	側面の 一部のみ	
148	雁田01-03	土師器	甕C	25-6次	SK1627	口径 2.7 底高 2.7	口縁部ヨコナデ	密	良	淡黄緑 10YR8/3	口径の 1/2以下	
149	雁田06-06	土師器	杯G	178-2次	SK10888	口径 12.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部外輪ナデ・オ サエ	密	良	にぶい緑 SYR7/3	全体の 約70%	
150	雁田06-04	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.4 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	7.SYR7/6	全体の 約50%	
151	雁田07-08	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 12.6 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
152	雁田07-07	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
153	雁田06-08	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.4 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外 輪ヨコカケマツリ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
154	雁田06-02	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外 輪ヨコカケマツリ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
155	雁田06-01	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.6 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
156	雁田07-04	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.4 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
157	雁田07-05	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 13.4 底高 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約50%	
158	雁田07-01	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 16.2 底高 4.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR6/6	口径の 2/3	
159	雁田07-02	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 17.2 底高 3.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	緑 SYR7/6	口径の 3/4	
160	雁田07-03	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 16.8 底高 4.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	7.SYR6/4	全体の 約50%	
161	雁田07-06	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口径 16.8 底高 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約40%	
162	雁田06-08	土師器	甕A 2	178-2次	SK10888	口径 19.6 底高 3.1	内面ナデ、体部外輪ヘリマギヤ、底 部外輪ナデ	密	良	緑 SYR6/6	全体の 約50%	
163	雁田06-07	土師器	甕A 2	178-2次	SK10888	口径 19.1 底高 3.7	内面ナデ、口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	緑 7.SYR7/6	全体の 約50%	
164	雁田06-06	土師器	甕A 1	178-2次	SK10888	口径 16.2 底高 4.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	緑 SYR7/8	全体の 約40%	
165	雁田13-03	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 16.1 底高 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR6/6	全体の 約40%	
166	雁田09-05	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 17.8 底高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR6/6	全体の 約30%	
167	雁田09-06	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 18.4 底高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約40%	
168	雁田09-02	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 19.9 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい緑 SYR7/4	全体の 約50%	
169	雁田09-03	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 17.6 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR6/6	全体の 約50%	
170	雁田05-01	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 17.0 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/8	全体の 約40%	
171	雁田09-04	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 17.6 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR7/6	全体の 約40%	
172	雁田13-02	土師器	皿A 2	178-2次	SK10888	口径 16.8 底高 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	緑 SYR6/8	全体の 約50%	
173	雁田13-01	土師器	皿A 1	178-2次	SK10888	口径 17.6 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	緑 SYR6/8	全体の 約40%	
174	雁田04-03	土師器	甕A	178-2次	SK10888	口径 16.4 底高 11.5	口縁部ヨコナデ、体部内輪ヨコハセ 及内輪熱熱による剥離で剥離	密	良	緑 7.SYR7/6	口径の 5/12	
175	雁田04-02	土師器	甕C	178-2次	SK10888	口径 25.6 底高 7.3	口縁部ヨコナデ、体部外輪タヘハ 及内輪ヨコナデ	密	良	にぶい緑 SYR7/4	口径の 7/12	
176	雁田13-04	土師器	甕A	178-2次	SK10888	口径 14.8 底高 7.1	口縁部ヨコナデ、体部内輪ナデ	密	良	灰白 2.5YR8/2	口径の 5/12	
177	雁田02-01	土師器	平底鉢	178-2次	SK10888	口径 26.8 底高 12.2	口縁部ヨコナデ、体部内外輪上部ナ デ・下部・下底ヨコカケ	密	良	緑 SYR6/6	全体の 約70%	
178	雁田11-06	須恵器	杯A	178-2次	SK10888	口径 10.6 底高 3.8	口縁部ヨコナデ、体部ヨコロナデ。 剥離熱による剥離	やや せい	良	灰白 2.5YR/2	口縁端部に 剥離熱による 剥離	
179	雁田11-05	須恵器	杯B	178-2次	SK10888	口径 12.6 底高 3.8	口縁部ヨコナデ、体部ヨコロナデ。 剥離熱による剥離	密	良	淡黄緑 2.5YR/2	高台の 約30%は不明	
180	雁田11-04	須恵器	杯B	178-2次	SK10888	口径 9.2 底高 2.5	体部ヨコロナデ、貼付高台、底部外 輪ヨコカケマツリ	密	良	緑 SYS/1	高台の 5/12	

第5表 出土遺物觀察表（5）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	構成・部位	直通(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	埋深度	備考
181	彌田11-05	須恵器	杯B	178-2次	SK10888	口径 13.2 深さ 13.8 横幅 4.1	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ。 内面ヨハナ、底面部ヨケズリ。 底部ヨコナダ、底面部ヨケズリ。	密	良 黄灰 2.5W5/1	全体の 約90%	—	—
182	彌田13-06	須恵器	杯B	178-2次	SK10888	口径 18.0 深さ 18.0 横幅 4.9	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ。 底部ヨハナ、底面部ヨケズリ。	密	良 黄 7.SW5/1	全体の 約40%	—	—
183	彌田13-06	須恵器	杯B	178-2次	SK10888	口径 13.6 深さ 13.6 横幅 4.9	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ。 底部ヨハナ、底面部ヨケズリ。	密	良 黄白 SW7/1	全体の 約20%	—	—
184	彌田11-02	須恵器	盃	178-2次	SK10888	口径 15.4 深さ 15.4 横幅 4.8	口縁部ヨコナダ、体部外面部ヨロケ ズリ、内面ヨクロナダ、脇付つまみ	密	良 黄 SW5/1	全体の 約90%	—	—
185	彌田11-01	須恵器	盃	178-2次	SK10888	口径 15.4 深さ 15.4 横幅 4.8	口縁部ヨコナダ、体部外面部ヨロケ ズリ、内面ヨクロナダ	密	良 黄灰 2.5W6/2	全体の 約30%	—	—
186	彌田10-01	須恵器	把 飾 1	178-2次	SK10888	口径 31.2 深さ 31.2 横幅 1.5	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ。 底面部ヨハナ、底面部ヨケズリ。	密	良 白灰 SW7/1	全体の 約10%	—	—
187	彌田12-01	須恵器	底 A	178-2次	SK10888	口径 17.6 深さ 17.6 横幅 2.9	口縁部ヨコナダ、底面部ヨハナ。 底部ヨクロナダ、底面部ヨケズリ。	密	良 白灰 SW7/1	全体の 約90%	内部に「茎」 の焼造跡見	—
188	彌田11-07	製陶土器	製山型	178-2次	SK10888	口径 7.3 高さ 7.3	口縁部外面部ナダ・オサエ	微細な粒状含む	良 綠 SYR6/8	—	—	—
189	彌田09-02	鉄製品	刀子か	178-2次	SK10888	横長 4.0 横幅 1.5	—	—	—	—	—	—
190	彌田09-04	鉄製品	刀子か	178-2次	SK10888	横長 5.1 横幅 1.5	—	—	—	—	—	—
191	彌田16-01	土師器	杯 A	178-2次	SK10888	口径 15.9 深さ 15.9	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 2.5W6/8	全体の 約90%	—	—
192	彌田16-03	土師器	桙 A	178-2次	SK10888	口径 12.2 深さ 12.2	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 7.SYR7/6	全体の 約20%	—	—
193	彌田16-08	土師器	高杯	178-2次	SK10888	口径 5.0 深さ 4.1	口縁部外面部ヨケズリ、内面部ナダ	密	良 綠 SYR7/6	—	—	—
194	彌田16-04	土師器	甕 A	178-2次	SK10888	口径 12.1 深さ 7.3	口縁部ヨコナダ、体部外面部ナダ・ 内面部ナダ	密	良 にぶい緑 7.R7/4	口縁部の 外側に黒色 物付着	—	—
195	彌田16-02	土師器	甕 C	178-2次	SK10888	口径 21.8 深さ 5.5	口縁部ヨコナダ、底面部ヨハナに 横溝有	密	良 にぶい緑 7.SW7/4	口縁部の 1/6	—	—
196	彌田01-05	土師器	甕 A	10次	SK11200	口径 14.6 深さ 2.7	口縁部ヨコナダ、体部ナダ	密	良 綠 SYR6/8	全体の 約90%	—	—
197	彌田01-02	土師器	桙 A	10次	SK11200	口径 14.6 深さ 4.3	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR7/8	全体の 約90%	—	—
198	彌田01-01	土師器	甕 A	10次	SK11200	口径 19.2 深さ 2.1	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 7.SYR7/6	全体の 約90%	—	—
199	彌田01-01	土師器	平底甕	10次	SK11200	口径 23.6 深さ 11.4	口縁部ヨコナダ、底面部外側ヨハナ下 ヨロカズリ、内面部ヨハナ	密	良 綠 SYR7/6	全体の 約90%	—	—
200	彌田01-04	土師器	甕 A	10次	SK11200	口径 15.8 深さ 14.4	口縁部ヨコナダ、底面部ヨハナ下 ヨロカズリ	密	良 淡黄緑 10W8/4	全体の 約90%	—	—
201	彌田28-01	須恵器	広口壺	10次	SK11200	口径 7.3-9.3 深さ 17.4	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ、 底面部ヨハナ下ヨロカズリ	密	良 白灰 SW7/1	口縁部のゆ きが大きい	—	—
202	彌田02-05	土師器	杯 A	10次	SK527	口径 12.8 深さ 4.2	口縁部ヨコナダ、体部ナダ	密	良 綠 SYR7/6	底面部に 黒色赤面 をもつて居	—	—
203	彌田02-02	土師器	甕 A	10次	SK527	口径 17.2 深さ 3.1	口縁部ヨコナダ、体部ナダ	密	良 綠 SYR7/6	口縁部の 1/12	—	—
204	彌田02-04	土師器	底 A I	10次	SK527	口径 17.8 深さ 2.0	口縁部ヨコナダ、体部外面部ヨケズリ、 内面部ナダ	密	良 綠 SYR6/6	口縁部の 1/6	—	—
205	彌田02-03	須恵器	杯 B	10次	SK526	口径 12.4 深さ 3.2	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ、 底面部ヨハナ下ヨロカズリ	密	良 黄白 SW7/1	口縁部の 1/3	—	—
206	彌田02-01	土師器	甕 A	10次	SK526	口径 8.3 深さ 8.3	口縁部ヨコナダ、体部外面部ナダ・ 内面部ヨハナ	密	良 淡黄緑 7.SW8/4	口縁部に自然 軸付着	—	—
207	彌田11-03	土師器	甕 A	10次	SK11197	口径 12.8 深さ 2.9	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR7/8	全体の 約90%	—	—
208	彌田11-04	土師器	甕 A	10次	SK11197	口径 14.8 深さ 3.3	口縁部ヨコナダ、体部ナダ	密	良 綠 2.5W6/8	全体の 約90%	1/12	—
209	彌田07-01	土師器	甕 A	10次	SK11197	口径 15.9 深さ 3.0	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR6/6	口縁部の 1/6	—	—
210	彌田11-02	土師器	桙 A	10次	SK11197	口径 13.8 深さ 4.0	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR6/6	全体の 約90%	—	—
211	彌田11-01	土師器	高杯	10次	SK11197	口径 5.8 深さ 11.5	底面部外面部ナダ・内面部ナダ、 脚部外面部ナダ	密	良 綠 2.5W6/8	脚部のみ 残存	—	—
212	彌田28-02	須恵器	杯 B	10次	SK11197	口径 20.7 深さ 6.3	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ。 底面部ヨハナ下ヨロカズリ	密	良 黄灰 2.5W7/2	全体の 約90%	—	—
213	彌田19-02	土師器	杯 A	10次	SK527	口径 16.0 深さ 2.4	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR6/6	口縁部の 1/4	—	—
214	彌田19-01	土師器	底 A 2	10次	SK527	口径 16.6 深さ 2.4	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR7/6	口縁部の 1/12	—	—
215	彌田17-04	土師器	底 A 2	10次	SK527	口径 17.9 深さ 2.0	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR6/6	口縁部の 5/12	—	—
216	彌田19-04	土師器	甕 A	10次	SK527	口径 13.8 深さ 11.3	口縁部ヨコナダ、底面部ヨロカズリ下トナカ下トナカ 底面部ヨハナ下ヨロカズリ	~1.5cmの小石含む	良 綠 7.SYR7/6	全体の 約90%	—	—
217	彌田17-02	土師器	風呂	10次	SK527	口径 5.7 深さ 3.7	口縁部ヨコナダ、底面部ナダ・内面部 ヨハナ下ヨロカズリ	密	良 淡黄緑 10W8/4	台帳の 1/12	—	—
218	彌田17-05	須恵器	杯 B	10次	SK527	口径 9.1 深さ 2.6	口縁部内面部ヨロカズリ、底面部下トナ カ下トナカ	密	良 黄灰 2.5W6/1	台帳の 1/6	—	—
219	彌田19-03	須恵器	台付盤	10次	SK527	口径 19.2 深さ 2.6	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ。 底面部ヨハナ下ヨロカズリ	密	良 オリーブ グリーン SW5/2	口縁部の 1/3	—	—
220	彌田17-03	土師器	盤 B	10次	SK527	口径 41.4 深さ 10.8	口縁部ヨコナダ、体部外面部ナダ・ 内面部ヨハナ下ヨロカズリ	~1.5cmの小石含む	良 綠 7.SYR7/4	口縁部の 1/12	—	—
221	彌田19-05	土師器	甕 A	10次	SK291	口径 15.1 深さ 2.6	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 綠 SYR7/6	口縁部の 1/4	—	—
222	彌田21-01	土師器	底 A 2	10次	SK291	口径 15.8 深さ 2.2	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 にぶい緑 7.SW7/4	口縁部の 1/2	—	—
223	彌田21-02	土師器	桙 A	10次	SK291	口径 17.2 深さ 4.8	口縁部ヨコナダ、体部ナダ・オサエ	密	良 にぶい緑 10W8/4	口縁部の 1/4	—	—
224	彌田19-05	土師器	甕 A	10次	SK291	口径 13.7 深さ 7.3	口縁部ヨコナダ、体部外面部ナダ・ 内面部ナダ	密	良 にぶい緑 2.5W7/3	口縁部の 1/4	—	—
225	彌田21-03	玄地陶器	梅	10次	SK291	口径 17.3 深さ 5.5	口縁部ヨコナダ、体部ヨクロナダ・ 底面部ヨハナ下ヨロカズリ	密	良 黄灰 2.5W7/3 青白青 7W8/3	全体の 約30%	—	—

第6表 出土遺物観察表（6）

番号	登録番号	器種	器形	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	種度	備考
226	雁田26-02	土師器	杯A	18-2次	SD901	口径 13.2 底高 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	南	良	にじみ・黒褐色 SYR7/2	口径の 1/3	
227	雁田23-05	土師器	杯A	18-2次	SD901	口径 12.9 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR7/6	全体の 約70%	
228	雁田13-04	土師器	杯A	18-2次	SD901	口径 13.4 底高 3.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黒 SYR7/6	全体の 約90%	
229	雁田23-01	土師器	杯A	18-2次	SD901	口径 14.2 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黒 SYR7/6	全体の 約30%	
230	雁田23-02	土師器	皿A 1	18-2次	SD901	口径 14.2 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	淡黄褐色 SYR7/6	全体の 約90%	
231	雁田26-03	土師器	甕A	18-2次	SD901	口径 16.0 底高 3.3	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	にじみ・黒褐色 SYR7/2	口径の 1/2付着	
232	雁田23-06	土師器	甕A	18-2次	SD901	口径 16.8 底高 3.3	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	にじみ・黒褐色 SYR7/4	口径の 1/6	
233	雁田23-06	土師器	甕A	18-2次	SD901	口径 18.6 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ	密	良	淡黄褐色 SYR7/4	口径の 1/12以下	
234	雁田23-04	土師器	甕A	18-2次	SD901	口径 26.8 底高 10.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ 後縁後・内面ヨコハケ	密	良	淡黄褐色 SYR7/4	全体の 約20%付着	
235	雁田26-04	土師器	甕A	18-2次	SD901	口径 25.2 底高 9.0	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ	密	良	淡黄褐色 SYR7/4	口径の 1/12	
236	雁田23-03	須恵器	蓋	18-2次	SD901	口径 15.4 底高 2.5	体部ヨロクナデ、貼付つまり	密	良	灰白 SYT/1	全体の 約40%	
237	雁田23-07	須恵器	杯B	18-2次	SD901	口径 19.4 底高 2.5	体部ヨロクナデ、貼付高台	密	良	灰白 SYT/1	全体の 約6/7	
238	雁田05-03	土師器	杯A	178-2次	SK10899	口径 12.4 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR6/6	口径の 1/6	
239	雁田05-02	土師器	皿A 2	178-2次	SK10899	口径 16.4 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR7/6	口径の 1/12	
240	雁田09-01	土師器	皿A 2	178-2次	SK10899	口径 17.4 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR7/6	全体の 約90%	
241	雁田06-03	土師器	高杯	178-2次	SK10899	口径 20.9 底高 3.9	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデチ、底部ヨロクナデ	密	良	黒 SYR6/8	全体の 約90%	
242	雁田14-01	土師器	平底杯	178-2次	SK10899	口径 22.9 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ	密	良	黒 SYR6/6	口径の 1/12	
243	雁田04-01	土師器	平底杯	178-2次	SK10899	口径 23.9 底高 3.9	口縁部ヨコナデ、体部外面上部ナデチ、底部ヨロクナデ	密	良	黒 SYR7/8	全体の 約30%	
244	雁田06-01	土師器	平底杯	178-2次	SK10899	口径 25.6 底高 10.9	口縁部ヨコナデ・内面ヨコハケ・下平・下タテハケリ	密	良	黒 SYR7/6	全体の 約70%	
245	雁田14-02	須恵器	杯B	178-2次	SK10899	口径 13.2 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、貼付高台・体部外面ヨコハケリ	密	良	灰 SY5/1	全体の 約90%	
246	雁田17-02	土師器	杯A	178-2次	SK10865	口径 15.8 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黒 SYR7/6	口径の 1/4	
247	雁田17-01	土師器	杯B	178-2次	SK10865	口径 19.2 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、貼付ナデ・貼付高台	密	良	黒 SYR7/6	全体の 約90%	
248	雁田17-06	土師器	皿A 1	178-2次	SK10865	口径 18.8 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR6/8	全体の 約20%	
249	雁田17-04	土師器	甕A	178-2次	SK10865	口径 13.6 底高 4.4	口縁部ヨコナデ、体調整不明	密	良	黒 SYR6/6	口径の 1/6	
250	雁田02-02	土師器	甕A	178-2次	SK10865	口径 18.6 底高 14.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデチ・ナマヘバ 内面上半ヨコナデ・下平・下タテハケリ	密	良	淡黄褐色 SYR7/3	全体の 約90% 器表面の摩 耗著しい	
251	雁田17-05	須恵器	無台碗	178-2次	SK10865	口径 17.6 底高 5.1	口縁部ヨコナデ・体部ヨロクナデ・底部 ヨロクナデ・内面ヨロクナデ	密	良	灰 SY5/1	全体の 約40%	
252	雁田17-03	土師器	蓋	178-2次	SK10865	口径 15.8 底高 2.0	口縁部ヨコナデ。体部内外面ヨロクナデ	密	良	灰 SY5/1	全体の 約30%	
253	雁田17-07	土製品	土綱	178-2次	SK10865	口径 16.6 底高 14.1	外縁ナデ	密	良	淡黄褐色 SYR7/4	ほぼ完形	
254	雁田19-08	土師器	杯A	178-2次	SK10874	口径 16.6 底高 4.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR6/6	口径の 1/6	
255	雁田19-03	土師器	甕A 2	178-2次	SK10874	口径 15.6 底高 4.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	良	にじみ・黒褐色 SYR7/4	全体の 約70% 外面上に黒色 物付着		
256	雁田19-06	土師器	皿A 2	178-2次	SK10874	口径 16.8 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR6/8	全体の 約40%	
257	雁田19-01	土師器	皿A 2	178-2次	SK10874	口径 20.2 底高 2.0	口縁部ヨコナデ・内面ナデ・底部外 面ヨロクナデ	密	良	にじみ・黒褐色 SYR7/4	全体の 約40%	
258	雁田19-02	土師器	甕A	178-2次	SK10874	口径 20.2 底高 2.0	口縁部ヨコナデ・内面ヨロクナデ	密	良	にじみ・黒褐色 SYR7/4	全体の 約40% 2/3	
259	雁田19-04	須恵器	蓋	178-2次	SK10874	口径 15.2 底高 2.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヨロクナ デ・内面ヨロクナデ	密	良	灰 SY5/1	口縫の 1/2	
260	雁田19-06	須恵器	蓋	178-2次	SK10874	口径 15.2 底高 2.2	口縁部ヨコナデ・贴付ヨロクナデ	密	良	灰 SY5/1	口縫の 1/12以下	
261	雁田19-07	土製品	土綱	178-2次	SK10874	残長 2.3 重さ 2.09	外縁ナデ	密	良	灰 SY5/2	全体の 約80%	
262	雁田08-04	土師器	甕A	23次	SK1181	口径 16.0 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黒 SYR6/6	口径の 1/12	
263	雁田08-03	土師器	甕A	23次	SK1181	口径 15.6 底高 4.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR6/6	口径の 1/12	
264	雁田08-06	須恵器	蓋	23次	SK1181	口径 6.4 底高 4.0	体部ヨロクナデ、底部ヨロクナデ	密	良	灰 SY5/2	底部の 内面に自然 軽度付着	
265	雁田08-05	灰陶陶器	甕	23次	SK1181	口径 13.4 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ヨロクナデ	密	良	素地・灰白 SYT/2	口縫の 1/12	
266	雁田08-03	土師器	短頸甕	10次	SK11204	口径 11.8 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黒 SYR6/6	口縫の 1/12	
267	雁田08-01	土師器	甕A	10次	SK11204	口径 16.2 底高 6.8	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ	密	良	黒 SYR7/6	口縫の 1/6	
268	雁田08-02	土師器	蓋	10次	SK11204	口径 6.6 底高 3.9	体部外面タテハケ・ナデ・オサエ・ 内面ヨロクナデ	密	良	黒 SYR6/6	底部の 1/3	表記か
269	雁田03-04	土師器	皿D	23次	SK1177	口径 12.9 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明灰褐色 SYR7/6	口縫の 1/3	
270	雁田03-01	土師器	甕A 2	23次	SK1177	口径 17.4 底高 5.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 SYR7/8	口縫の 1/4	

第7表 出土遺物觀察表（7）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調整・技法の特徴	出土	焼成	色調	推定度	備考
271	雅III-03-02	土器器	庄A	23次	SK1177	口径 底高 腹高	14.2 1.6 14.4 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 7.5YR7/6	口径の 1/4
272	雅III-03-03	土器器	庄A	23次	SK1177	底径 腹高	7.8 1.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	口径の 1/4
273	雅III-03-09	須恵器	杯A	23次	SK1177	底径 腹高	13.6 2.5	体部ヨクロナデ、底部外面部ヨクロナデ	密	良	灰 2.5YR7/2	底径の 1/3
274	雅III-03-07	須恵器	台付盤	23次	SK1177	口径 底高	11.2 2.6	体部ヨクロナデ、點付高台、底部外 面部ヨクロナデ	密	良	灰白 5YR7/2	高台径の 1/6
275	雅III-03-08	須恵器	杯B	23次	SK1177	口径 底高	11.2 2.6	体部ヨクロナデ、點付高台	密	良	灰白 5YR7/2	高台径の 1/12
276	雅III-03-11	土製品	土師	23次	SK1177	全長 幅 厚	5.4 15.8 1.5	外縁ナデ	密	良	淡黄褐 10YR8/3	ほぼ完形
277	雅IV-09-04	土器器	杯A	174-8次	SK1136	口径 底高	13.6 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	焼 5YR7/6	口径の 1/4
278	雅IV-09-05	土器器	杯A	174-8次	SK1136	口径 底高	17.8 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 2.5YR7/6	口径の 1/12
279	雅IV-09-05	土器器	楕A	174-8次	SK1136	口径 底高	12.6 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	口径の 1/6
280	雅IV-10-01	土器器	庄A-2	174-8次	SK1136	口径 底高	15.6 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 10YR6/4	口径の 1/10
281	雅IV-09-06	土器器	庄A	174-8次	SK1136	口径 底高	15.0 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 7.5YR7/6	口径の 1/12
282	雅IV-09-07	土器器	庄A	174-8次	SK1136	口径 底高	15.0 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 2.5YR7/6	口径の 1/12
283	雅IV-09-08	土器器	斐A	174-8次	SK1136	口径 底高	17.4 4.8	口縁部ヨクロナデ、体部外面部ハケ	密	良	灰 2.5YR7/2	にぶい 底径の 1/3
284	雅IV-10-02	土器器	斐A	174-8次	SK1136	口径 底高	20.7 5.6	口縁部ヨコナデ、体部外面部ハケ・ 内縫目ヨハケ	密	良	焼 7.5YR7/3	口径の 1/6
285	雅IV-09-01	土器器	斐A	174-8次	SK1136	口径 底高	21.8 10.7	口縁部ヨコナデ、体部外面部ハケ・ 内縫目ヨハケ	密	良	淡黄褐 10YR8/3	口径の 1/12
286	雅IV-10-04	須恵器	杯A	174-8次	SK1136	口径 底高	10.1 2.1	体部ヨクロナデ、底面へラケ目	密	良	灰 5YR6/1	底径の 1/6
287	雅IV-10-03	須恵器	杯B	174-8次	SK1136	口径 底高	9.6 2.5	体部ヨクロナデ、底面ヨクロナデ	密	良	灰 10YR6/1	画台の 1/6
288	雅IV-11-01	須恵器	杯B	174-8次	SK1136	口径 底高	12.2 1.9	体部ヨクロナデ、點付高台、底面外 面部ヨクロナデ	密	良	灰 N/	高台径の 1/6
289	雅IV-04-01	土器器	庄A	23次	SK1184	口径 底高	12.8 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	焼 5YR6/6	口径の 1/6
290	雅IV-04-04	須恵器	蓋	23次	SK1184	口径 底高	8.8 1.3	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ	密	良	素地: 黄 2.5YR 自然模: 青色 8YR	口径の 1/6
291	雅IV-04-01	須恵器	庄A	23次	SK1184	口径 底高	20.6 2.4	口縁部ヨコナデ、体部外面部平行タ ケハケ	密	良	焼 2.5YR7/2	口径の 1/12
292	雅IV-04-02	須恵器	斐C	23次	SK1184	口径 底高	31.2 2.4	口縁部ヨコナデ、体部外面部平行タ ケハケ	密	良	灰 2.5YR7/1	口径の 1/12
293	雅IV-07-01	須恵器	杯A	23次	SK1157	口径 底高	14.8 5.1	口縁部ヨクロナデ、底面ヨクロナデ・ 内縫目ヨクロナデ	密	良	焼 5YR7/2	全体の 約50%
294	雅IV-07-03	須恵器	杯B	23次	SK1157	口径 底高	11.2 1.2	体部ヨクロナデ、點付高台、底部外 面部ヨクロナデ	密	良	灰 2.5YR7/2	高台径の 1/3
295	雅IV-07-02	須恵器	杯B	23次	SK1157	口径 底高	10.6 3.0	体部ヨクロナデ、點付高台、底部外 面部ヨクロナデ	密	良	灰白 2.5YR7/1	高台径の 1/6
296	雅IV-07-04	須恵器	蓋	23次	SK1157	口径 底高	15.6 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ・ 内縫目ヨハケ	密	良	灰白 2.5YR7/1	口径の 1/8
297	雅IV-07-06	陶製馬具	鞍馬	23次	SK1157	口径 底高	5.3 2.5	外縁ナデ・オサエ、内縫目ナデ・ カシラ	密	良	焼 5YR6/6	推測なう粘土含む
298	雅IV-27-03	土器器	庄A	18-1次	SK919	口径 底高	14.8 2.9	口縁部ヨコナデ、体部外面部ハケズ 内縫目	密	良	焼 5YR6/6	口径の 1/12
299	雅IV-27-07	土器器	杯A	18-1次	SK919	口径 底高	14.8 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	淡黄褐 10YR8/3	口径の 1/6
300	雅IV-27-04	土器器	杯A	18-1次	SK919	口径 底高	15.0 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい 7.5YR7/4	口径の 1/6
301	雅IV-27-01	土器器	杯A	18-1次	SK919	口径 底高	17.1 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	にぶい 10YR7/4	口径の 1/6
302	雅IV-27-02	土器器	杯A	18-1次	SK919	口径 底高	12.0 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	焼 7.5YR7/6	全体の 約50%
303	雅IV-27-05	土器器	庄A-2	18-1次	SK919	口径 底高	17.9 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	淡黄褐 7.5YR6/6	口径の 1/12
304	雅IV-29-07	土器器	庄A	18-1次	SK919	口径 底高	11.2 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	淡黄褐 10YR8/3	全体の 約50%
305	雅IV-20-12	須恵器	杯B	18-1次	SK919	口径 底高	10.1 1.4	体部ヨクロナデ、點付高台	密	良	灰 10YR6/1	高台径の 1/8
306	雅IV-20-10	須恵器	無台盤	18-1次	SK919	口径 底高	19.2 4.3	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ	2m以下小分け	良	灰白 5YR7/1	全体の 約20%
307	雅IV-20-09	灰陶輪	楕	18-1次	SK919	口径 底高	13.0 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ	密	良	素地: 黄 2.5YR 2.5YR7/2	全体の 20%以下
308	雅IV-20-11	灰陶輪	楕A	18-1次	SK919	口径 底高	9.2 2.2	點付高台	密	良	素地: 黄白 5YR7/2	画台の 1/4
309	雅IV-15-05	土器器	杯A-2	10次	SK11202	口径 底高	14.6 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR7/8	口径の 1/6
310	雅IV-15-04	土器器	楕A-2	10次	SK11202	口径 底高	17.8 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	7.5YR7/4	口径の 1/4
311	雅IV-15-03	灰陶輪	楕	10次	SK11202	口径 底高	15.4 2.7	口縁部ヨクロナデ、底面ヨクロナデ	密	良	素地: 茶色 8YR 2.5YR7/2	口径の 1/6
312	雅IV-15-01	灰陶輪	楕	10次	SK11202	口径 底高	16.6 4.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ。 底面ヨクロナデ	密	良	素地: 黄 2.5YR 2.5YR7/2	全体の 約50%
313	雅IV-09-07	土器器	斐A	178-2次	SK10876	口径 底高	16.6 5.0	口縁部ヨクロナデ、体部ヨクロナデ 底面ヨクロナデ	見込みに 重ね書き	良	灰 2.5YR7/4	口径の 1/6
314	雅IV-09-07	土器器	斐A	178-2次	SK10876	口径 底高	16.6 5.0	口縁部ヨクロナデ、點付高台、底面ヨクロナデ	見込みに 重ね書き	良	灰 2.5YR7/4	口径の 1/3
315	雅IV-13-02	須恵器	此縫痕	174-8次	SK11173	口径 底高	6.6 3.3	体部外面部ヨクロナデ・内縫目ヨ クロナデ、點付高台、底面ヨクロナデ	密	良	灰黄 2.5YR4/1	内縫目に自然 色付要素

第8表 出土遺物観察表（8）

番号	登録番号	種類	形態	調査次数	構成・部位	直置(cm)	調節・技法の特徴	出土	構成	色調	性度	備考
316	雁田13-04	灰釉陶器	直	174-8次	SK11173	口径 7.2 高さ 2.1	体部ロクロナデ、貼付高台。底部外側面切欠き	南	良	底面:灰白 2.817/2 輪縁:ベージュ 784	高台径の 約70% 見込み部に 窓ねじき痕	
317	雁田13-01	灰釉器	台付盤	174-8次	SK11173	口径 13.1 高さ 2.2	体部ロクロナデ、貼付高台。底部外側面切欠き	密	良	底面:灰白 871/1	高台径の 1/10	
318	雁田13-03	灰釉陶器	把手付瓶	174-8次	SK11173	口径 4.9 高さ 3.0	体部内外面ロクロナデ。把手貼付	密	良	底面:灰白 3.518/2 輪縁:青色 837	全体の 約50%	黒投査 素地無質
319	雁田02-03	土師器	杯A	23次	SK1153	口径 14.6 高さ 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄褐色 10188/6	全体の 約40%	
320	雁田02-02	土師器	杯A	23次	SK1153	口径 14.8 高さ 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	淡黃褐色 2. SYR6/4	全体の 約40%	
321	雁田02-04	土師器	直A	23次	SK1153	口径 16.2 高さ 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 2. SYR6/4	全体の 約20%	
322	雁田02-01	土師器	甕A	23次	SK1153	口径 25.8 高さ 5.2	口縁部ヨコナデ、体部外側面方向 2. ハクス・内側ヨコハクナデ	密	良	灰褐色 2. SYR6/4	全体の 約20%	
323	雁田02-06	灰釉陶器	小瓶	23次	SK1153	口径 15.1 高さ 4.2	体部ロクロナデ、貼付高台。体部外 側面カット	密	良	底面:灰白 2.817/2 輪縁:ベージュ 784	高台径の 1/12	
324	雁田02-05	灰釉陶器	小瓶	23次	SK1153	口径 10.8 高さ 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ。 貼付高台。底部外側面切欠ナデ	密	良	底面:灰白 3.518/2 輪縁:青色 837	全体の 約20%	
325	雁田14-02	土師器	杯A	174-8次	SK1166	口径 14.2 高さ 3.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口径の 1/4	
326	雁田14-03	土師器	杯A	174-8次	SK1166	口径 14.8 高さ 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口径の 1/4	
327	雁田14-05	土師器	甕A	174-8次	SK1166	口径 14.4 高さ 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口径の 1/6	
328	雁田14-01	土師器	直A 2	174-8次	SK1166	口径 15.2 高さ 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/8	口径の 1/12	
329	雁田14-04	土師器	直A	174-8次	SK1166	口径 15.2 高さ 1.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 7.5YR6/6	口径の 1/12	
330	雁田14-06	墨色土器 A類	甕	174-8次	SK1166	口径 7.0 高さ 1.0	体部外側ナ・内側ナ・ラミガキ、貼 付高台、底部外側面切欠ナデ	密	良	底面:灰褐色 8E4 輪縁:ベージュ 784	高台径の 1/6	
331	雁田27-08	土師器	杯A	18-1次	SK905	口径 14.4 高さ 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR7/6	口径の 1/6	
332	雁田27-06	土師器	直A 2	18-1次	SK905	口径 15.8 高さ 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	淡黃褐色 10YR8/4 輪縁:ベージュ 784	口径の 1/2	
333	雁田29-06	土師器	直A	18-1次	SK905	口径 15.2 高さ 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR7/6	口径の 1/12	
334	雁田29-05	土師器	直A	18-1次	SK905	口径 1.6 高さ 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰褐色 7.5YR7/6	全体の 約30%	
335	雁田27-09	土師器	甕	18-1次	SK905	口径 15.2 高さ 3.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰褐色 7.5YR7/6	口径の 1/6	
336	雁田29-04	土師器	高杯	18-1次	SK905	口径 6.1 高さ 6.1	脚部外側カズリ、内面ナデ	密	良	灰褐色 7.5YR7/6	脚部外側の 1/2	
337	雁田29-03	土師器	高杯	18-1次	SK905	口径 9.1 高さ 9.1	脚部外側カズリ、内面ナデ	密	良	灰褐色 5YR7/6	脚部外側の 1/2	
338	雁田29-02	土師器	甕A	18-1次	SK905	口径 14.6 高さ 2.0	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	淡赤褐色 2. SYR7/4	口徑の 1/12	
339	雁田27-11	灰釉器	杯B	18-1次	SK905	口径 9.8 高さ 2.0	体部ロクロナデ、貼付高台	密	良	灰褐色 10YR6/1	合板の 1/12	
340	雁田27-10	灰釉器	直	18-1次	SK905	口径 17.8 高さ 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	底面:灰白 2.817/1 輪縁:ベージュ 784	口径の 1/12	
341	雁田29-01	灰釉陶器	甕	18-1次	SK905	口径 7.4 高さ 1.9	体部ロクロナデ。外縁一部ケズリ。	密	良	底面:灰白 3.518/2 輪縁:ベージュ 784	台形の 1/2	
342	雁田25-05	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 13.8 高さ 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口径の 1/12	
343	雁田25-04	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 12.9 高さ 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 7.5YR7/4	口徑の 1/12	
344	雁田25-06	土師器	直A	18-2次	SK925	口径 15.2 高さ 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 7.5YR6/4	口徑の 1/12	
345	雁田25-02	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 9.4 高さ 2.6	体部ナデ、貼付高台	密	良	灰褐色 5YR6/6	高台径の 1/12以下	
346	雁田30-02	製塙土器	志摩式 製塙土器	18-2次	SK925	口径 5.9 高さ 2.5	内面ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 ~1mmの細かさ	口徑の 1/12以下	
347	雁田25-07	灰釉器	杯B	18-2次	SK925	口径 10.8 高さ 2.3	体部ロクロナデ。底部外側面切痕。 貼付高台	密	良	底面:灰白 2.817/1 ~2mmの細かさ	高台径の 1/12	
348	雁田05-02	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 11.0 高さ 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口徑の 1/16	
349	雁田01-07	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 16.4 高さ 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの細かさ	密	良	灰褐色 5YR6/6 3/4	口徑の 1/16	
350	雁田17-01	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 12.2 高さ 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口徑の 1/16	
351	雁田16-05	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.1 高さ 3.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの細かさ	良	灰褐色 7.5YR7/6	口徑の 1/16		
352	雁田05-05	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 12.9 高さ 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 7.5YR7/4	口徑の 1/3	
353	雁田04-08	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.4 高さ 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰褐色 5YR6/6	口徑の 1/4	
354	雁田04-05	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.6 高さ 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1mmの細かさ	良	灰褐色 7.5YR7/6	ほぼ完形		
355	雁田03-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.2 高さ 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	良	灰褐色 5YR7/8	口徑の 1/3	体部に軽土 接合無残存	
356	雁田05-06	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.5 高さ 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	灰褐色 5YR6/6	口徑の 1/4	体部に軽土 接合無残存	
357	雁田01-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.5 高さ 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~3mmの細かさ	良	灰褐色 7.5YR6/6	口徑の 1/12		
358	雁田03-09	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.2 高さ 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	良	灰褐色 5YR6/6	口徑の 1/16		
359	雁田04-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.6 高さ 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの細かさ	良	灰褐色 5YR7/4	口徑の 1/12		
360	雁田16-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.8 高さ 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1mmの細かさ	良	灰褐色 7.5YR7/4	口徑の 1/4	体部に軽土 接合無残存	

第9表 出土遺物觀察表（9）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	性度序	備考
361	叢III-04-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.1 底高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	密	良	櫻 7.SYR7/6	完形	
362	叢III-04-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.2 底高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR7/6	口径の 1/4	
363	叢III-05-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.7 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR7/6	口径の 1/12	
364	叢III-02-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.0 底高 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/4	口縫に油煙 付着
365	叢III-08-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.4 底高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/6	
366	叢III-05-08	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 15.0 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/2	
367	叢III-01-06	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.4 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/3	
368	叢III-02-02	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.7 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 5/12	
369	叢III-04-06	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.6 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄櫻 10YR7/4	口径の 1/4	
370	叢III-17-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.4 底高 3.4	口縁部ヨココダ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.SYR7/4	口径の 3/4	口縫に油煙 付着
371	叢III-05-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.4 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/2	
372	叢III-05-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.9 底高 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.SYR7/4	口径の 1/4	
373	叢III-02-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.7 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	密	良	にぶい黄 7.SYR6/4	口径の 1/4	
374	叢III-16-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 5.YR8/6	口径の 1/6	土師に粘土 合板で覆る
375	叢III-05-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄櫻 10YR7/4	口径の 1/12	
376	叢III-04-02	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 16.5 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 1/3	
377	叢III-01-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 15.8 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明黄櫻 10YR7/6	口径の 1/4	
378	叢III-16-06	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 12.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 7.SYR7/6	口径の 1/6	
379	叢III-04-04	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 13.7 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 10YR7/4	口径の 5/12	
380	叢III-03-01	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 12.8 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明黄櫻 10YR7/6	口径の 3/4	
381	叢III-02-01	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 13.6 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	密	良	にぶい黄 10YR7/4	口径の 1/3	
382	叢III-17-03	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 14.0 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR6/6	口径の 5/12	
383	叢III-02-06	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 14.4 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	密	良	にぶい黄 10YR7/4	口径の 5/6	
384	叢III-02-08	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 14.9 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 7.SYR7/6	全体の 約90%		
385	叢III-11-02	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.0 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.SYR7/4	口径の 1/6	
386	叢III-01-05	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 16.3 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR6/6	全体の 約30%		
387	叢III-01-03	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 17.3 底高 4.2	口縁部多段ヨコナデ、体部ナデ・オ サエ ~2mmの小石含む	良	櫻 7.SYR7/6	口径の 3/4		
388	叢III-02-08	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 17.0 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR6/6	口径の 5/12		
389	叢III-02-07	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.5 底高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	にぶい黄 7.SYR7/4	口径の 3/4		
390	叢III-11-06	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	にぶい黄 10YR7/3	全体の 約30%		
391	叢III-12-09	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.2 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR7/6	全体の 約90%		
392	叢III-12-02	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR6/6	口径の 3/4		
393	叢III-12-06	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.9 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	良	櫻 7.SYR7/6	全体の 約90%		
394	叢III-16-01	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.5 底高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR6/8	ほぼ完形		
395	叢III-11-05	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.8 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 7.SYR7/6	全体の 約40%		
396	叢III-06-05	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.5 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	にぶい黄 7.SYR7/4	全体の 約15%		
397	叢III-12-05	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR7/6	全体の 約80%	
398	叢III-12-10	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.9 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	櫻 SYR7/8	全体の 約80%	
399	叢III-06-04	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 14.8 底高 1.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.SYR7/4	口径の 1/12	
400	叢III-12-04	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 14.8 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR7/6	全体の 約80%		
401	叢III-12-03	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~1.5cmの小石含む	良	櫻 SYR7/6	口径の 3/4		
402	叢III-03-03	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 14.9 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	良	櫻 SYR7/6	全体の 約40%		
403	叢III-11-01	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.6 底高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	良	櫻 SYR7/6	口径の 1/2		
404	叢III-10-09	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 15.7 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~3mmの小石含む	良	櫻 SYR7/6	全体の 約30%		
405	叢III-16-04	土師器	碗A	18-2次	SK926	口径 16.1 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ ~2mmの小石含む	良	にぶい黄 7.SYR7/4	口径の 3/4		

第10表 出土遺物觀察表（10）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	構成・層位	直置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	難度	備考
406	雅III-11-08	土師器	庄A	18-2次	SK926	口径 16.3 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5cmの小石含む	良	縦 7.5YR7/6	口径の 1/2	
407	雅III-17-02	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.4 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR6/6	全体の 約50%	全体に軽土 接合部残る
408	雅III-10-08	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 13.7 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR6/6	全体の 約40%	
409	雅III-06-07	土師器	庄A	18-2次	SK926	口径 13.7 底高 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 5YR7/6	全体の 約30%	
410	雅III-06-01	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.5 底高 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 7.5YR7/4	全体の 約50%	
411	雅III-03-08	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.5 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~2mmの小石含む	良	縦 7.5YR7/4	全体の 約50%	
412	雅III-06-02	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.3 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR6/4	全体の 約40%	底部に軽土 接合部残る
413	雅III-03-02	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.6 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~1.5cmの小石含む	良	縦 7.5YR7/6	全体の 約50%	底部に軽土 接合部残る
414	雅III-11-09	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.9 底高 1.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 5YR6/6	口径の 1/2	
415	雅III-12-07	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 15.2 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 5YR7/4	全体の 約70%	
416	雅III-06-03	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 15.3 底高 1.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 7.5YR7/6	口径の 1/6	
417	雅III-12-01	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.4 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 7.5YR7/6	口径の 1/4	
418	雅III-06-09	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 14.7 底高 1.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~2mmの小石含む	良	縦 5YR6/6	全体の 約50%	
419	雅III-11-03	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 15.4 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 5YR6/6	口径の 1/3	
420	雅III-12-08	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 15.3 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	縦 5YR6/6	全体の 約60%	
421	雅III-06-08	土師器	庄A	18-2次	SK925	口径 15.5 底高 1.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR7/6	全体の 約40%	
422	雅III-07-01	土師器	台付瓶	18-2次	SK925	口径 21.7 底高 6.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・外面ナデ。 底部下平内面ヘラカリナ	密	良	縦 5YR6/6	口径の 1/8	
423	雅III-10-03	土師器	台付杯	18-2次	SK925	口径 8.3 底高 2.8	内側内面ナデ、貼付高台、高台内 底面	密 ~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR7/6	高台径の 7/12	
424	雅III-08-02	土師器	台付杯	18-2次	SK925	口径 10.2 底高 3.0	内側ナデ、貼付高台	密	良	縦 5YR6/8	高台径の 1/12	
425	雅III-10-01	土師器	台付杯	18-2次	SK925	口径 7.2 底高 1.7	贴付ナデ	密	良	縦 5YR7/6	高台径の 1/4	
426	雅III-10-04	土師器	蓋	18-2次	SK925	口径 2.9 底高 1.7	内側内面ナデ	密	良	縦 5YR6/6	つまみ頭 のみ残存	
427	雅III-07-02	土師器	蓋	18-2次	SK925	口径 5.5 底高 1.4	内側内面ナデ、体部外下面下平ヘラ カタマ	密	良	縦 5YR6/6	内側内面 のみ残存	
428	雅III-07-03	土師器	高杯	18-2次	SK925	口径 23.6 底高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ。 底部外面上平ヘラ	~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR6/6	口径の 1/12	
429	雅III-07-04	土師器	高杯	18-2次	SK925	口径 9.9 底高 2.4	内側外表面ヘラクリヤで13面につくる。	密 ~2mmの小石含む	良	縦 5YR6/6	脚部のみ 残存	
430	雅III-08-01	土師器	高杯	18-2次	SK925	口径 6.7 底高 2.4	内側外表面ヘラクリヤで13面につくる。 内側ナデ、杯形刻画	密	良	縦 7.5YR7/6	脚部のみ 残存	
431	雅III-17-05	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 12.3 底高 5.1	口縁部ヨコナデ、体部外下面ナデイタ タケ	~2mmの小石含む	良	横 7.5YR4/2	口径の 1/3	外付
432	雅III-09-03	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 12.8 底高 5.2	口縁部ヨコナデ、体部外下面タケハ タケナ	~2mmの小石含む	良	横 7.5YR7/3	口径の 1/2	
433	雅III-11-04	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 12.9 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部外下面タケハ タケナ	密	良	横 7.5YR7/4	口径の 1/6	
434	雅III-08-05	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 16.6 底高 5.5	口縁部ヨコナデ。体部外下面タケハ タケナ	密	良	横 7.5YR7/3	口径の 1/3	口付
435	雅III-17-05	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 16.9 底高 6.2	口縁部ヨコナデ、体部外下面タケハ タケナ	密	良	横 7.5YR7/4	口径の 1/5	
436	雅III-09-01	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 17.4 底高 6.1	口縁部ヨコナデ、体部外下面タケハ タケナ	密 ~1.5cmの小石含む	良	横 7.5YR6/6	口径の 1/6	
437	雅III-06-06	土師器	甕A	18-2次	SK925	口径 15.6 底高 5.6	口縁部ヨコナデ、体部外下面タケハ タケナ	密	良	横 7.5YR7/3	口径の 1/7	
438	雅III-17-01	土師器	甕C	18-2次	SK925	口径 20.5 底高 5.0	口縁部ヨコナデ。体部外下面タケハ タケナ	~1.5cmの小石含む	良	横 7.5YR7/4	口径の 1/12	
439	雅III-19-01	土師器	甕C	18-2次	SK925	口径 25.7 底高 10.2	口縁部ヨコナデ、体部外下面タケハ タケナ	~1.5cmの小石含む	良	横 7.5YR8/4	口径の 1/6	
440	雅III-19-02	土師器	甕	18-2次	SK925	口径 23.0 底高 6.2	口縁部ヨコナデ。罐部を横に折り返 す。内側外表面タケハタケ内面ヨコハタ ケ	~1.5cmの小石含む	良	横 7.5YR8/6	口径の 1/10	
441	雅III-09-04	土師器	平底甕	18-2次	SK925	口径 20.3 底高 4.9	口縁部ヨコナデ。体部外下面タケハ タケナ	密	良	縦 5YR6/6	口径の 1/6	
442	雅III-21-01	製陶土器	塑形土器	18-2次	SK925	器高 5.6 内板ナ	口縁部ヨコナデ。体部外下面タケハ タケナ	やや粗 ~1.5cmの小石含む	良	縦 7.5YR7/4	口径の 1/5	
443	雅III-19-04	製陶土器	塑形土器	18-2次	SK925	器高 5.4 内板ナ	内側ナデ・オサエ。内板ナ	やや粗 ~1.5cmの小石含む	良	縦 5YR7/6	—	
444	雅III-15-01	須恵器	杯B	18-2次	SK925	口径 12.6 底高 4.2	口縁部ヨコナデ、体部クロナダ。 粘付高台、高台内ケリナ	密	良	横白 2.5YR7/2	全体の 約70%	
445	雅III-15-03	須恵器	杯B	18-2次	SK925	口径 7.7 底高 3.4	口縁部クロナダ。贴付高台、底延外	密	良	横白 7.5YR7/1	全体の 約15%	
446	雅III-15-06	須恵器	甕	18-2次	SK925	口径 16.6 底高 7.7	口縁部ヨコナデ。体部クロナダ	密	良	横白 5YR7/1	口径の 1/10	内面に自然 輪袖付
447	雅III-15-07	須恵器	甕	18-2次	SK925	口径 16.9 底高 7.2	口縁部ヨコナデ。体部クロナダ	密	良	横白 7.5YR7/1	口径の 1/12	
448	雅III-15-11	須恵器	甕G	18-2次	SK925	口径 5.9 底高 2.9	口縁部ヨコナデ。罐部ヨコナデ	~1.5cmの小石含む	良	横白 7.5YR7/3	口径の 1/12	
449	雅III-15-10	須恵器	甕G	18-2次	SK925	口径 3.5 底高 2.9	内側面ヨコナデ	~1.5cmの小石含む	良	横白 7.5YR7/4	口径の 約30%	内面に自然 輪袖付
450	雅III-15-02	須恵器	台付甕	18-2次	SK925	口径 7.9 底高 3.9	体部クロナダ。贴付高台、高台内 面	密	良	横白 N/1	全体の 内面に崩壊	

第11表 出土遺物觀察表（11）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	保存度	備考
451	雁田15-12	須恵器	高杯	18-2次	SK926	径深 4.5 高さ 6.7	脚部ロクロナデ、杯内面ナデ	南	良	灰 7.5H5/1	圓錐のみ 現存	杯部に黒斑
452	雁田15-06	須恵器	蓋	18-2次	SK925	径高 10.1	縁部内外面ロクロナデ、肩部外面タテナデ	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	—	内外面に自 然焼付着
453	雁田15-05	灰釉陶器	楕	18-2次	SK925	口径 16.8 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	青黄 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	—	—
454	雁田13-03	灰釉陶器	楕	18-2次	SK926	口径 16.6 底高 5.2	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、貼付高台	密	良	青黄 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	全体の 約50%	—
455	雁田13-01	灰釉陶器	楕	18-2次	SK926	口径 17.0 底高 5.3	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底面下平ロクロナデ、貼付高台、見え込みにスミトーン無	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	—	—
456	雁田15-04	灰釉陶器	楕	18-2次	SK926	口径 17.8 底高 5.2	体部ロクロナデ、貼付高台、高台内 ナデ	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	全体の 約50%	—
457	雁田14-03	灰釉陶器	楕	18-2次	SK926	口径 9.6 底高 1.9	体部ロクロナデ、貼付高台	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	高台側の 約1/2	見込み部に 重ね焼き痕
458	雁田14-02	灰釉陶器	楕	18-2次	SK926	口径 9.3 底高 1.9	体部ロクロナデ、貼付高台、高台内 ナデ	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	高台側の 約1/2	—
459	雁田14-01	灰釉陶器	楕	18-2次	SK926	口径 16.9 底高 4.4	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	全体の 約10%	—
460	雁田15-06	灰釉陶器	直	18-2次	SK926	口径 18.4	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	青白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	—	—
461	雁田15-09	灰釉陶器	蓋	18-2次	SK926	銘文 16.8 底高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	青白 2.5H7/1 青白 2.5H7/1	—	焼成跡のゆ がみ
462	雁田21-03	土製品	土罐	18-2次	SK926	口径 10.2 底高 10.4g	外縁ナデ	密	良	灰白 2.5H7/3 灰白 2.5H7/3	完形	—
463	雁田21-02	土製品	土罐	18-2次	SK926	全長 4.6 底高 5.92g	外縁ナデ	密	良	灰白 2.5H6/6	全体の 約70%	—
464	雁田21-04	土製品	土罐	18-2次	SK926	全長 4.9 底高 3.3g	外縁ナデ	密	良	灰白 10YR6/2	全体の 約60%	—
475	雁田20-03	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 13.6 底高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰 7.5H7/6	全体の 約40%	内部に油煙 付着
466	雁田20-01	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 14.6 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰 7.5H6/6	全体の 約40%	—
467	雁田18-04	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 13.6 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰 7.5H7/6	口柄の 約1/2	—
468	雁田20-05	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 13.6 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	浅黄褐 7.5YR6/6	全体の 約70%	—
469	雁田24-06	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 13.4 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/4 ~2mmの小石含む	全体の 約40%	—
470	雁田18-01	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 15.2 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	浅黄褐 7.5YR6/6	全体の 約90%	—
471	雁田20-04	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 16.2 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H6/6	全体の 約40%	—
472	雁田18-02	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 16.4 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/6	口柄の 約1/2	—
473	雁田18-03	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 16.2 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/6	口柄の 約1/4	—
474	雁田20-06	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 10.9 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄褐 10YR8/3	口柄の 約1/10	—
475	雁田18-05	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 13.4 底高 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/4	口柄の 約1/6	—
476	雁田20-02	土師器	杯A	18-2次	SK928	口径 14.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰 7.5H7/6	全体の外面に 黒斑	—
477	雁田18-13	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 15.0 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 2.5H6/8	口柄の 約1/4	—
478	雁田18-06	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 10.9 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰 7.5H7/6	全体の 約30%	—
479	雁田18-07	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 15.8 底高 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/6	口柄の 約1/4	—
480	雁田21-05	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 14.6 底高 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明黄褐 10YR7/6	口柄の 約1/8	—
481	雁田18-12	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 15.4 底高 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/6	口柄の 約1/4	—
482	雁田18-09	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 15.2 底高 1.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/6	全体の 約30%	—
483	雁田18-10	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 14.2 底高 1.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H6/6	全体の 約30%	—
484	雁田18-08	土師器	直A	18-2次	SK928	口径 15.2 底高 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 7.5H7/4	全体の 約40%	—
485	雁田22-06	土師器	杯B	18-2次	SK928	口径 8.2 底高 1.9	内面ナデ、貼付高台	密	良	灰 7.5H6/6	台柄の 約1/6	—
486	雁田24-01	土師器	杯B	18-2次	SK928	口径 7.6 底高 1.3	貼付高台	密	良	灰 7.5H7/6	台柄の 約1/6	—
487	雁田22-04	土師器	杯B	18-2次	SK928	口径 13.0 底高 2.3	体部外面部・内面ナデ、貼付高台	密	良	灰 2.5H6/6	台柄の 約1/12	—
488	雁田21-06	土師器	蓋A	18-2次	SK928	口径 14.4 底高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部外面部タテハケ・ 内面ヨコハケ	密	良	灰 2.5H6/6	口柄の 約1/12	—
489	雁田21-07	土師器	蓋A	18-2次	SK928	口径 27.9 底高 5.0	口縁部ヨコナデ、体部外面部ハケ・ 内面ヨコハケ	密	良	灰 7.5H7/4	口柄の 約1/12	—
490	雁田22-01	土師器	蓋C	18-2次	SK928	口径 24.8 底高 5.3	口縁部ヨコナデ、底面を内面に折り返す・ 内面外面部・オサエ・内面板ナデ	密	良	10YR7/4	口柄の 約1/12	—
491	雁田22-02	土師器	瓶	18-2次	SK928	口径 16.6 底高 5.3	口縁部ヨコナデ、底面を内面に折り 返す・内面外面部・オサエ・内面板ナデ	密	良	10YR8/3	口柄の 約1/12	—
492	雁田24-07	製塗土器	山形式 製塗土器	18-2次	SK928	口径 15.6 底高 5.3	口縁部外面部ナデ・オサエ・内面板ナデ	やや粗 ~3mmの小石含む	良	灰 7.5H7/6	口柄の 約1/4	—
493	雁田24-04	須恵器	蓋	18-2次	SK928	口径 15.6 底高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	灰白 2.5H7/1	口柄の 約1/4	—
494	雁田24-05	須恵器	台付直	18-2次	SK928	口径 15.6 底高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	灰白 2.5H6/2	口柄の 約1/12以下	—
495	雁田24-06	灰釉陶器	楕	18-2次	SK928	口径 6.9 底高 2.3	体部ロクロナデ・貼付高台・体部外 面無切欠	密	良	灰白 2.5H7/2 青白 2.5H7/2	高台側の 約1/6	—

第12表 出土遺物觀察表（12）

番号	登録番号	種類	形態	調査回数	遺構・層位	位置(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	堆積度	備考
496	雁田24-04	灰釉陶器	椀	18-2次	SK928	口径 16.3 底径 10.0 高さ 4.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ	密	良	赤地、灰黄 8.5H/7 底地、灰白 1.1/2	口径の 1/2	
497	雁田13-02	灰釉陶器	椀	18-2次	SK929	口径 17.2 底径 11.3 高さ 5.3	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ、輪 郭部内にズレ、輪郭部毛塗り	密	良	赤地、二重輪郭部 底地、青白 9H/9	全体の 約40%	見出しが 三又トランク
498	雁田14-02	土師器	甕C	10次	SK1187	口径 23.8 底径 4.5	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、 内面ヨコナデ	密	良	浅黄緑 10H/6/3	口径の 1/6	
499	雁田28-04	土師器	杯A	18-1次	SD913	口径 13.9 底径 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、オサエ 内面ヨコナデ	~1.5cmの小むき	良	櫻 7.5H/7/6	口径の 1/6	底部に粘土 接着痕残る
500	雁田28-06	土師器	甕A	18-1次	SD913	口径 17.4 底径 12.9	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、 内面ヨコナデ	~1.5cmの小むき	良	櫻 5H/6/6	口径の 1/10	
501	雁田28-03	口クロ	杯	18-1次	SD913	口径 7.2 底径 4.3 高さ 1.2	口縁部ヨコナデ、底部外面毛塗切 瓶	密	良	にぶい黄緑 10H/6/3	口径の 1/4	
502	雁田28-05	須恵器	蓋	18-1次	SD913	口径 2.0	体部外面ヨクロタケヅリ、内面ヨクロ ナデ、貼付みわ	密	良	灰白 2.5H/1	全体の 約40%	
503	雁田28-02	無釉陶器	瓶か	18-1次	SD913	口径 6.1 底径 1.1 高さ 1.1	口縁部ヨクロナデ、貼付台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	灰白 2.5H/1	高台部の 1/6	
504	雁田29-01	無釉陶器	台付鉢	18-1次	SD913	口径 7.4 底径 9.8	口縁部ヨコナデ、内面半平青状 のタタキ目	~1.5cmの小むき	良	灰白 5H/7/1	底部絞 の1/6	
505	雁田05-05	土師器	高杯	23次	SD1140	口径 3.1 底径 9.8	口縁部外 部ヘラケヅリに上を走るの面 紋、脚部中央に0.4cmの孔	~1.5cmの小むき	良	浅黄緑 10H/8/3	輪郭のみ 残存	京都系
506	雁田05-03	須恵器	杯B	23次	SD1140	口径 3.6 底径 9.4	口縁部ヨクロナデ、點付画面	密	良	灰黄 2.5H/1	高台部の 1/4	
507	雁田05-04	須恵器	甕C	23次	SD1140	口径 20.1 底径 4.9	口縁部ヨコナデ、体部表面平行タタ キ目、内・外面青状波紋のタタキ目	密	良	灰白 7.5H/7/1	口径の 1/2	
508	雁田05-01	無釉陶器	杯	23次	SD1140	口径 5.4 底径 3.0	口縁部ヨクロナデ、底部外面毛塗切 瓶	密	良	灰黄 2.5H/8/8	底部のみ 残存	内部に重ね 焼き
509	雁田05-02	無釉陶器	瓶	23次	SD1140	口径 5.7 底径 3.0	口縁部ヨクロナデ、底部外面毛塗切 瓶	密	良	灰白 2.5H/1	底部の 7/12	内部に自然 な釉付層
510	雁田05-06	土師器	高杯	23次	SD1167	口径 3.6 底径 7.7	外面ナデ、脚部中央に0.5cmの孔	密	良	浅黄緑 10H/8/3	輪郭のみ 残存	
511	雁田06-04	土師器	杯B 2	23次	SK1152	口径 8.4 底径 2.3	口縁部ヨコナデ、脚付高 台	密	良	灰黄 10H/8/6	口径の 1/3	
512	雁田06-02	無釉陶器	椀	23次	SK1152	口径 7.9 底径 9.9	口縁部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	灰黄 2.5H/2	高台部の 1/4	
513	雁田06-03	無釉陶器	椀	23次	SK1152	口径 13.2 底径 4.1	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ	密	良	灰黄 2.5H/6	口径の 1/8	
514	雁田06-01	土師器	甕A	23次	SK1152	口径 28.0 底径 9.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、オ サエ、内・外面ナデ	密	良	浅黄緑 7.5H/8/6	口径の 1/6	
515	雁田10-09	土師器	杯D	10次	SK1186	口径 13.5 底径 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、脚付高 台	密	良	浅黄緑 10H/8/4	全体の 約20%	全体の 部体に粘土 接着痕残る
516	雁田10-00	土師器	杯D 2	10次	SK1186	口径 13.8 底径 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、脚付高 台	密	良	灰 10H/8/4	全体の 約20%	
517	雁田09-07	土師器	皿D	10次	SK1186	口径 9.7 底径 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	にぶい黄緑 10H/8/4	全体の 約20%	
518	雁田10-06	土師器	皿D	10次	SK1186	口径 11.9 底径 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	白 7.5H/7/4	口径の 1/4	
519	雁田08-04	土師器	皿D	10次	SK1186	口径 10.2 底径 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰白 2.5H/8/2	全体の 約80%	
520	雁田09-11	土師器	皿D	10次	SK1186	口径 9.8 底径 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰黄 2.5H/2	全体の 約80%	
521	雁田09-08	土師器	皿D	10次	SK1186	口径 11.6 底径 1.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄緑 10H/8/3	全体の 約50%	
522	雁田10-05	土師器	皿D	10次	SK1186	口径 9.2 底径 0.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、オサエ	密	良	浅黄緑 10H/8/4	全体の 約40%	
523	雁田10-08	口クロ	小皿	10次	SK1186	口径 29.0 底径 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ、 底部外面毛塗切瓶	密	良	浅黄緑 10H/8/3	約50%	
524	雁田10-03	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 4.9 底径 2.0	体部ナデ、貼付高台	密	良	浅黄緑 10H/8/3	高台部 のみ残存	
525	雁田09-09	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 9.8 底径 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、貼付高 台	密	良	浅黄緑 10H/8/3	全体の 約40%	
526	雁田08-05	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 9.6 底径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、貼付高 台	密	良	灰 2.5H/8/3	ほぼ完形	
527	雁田10-07	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 10.0 底径 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、貼付高 台	密	良	灰白 10H/8/2	全体の 約40%	
528	雁田09-06	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 9.6 底径 2.6	口縁部ヨコナデ。体部ナデ、貼付高 台	密	良	にぶい黄緑 10H/8/2	全体の 約80%	
529	雁田10-04	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 7.6 底径 3.7	体部ナデ、貼付高台	密	良	にぶい黄緑 10H/7/4	高台部の 7/12	
530	雁田09-11	土師器	杯B 2	10次	SK1196	口径 6.9 底径 4.0	体部ナデ、貼付高台	密	良	にぶい灰 5H/4	高台部の 11/12	
531	雁田10-02	土師器	台付碗	10次	SK1196	口径 6.9 底径 2.4	体部ナデ、貼付高台	密	良	浅黄緑 10H/8/3	高台部の 1/2	
532	雁田10-11	土師器	甕A	10次	SK1196	口径 16.0 底径 3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内 面ヨコナデ	密	良	浅黄緑 10H/8/3	口径の 1/6	
533	雁田08-06	灰釉陶器	椀	10次	SK1196	口径 13.6 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ	密	良	着色灰黄 5.5H/7/2	口径の 約50%	
534	雁田10-01	灰釉陶器	椀	10次	SK1196	口径 12.9 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨクロナデ。	密	良	赤地、灰黄 2.5H/7/2	口径は残ら ない	火候は残ら ない
535	雁田09-02	灰釉陶器	椀	10次	SK1196	口径 7.2 底径 3.2	体部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	赤地、灰白 10H/7/2	底部のみ 残存	
536	雁田09-10	無釉陶器	山茶碗	10次	SK1196	口径 6.9 底径 1.9	体部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	白 5H/1	内に火候が コバリにかかる	
537	雁田09-04	無釉陶器	山茶碗	10次	SK1196	口径 7.4 底径 1.9	体部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	灰白 7.5H/7/1	高台部の のみ残存	
538	雁田09-05	無釉陶器	山茶碗	10次	SK1196	口径 6.2 底径 2.6	体部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	灰白 2.5H/8/2	高台部の のみ残存	
539	雁田09-09	無釉陶器	山茶碗	10次	SK1196	口径 6.8 底径 2.5	体部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	灰白 2.5H/6/2	高台部の のみ残存	
540	雁田09-01	無釉陶器	台付碗	10次	SK1196	口径 11.6 底径 8.2	体部ヨクロナデ、貼付高台、底部外 部毛塗切瓶	密	良	灰白 5H/1	高台部の 2/5	

第13表 出土遺物觀察表 (13)

番号	登録番号	種類	形態	調査次数	構成・部位	直徑(cm)	調節・技法の特徴	地土	構成	色調	堆積度	備考
541	雁田10-12	白磁	輪花瓶	10次	SK11186	口径 13.2 底径 5.6	体部クロナデ、内面に板の凸縁で 輪花表現。全面施釉	緻密	堅致	浅灰 1-4灰 10灰8/1 輪:灰 9灰 1	口径の 1/12	
542	雁田08-07	土製品	土鍋	10次	SK11186	直径 31.0	全表面ナデ	密	良	褐 SYR6/6	完形	
543	雁田06-03	無釉陶器	台付鉢	10次	SK11195	口径 33.8 底径 13.0	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ、体外側底部下 部ヨコナデ、足付高台、底部外側ナデ	密	良	灰白 2.5灰7/1	高台径の 1/3	
544	雁田07-07	無釉陶器	小壺(山里)	10次	SK11195	口径 5.2 底径 1.6	体部クロナデ、點付高台、底部外 側面切削	密	良	灰黄 2.5灰7/2	高台底 のみ残存	
545	雁田16-06	土師器	杯D	10次	SK11207	口径 13.8 底径 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 1-5灰 10灰7/3	口径の 1/6	
546	雁田16-07	土師器	杯D	10次	SK11207	口径 14.4 底径 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 1-5灰 4 輪:灰 4	口径の 1/6	
547	雁田16-08	土師器	杯D	10次	SK11207	口径 15.4 底径 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 1-5灰 4 輪:灰 4	口径の 1/4	
548	雁田16-09	土師器	杯D	10次	SK11207	口径 14.9 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰黄 10灰8/4	全体の 約90%	
549	雁田16-04	土師器	杯D	10次	SK11207	口径 15.6 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 1-5灰 10灰7/2	全体の 約40%	
550	雁田16-09	土師器	皿D	10次	SK11207	口径 8.4 底径 1.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰 1-5灰 10灰7/3	全体の 約40%	
551	雁田16-08	土師器	皿D	10次	SK11207	口径 8.6 底径 1.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰黄 10灰8/3	全体の 約40%	
552	雁田16-05	土師器	甕A	10次	SK11207	口径 21.2 底径 7.6	口縁部ヨコナデ、内面に凹込、体 外側底部ナデ・オサエ、底部内側ヨコカーブ	密	良	灰黄 10灰8/4	口径の 1/10	口縫外側に スクリーパー
553	雁田16-10	土師器	高杯	10次	SK11207	口径 7.5 底径 3.5	底面外側ナデ・オサエ、φ 5mmの 脚跡	密	良	灰黄 10灰8/4	脚部の み残存	
554	雁田16-01	無釉陶器	壺(山里附)	10次	SK11207	口径 16.4 底径 6.0	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ、 足付高台、底部外側面切削	密	良	灰 2.5灰7/2	ほぼ完形 黒褐色外側に 手付着	
555	雁田15-03	土師器	皿D	178-2次	SK10877	口径 13.8 底径 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰黄 10灰8/3	口径の 1/6	
556	雁田05-04	土師器	高杯	178-2次	SK10877	口径 11.7 底径 4.1	脚部ヨコナデ、脚部中央に φ 6mmの孔	密	良	灰黄 2.5灰7/2	脚部の み残存	
557	雁田18-03	土師器	高杯	178-2次	SK10877	口径 9.6 底径 3.5	外側ナデ、脚部中央に φ 5mmの孔	密	良	灰黄 7.5SYR6/4	脚部の み残存	
558	雁田15-07	口クロナ 土師器	小型杯	178-2次	SK10877	口径 4.4 底径 2.0	体部クロナデ、底部外側面切削	密	良	概 7.5SYR7/6	高台部 のみ残存	
559	雁田15-04	無釉陶器	台付 小皿	178-2次	SK10877	口径 11.1 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ、 點付高台、底部外側面切削	密	良	灰黄 2.5灰7/2	ほぼ完形 重ね焼き痕	見込み部に
560	雁田15-02	無釉陶器	器蓋	178-2次	SK10877	口径 22.4 底径 4.1	脚部クロナデ、脚部脇に沈織	密	良	灰 1-5灰 10灰7/4	高台脇の 1/12	
561	雁田18-02	無釉陶器	小壺(山里)	178-2次	SK10877	口径 9.4 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ、 點付高台、底部外側面切削	密	良	灰黄 2.5灰7/3	全体の 約90%	
562	雁田15-06	無釉陶器	壺(山里附)	178-2次	SK10877	口径 7.8 底径 3.4	脚部ヨコナデ、點付高台、底部外 側面切削	密	良	灰白 5灰7/1	高台脇の 1/10	
563	雁田18-01	無釉陶器	壺(山里)	178-2次	SK10877	口径 8.4 底径 2.8	脚部ヨコナデ、脚部中央に φ 5mmの孔	密	良	灰 1-5灰 10灰7/3	高台脇の 1/4	
564	雁田15-01	無釉陶器	壺(山里附)	178-2次	SK10877	口径 9.3 底径 3.7	体部クロナデ、點付高台、底部外 側面切削	密	良	灰白 2.5灰8/2	底部の み残存 白色物付着	
565	雁田16-07	白磁	瓶	178-2次	SK10877	口径 2.5 底径 2.5	体部クロナデ、全面に厚く施釉	緻密	堅致	濃灰:灰白 10灰8/2 輪:輪 8灰 8/2	—	白磁自駆
566	雁田15-05	白磁	瓶	178-2次	SK10877	口径 6.5 底径 2.8	肩出し高台、高台内隠鉢、見込み 部:輪 10灰7/4	緻密	堅致	濃灰:灰白 9灰 8/2	高台脇の み残存	
567	001-01	氣泡器	杯A 蓋上土器	168次	SK10248	口径 18.0 底径 5.7	口縁部ヨコナデ、點付高台、底部外 側面切削ヨコケズリ	密	良	灰白 8/1	全体の 約90%	
568	002-01	土師器	包含器 蓋上土器	168次	SK10248	口径 17.0 底径 4.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	精良	良	概 SYR6/6	口縫の 約90% 黒褐色(裏)	
569	010-04	土師器	皿A 蓋上土器	168次	SK10248	口径 16.4 底径 2.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰 1-5灰 10灰7/3	口縫の 1/6 内面に不規 則黒斑	
570	015-01	匂泡器	皿A 蓋上土器	176次	r-24-p6	口径 6.7	体部クロナデ、底部外側面切削	密	良	褐灰 7.5SYR5/1	—	足底部に黒斑 と白粉、周縁部 に白粉
571	014-03	土師器	瓶A 蓋上土器	176次	SK10480	口径 15.8 底径 6.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	概 SYR6/6	口縫の 1/2 足底部に黒斑 と白粉	
572	012-05	無釉陶器	皿	173次	SK10329	口径 6.7 底径 2.0	体部クロナデ、點付高台、底部外 側面切削	密	良	濃灰:灰白 2.5灰7/1 輪:灰白 9灰 8/2	高台脇の み残存	
573	013-01	灰陶陶器	瓶	173次	SK10326	口径 6.7 底径 1.8	体部クロナデ、點付高台、底部外 側面切削	密	良	濃灰:灰白 2.5灰7/1 輪:灰白 9灰 8/2	高台脇の み残存	
574	012-04	灰陶陶器	瓶	173次	SK10325	口径 6.7 底径 2.0	体部クロナデ、點付高台、底部外 側面切削	密	良	濃灰:灰白 2.5灰7/1 輪:灰白 9灰 8/2	高台脇の み残存	
575	02-01	無釉陶器	蓋上 蓋上土器	166次	土器	口径 7.6 底径 2.6	体部クロナデ、點付高台、底部外 側面切削、高台端部に砂付台	密	良	灰白 2.5灰7/1	高台脇 のみ残存	
576	010-01	土師器	皿A 蓋上土器	168次	SK10248	口径 16.8 底径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	やや粗	概 SYR6/8	ほぼ完形 割削:水・か く	
577	019-02	土師器	高杯 蓋上土器	186次	SK10866	口径 13.4 底径 6.9	内面外側面ハナ・内面ナデ、杯底ヘラ 内面ナデ	密	良	概 SYR6/6	脚部径の 1/2 内面に不規 則黒斑	
578	019-01	土師器	皿A 蓋上土器	186次	SK10862	口径 20.8 底径 7.0	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、体部外 側面切削ヨコケズリ	密	良	概 2.5SYR6/8	全表面の 黒褐色(裏) 内面に白粉	
579	020-01	土師器	皿A 蓋上土器	186次	SK10866	口径 22.1 底径 8.6	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、体部外 側面切削ヨコケズリ	密	良	概 SYR7/6	口縫の 1/7 足底部に黒斑 と白粉	
580	021-01	土師器	皿A 蓋上土器	186次	SK10867	口径 21.3 底径 8.2	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、体部外 側面切削ヨコケズリ	密	良	概 2.5SYR6/6	全表面の 約90%の削 削	
581	011-02	土師器	皿A 蓋上土器	177次	SK10502	口径 15.9 底径 6.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	概 2.5SYR6/8	全体の 約80%	
582	002-02	絆輪陶器	蓋	166次		口径 46.6	内面外側面ヨコナデ、外側に陰刻花文	密	良	—	原産地 未記載	
583	012-01	絆輪陶器	梅	173次	SK10315	口径 7.3 底径 1.8	体部内外側面ヨコナデ、點付高台、底 部外側面切削、内面陰刻花文	密	良	濃灰:灰白 10灰8/2 輪:輪 8灰 8/2	脚部の み残存	
584	015-02	絆輪陶器	花子付 瓶	173次		口径 7.6 底径 2.5	体部内外側面ヨコナデ、内面部一 部ヨコケズリ	密	良	濃灰:灰白 9灰 8/2 輪:輪 8灰 8/2	脚部の み残存	
585	015-01	絆輪陶器	小壺	173次		口径 9.2 底径 3.5	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ	密	良	濃灰:灰白 8/2 輪:輪 8灰 8/2	脚部の み残存	



第15表 出土遺物觀察表（15）

番号	登錄番号	種類	器形	調査回数	遺構・層位	直通(cm)	調査・技法の特徴	出土	構成	色調	保存度	備考
631	衛III-22-04	石製品	基石	178-2次	表土	直径 1.5 高さ 0.6	—	—	—	白色	完形	
632	衛III-22-05	ガラス 製品	丸玉	178-2次	表土	直径 1.6 孔径 0.3	—	—	瓶根 995	全体の 約80%		
633	014-01	製陶土器	石原式 製山土器	173次	SK10321	直通 7.2 内外面ナデ・オサエ	～5mmの小石含む	やや 粗	淡黄橙 10YR8/4	—		
634	014-03	製陶土器	石原式 製山土器	173次	SK10325	口径 17.1 直通 5.1	内外面ナデ・オサエ	～1.5mmの小石含む	良	7.5YR6/4	口筋の 1/12	
635	014-04	製陶土器	石原式 製山土器	173次	SK10325	口径 13.7 直通 5.3	内外面ナデ・オサエ	～3.0mmの小石含む	良	7.5YR7/6	口筋の 1/12	
636	014-02	製陶土器	石原式 製山土器	173次	SK10318	直径 6.2 直通 5.0	内外面ナデ・オサエ	～3.0mmの小石含む	良	7.5YR7/6	—	
637	011-01	土製品	土鏡	177次	SK10502	全長 6.2 重さ 141.0g	全面ナデ、4方向に溝	密	良	にぶい黄 SYR7/4	ほぼ完形	
638	衛III-08-01	土製品	土鏡	23次	SK1159	直径 7.6 重さ 51.6g	外鏡面ナデ・オサエ	所 所 所	淡黄橙 7.5YR8/4	全体の 約70%		
639	013-03	土製品	土鏡	173次	SK10318	全長 7.5 重さ 67.27g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	
640	021-04	土製品	土鏡	186次	SD10836	全長 7.0 重さ 50.67g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR6/3	完形	
641	021-04	土製品	土鏡	186次	SD10830	全長 6.5 重さ 41.29g	外鏡面ナデ・オサエ	微細な砂粒含む	良	7.5YR7/6	完形	
642	013-05	土製品	土鏡	173次	SK113	全長 6.1 重さ 1.81g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/4	全体の 約5/12 外鏡面に鉄錆 付着	
643	衛III-03-01	土製品	土鏡	174-8次	p-2 土坑	全長 4.9 重さ 13.95g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 7.5YR8/6	ほぼ完形	
644	衛III-04-10	土製品	土鏡	174-8次	p-5	全長 5.4 重さ 16.24g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/4	ほぼ完形	
645	衛III-02-01	土製品	土鏡	174-8次	p-8 土坑	全長 6.8 重さ 19.66g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	完形	
646	衛III-04-09	土製品	土鏡	174-8次	表土	全長 4.4 重さ 6.72g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	7.5YR6/6	全体の 約70%	
647	衛III-20-05	土製品	土鏡	178-2次	SB10668	全長 17.2g 重さ 1.82g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	
648	021-02	土製品	土鏡	186次	SK10843	全長 5.2 重さ 14.68g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR6/3	ほぼ完形	
649	R_11	土製品	土鏡	23次	SK1161	全長 4.0 重さ 10.77g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	灰白 2.5YR7/2	完形	
650	023-02	土製品	土鏡	186次	表土	全長 4.1 重さ 26.45g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/3	完形	
651	衛III-02-07	土製品	土鏡	23次	SK1161	全長 4.1 重さ 10.79g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	灰白 2.5YR7/2	完形	
652	023-04	土製品	土鏡	186次	匂合箱	全長 2.9 重さ 3.04g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄 2.5YR7/3	全体の 約50%	
653	衛III-08-08	土製品	土鏡	23次	SK1179	全長 3.7 重さ 5.58g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	
654	013-04	土製品	土鏡	173次	SK10329	全長 4.2 重さ 3.84g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	灰黄橙 10YR6/2	ほぼ完形	
655	衛III-04-08	土製品	土鏡	174-8次	n-10	全長 4.6 重さ 5.39g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	7.5YR6/6	全体の 約90%	
656	衛III-03-03	土製品	土鏡	174-8次	p-2 土坑	全長 4.5 重さ 8.01g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/3	全体の 約90%	
657	衛III-15-02	土製品	土鏡	174-8次	p-9 P11	全長 3.1 重さ 4.29g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/3	ほぼ完形	
658	衛III-03-02	土製品	土鏡	174-8次	n-4 濃18	全長 2.99g 重さ 2.99g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	2.5YR7/3	全体の 約50%	
659	衛III-01-06	土製品	土鏡	174-8次	q-4 P11	直通 3.0 重さ 2.77g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/4	全体の 約50%	
660	衛III-01-10	土製品	土鏡	174-8次	p-3 P17	直通 3.6 重さ 1.85g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 10YR7/4	全体の 約70%	
661	衛III-01-11	土製品	土鏡	174-8次	p-3 P17	直通 4.0 重さ 2.01g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 10YR7/3	全体の 約70%	
662	衛III-01-04	土製品	土鏡	178-2次	SK10875	直通 3.2 重さ 3.19g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	灰白 2.5YR7/2	全体の 約70%	
663	衛III-02-02	土製品	土鏡	174-8次	p-8 P11	全長 3.3 重さ 3.39g	外鏡面ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙 10YR8/3	全体の 約90%	

### 第3章 下園東区画の出土遺物の検討

#### 第1節 第23次調査出土の唐鏡について

昭和54年度の第23次調査で出土した銅鏡片は、当時の概報に同調査区の包含層出土のため時期は不明で「雙鸞鏡」と報告されている。また、平成元年度に刊行した『斎宮跡発掘資料選』掲載の写真には「唐鏡双鷦双鸞八花鏡」とクレジットされているが、このような小片からどのように判断されたのかはわからない。本品については、地元住民が表記したとの情報もあり、本書刊行にあたりあらためて検討を試みた。

まず、出土状況については、現物に付されたラベルには、「23次付近」以外に層位等の記入はない。概報であえて包含層出土と記載されていることから、第23次調査区外での出土・採集の可能性は低く、発掘調査時の堆土からの採取である可能性が最も高いと考えられる。この場合でも第23次調査で出土したものと考えて間違いないだろう。

次に鏡式の検討だが、あらためて背面の文様を見ると、残存長約5cmの破片で、外縁の隆帯のすぐ内側に文様の鳥の尾羽とみられる浮線が巻き上がるよう上方へ続いており、この部分は孔雀の可能性が全くないとはいえないが、鳳凰（鸞）と考えていいだろう。また、尾羽の左下にややカールする細線があり、正倉院北倉の「鳥花背八角鏡」のような飛雲文か、瑞花文・唐草文の一部とみられる。また鏡背面の文様が外区と内区に分かれない。外縁の断面形は台形であり、のことから形式的に平安時代9世紀以降に流行する仿製唐式鏡「瑞花双鳥文八花（棊）鏡」ではないことがわかる<sup>(1)</sup>。現在のところ国内で出土あるいは伝世した唐鏡の中には、同型とみられるものはない。外縁が八花をなすと考えられ、推定径は20cmを超える比較的大型の鏡とみられる。

外・内区を分けない双鳥文となる資料には、先の正倉院「鳥花背八角鏡」、興福寺中金堂の鎮壇具として出土した「瑞花双鳳八花鏡」、五島美術館蔵の「双鸞瑞花八花鏡」、千葉県谷津経塚出土の「唐花双鸞八花鏡」などがあり、これらは舶載唐鏡とみられている<sup>(2)</sup>。

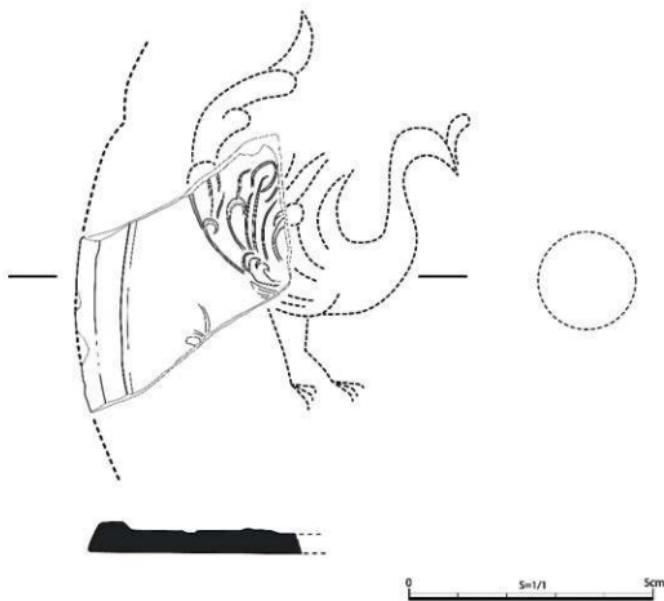
龍谷大学の杉山洋氏によるハンディタイプの蛍光X線分析では、銅70%前後、スズ30~40%、鉛2%弱で、仿製鏡に含まれるヒ素等が含まれなかつたため、唐製鏡で間違ないと判断された。成瀬正和氏によれば、正倉院鏡の蛍光X線分析から銅約70%・スズ約25%・鉛約5%の「白銅」製品は唐からの舶載で、この成分比率は中国鏡ではほぼ不变であるとされ、銅約80%・スズ約20%・ヒ素約1~3%の青銅鏡は国内の官営工房で製作されたものとしている<sup>(3)</sup>。

長久智子氏の研究によると、唐での鏡式は八棱鏡の最も古い例は神龍二（706）年の墓誌を持つ河南省宋眞墓で、紀年唐墓出土の唐式鏡をみると8世紀第1四半期に八棱鏡のピークがあり、第2四半期には花形鏡が主流となり、第3四半期には円形・方形が主流となっていくという<sup>(4)</sup>。

第23次調査出土の唐鏡の出土状況についても考えてみたい。日本でみられる唐鏡は、寺社での伝世品の他、経塚や墳墓の副葬品、地鎮・鎮壇や祭祀のための意図的な埋納などの例がある。神島や沖ノ島などの祭祀遺跡の他、吹田市五反田遺跡のような川の渡し場での祭祀に伴うものがある<sup>(5)</sup>。

斎宮での鏡の使用の実態はどうだろうか。『延喜式』に現れる鏡をみると、『延喜斎宮式』には鏡は全く現れない。その一方で、『延喜大神宮式』では、山口祭、心の御柱を採る祭、神田の姐歎の柄を採るための山口祭・木本祭に各40枚と記される。また、神宮所持の宮地の鎮祭（40枚）、度会宮所持の宮地の鎮祭（10枚）と記される。もちろん、これらの祭祀に用いる鏡は儀鏡の可能性はあるが、このことから斎宮の通常の祭祀や祭の業務には鏡は使われることではなく、斎王周辺や斎宮寮の高位の官人らの所有物であったか、臨時の祭祀などで埋納された状況が考えられる。しかし前者の場合、下園東区画で出土した理由が説明できない。

このような検討から、斎宮第23次調査の鏡は、斎宮寮庫に納められ伝世したもののが破損したというより、方格街区や建物の造営にあたり、地鎮等の祭祀として埋納されたものではないだろうか。第23次調査区のSK1156は直径約0.9mの円形土坑で、出土状況は不分明だが、土師器杯A・盤、須恵器無台杯のほぼ完形品が出土しており、地鎮等のための埋納遺構であったと推定される。本来はこうした遺構に伴う遺物であった可能性が考えられる。



背面



鏡面

第18図 第23次調査出土唐鏡実測図・写真（実測図は原寸大）

#### 【註】

- (1) 杉山洋『日本の美術No.393古代の鏡』至文堂 1999
- (2)『唐鏡』泉屋博古館 2007
- (3) 成瀬正和「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『日本の美術No.393 古代の鏡』1999
- (4) 長久智子「9世紀における瑞花双鳥文八稜鏡の初源形式』『愛知県陶磁美術館研究紀要15』2010
- (5) 前掲(1)

## 第2節 西加座北区画との比較について

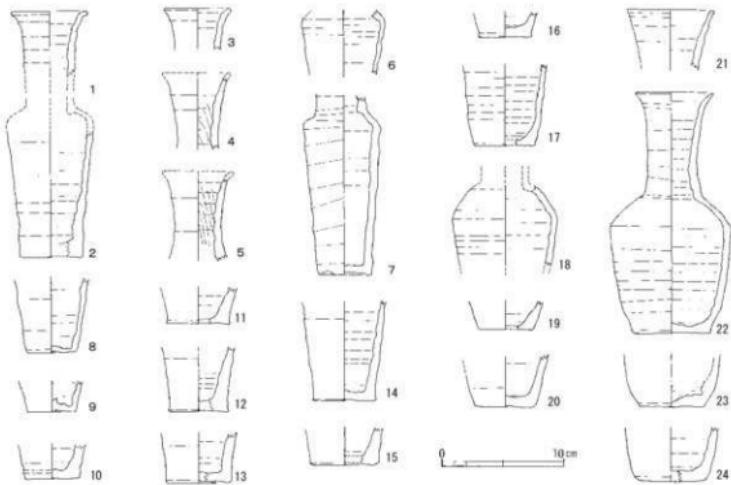
下園東区画は、從来から5間×2間の東西棟が並列し、東接する西加座北区画と同様、「寮庫」の性格を持つ段階があり、当初は西加座北区画の倉庫群が先行し、天長元(824)年に度会郡に移転した斎宮が承和六(839)年に多気郡の旧地に戻された以降にあらためて「寮庫」として整備され、西加座北区画とは時間的にずれていると考えられていた。しかし今回の『報告書III』の検討過程で、下園東区画は9世紀前葉の度会郡への斎宮移転前(『遺構編』の「下園東B期」)に、5間×2間の東西棟をシンメトリーに配置し、西加座北区画と「寮庫」としての機能を併存させていた時期があったことが明らかとなった。最大規模の時期には西加座北区画で16棟、下園東区画でも区画南部に建物が確認されていない地形的に湿潤な不適地があり、12棟程度が想定されるこの二区画について、出土遺物からいくつかの比較を行った。

### (1) 須恵器壺G

須恵器壺Gは、奈良時代後期(平城宮V期)から長岡京期を経て初期の平安京期までに多く出土する、頭部から胴部を纏身に作る平底の長頸壺である。静岡県の三島市花板島橋窯跡(伊豆)と藤枝市助宗窯跡(駿河)に生産地が特定されている。埼玉県比企郡鳩山町鳩山窯跡群(武藏)でも生産された可能性があるという。長岡京期を中心に短期間に全国的に流通・拡散したことが知られている。

斎宮跡でも早くから存在が知られていたが、全体的な分析はされてこなかった。あらためて史跡内の出土分布をみると(第20図)、ほとんどが奈良時代末~平安時代初期に造営が進められた方格街区の中にあり、下園東区画でも今回3点を報告しているが、東接する西加座北区画で12点と最も出土が多い。出土したものの中、図示できるものを集成したのが第19図である。山中章氏は形態と大きさから大型・中大型・細型に分類されている<sup>(1)</sup>が、斎宮跡では直線的な体部を持つ細型(1~17)と、中大型とみられる胴部に丸みがあるもの(18~24)があり、その中でも細型がやや多い。西加座北区画は光仁朝に造営された「内院」である鐵治山西区画や、「神殿」とも推定される西加座南区画の北側にあり、造営開始最初の方格街区の中心軸にある。区画として遺構・遺物の総括的な整理がまだ行われておらず、建物の時期決定も十分とは言えないが、第90次・130次調査でI-3期新相~II-1期古相の土器を伴う建物も見つかっており、方格街区の中でも早い段階から整備に着手されたと考えられる。下園東区画の3点は区画東辺寄りの第18-2次・第174-8次調査区から出土している。斎宮II-1期に相当する下園東A期から建物がみられるものの、下園東区画の壺Gの破片は、位置的に西加座北区画からの混入も考えられる。

須恵器壺Gの用途については、都城への調庸貢納物としての堅魚煮汁の運搬容器に使われたとする説<sup>(2)</sup>、軍事的行為などの人の移動に伴って使用された水筒説の他<sup>(3)</sup>、花瓶に類似した形態や東日本では集落内仏殿と考えられる建物周辺から出土することから、仏器とみる考え方もある<sup>(4)(5)</sup>。『延喜斎宮式』の諸国調庸雜物条には、伊豆国より堅魚・堅魚煎、駿河国より煮堅魚が納めることが記されている。しかし、漸川裕市郎氏の研究では、煮汁を濃縮した調味料である堅魚煎はゼリー状で、その運搬には木製の容器が考えられ、細口の須恵器壺Gは不向きとされている<sup>(6)</sup>。また、仏器という見方については、あらためて一定量の壺Gが出土することが確認できた斎宮では、長岡京期から平安時代初期にかけては、延暦二十三(804)年に纏められた『皇太神宮儀式帳』・『止由氣宮儀式帳』、散逸した『弘仁式』『貞觀式』を踏襲したとみられる『延喜斎宮式』にみられる仏教を禁忌する「忌詞」の存在からも窺わ



第19図 斎宮跡出土須恵器壺G実測図

25-6次(3)・29次(19)・34次(8)・37-13次(9)・40次(17・20)・44次(16)・51次(1・2・18)・52次(6)・54次(10)・55次(11)・60次(15)・62次(4・5・12・21)・63次(14・23)・66次(22)・83次(24)・136次(13)・143次(7)



第20図 斎宮跡出土須恵器壺G分布図

れるように、最も考えられない用途といえる。斎宮の方格街区の造営開始期に多数みられること、物資の集散を伴う「寮庫」となる区画に多いことから、少なくとも斎宮跡にあっては人や物資の移動に伴う遺物と見るべきである<sup>(7)</sup>。下園東区画からの出土が少ないのは、寮庫としての機能整備が、西加座北区画がすでにII-1期古相段階(おおむね長岡京期)まで遡り得るのに対し、下園東区画の「寮庫」整備がII-1期新相~2期にあたる下園東B期まで遅れたためと考えられる。

#### 【註】

- (1) 山中章『桓武朝の新流通構造—壺Gの生産と流通—』『古代文化 Vol.49』財團法人古代學協會 1997
- (2) 舟津一郎『都の焼物の特質とその変容』『新版 古代の日本 ⑥近畿Ⅱ』角川書店 1991
- (3) 前掲(1)
- (4) 佐野五十三「須恵器花瓶の成立—仏の手から婆の世界へ—」『静岡県考古学研究 No. 30』静岡県考古学会 1998
- (5) 佐野五十三『壺Gの成立と伝播』『静岡県考古学研究 No. 31』静岡県考古学会 1999
- (6) 濑川裕市郎「堅魚木簡に見られる堅魚などの実態について」『沼津市博物館紀要21』沼津市歴史民俗資料館他 1997
- (7) 山中章『生産と流通』『長岡京遷都 桓武と激動の時代』国立歴史民俗博物館 2007

## (2) 緑釉陶器

高級資材である緑釉陶器については、II-3期~III-1期(9世紀後半~11世紀前葉)のものが大半を占め、その生産地についても形態や製作技法、色調など目視による判断だが、斎宮跡では猿投産・京都産・東濃産・近江産や尾北窯産・二川窯産がみられる<sup>(7)</sup>。下園東区画からの緑釉陶器の出土は、約120片と方格街区として調査率を考えると少ないと見える。産地別では猿投産がやや多く、京都産・近江産がそれに続く。器種では碗・皿が主体で、陰刻花文を施すものは第16図に図示した区画南辺の第166次調査の(582)と、区画東辺の第173次調査の(583)のみ、壺・瓶などは把手付瓶が、第173次調査で(584)が、第174-8次調査で小片(318)が出土したのみである。全体量だけでなく装飾性の高いものや所謂袋物が極めて少ない。

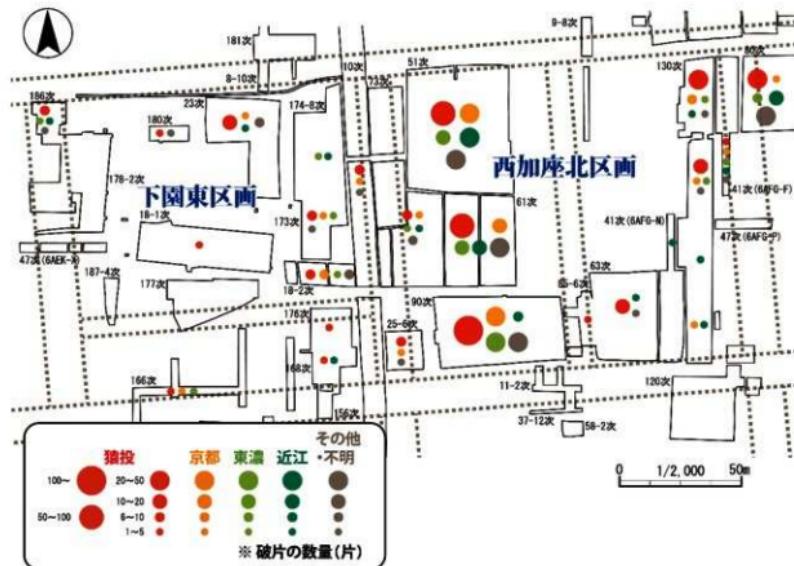
区画内ではやや区画東半に多く分布するように見え、発掘面積100m<sup>2</sup>あたりの破片数をみると、特に第18-2次調査区は調査面積に対して出土量が最も多い。これら緑釉陶器が多くなるII-3期に相当する下園東C~E1期にかけては、第18-2次調査区とその周辺ではC期のS B932、D期のS B10330・S B929、E1期のS B933と区画内では大型の建物が連続して建てられている。また、区画内でも大量の土器類が出土したS K926・928と時期的に重複することも無関係ではないと考えられる。

一方、東接する西加座北区画と比較すると、質・量とも圧倒的に下園東区画を凌駕する。下園東区画の出土量は破片数にして西加座北区画の15%弱にとどまる。また、第22図に示したとおり、器種的にも稜碗や稜皿・段皿・耳皿・合子蓋・香炉や壺・瓶類などの袋物もある。陰刻花文も猿投窯の產品を代表するような陰刻花文梗桙(1)や陰刻花文と透かし彫りのある香炉蓋(42)、猿投産緑釉陶器でも最古段階の黒帯14号窯式期のもの(3・34)もみられる。西加座北区画内での分布の密度を見ると、西半の第51・61・90次調査区と北東隅部の第80・130調査区に多い。

『延喜斎宮式』には「壺器」の記載ないが、西加座北区画の状況は高級資材を一括して管理収納していた状況を彷彿とさせる。緑釉陶器の出土量が増加するII-3期(9世紀後半)以降は、下園東区画には明確に倉庫と判断できる建物がみられなくなるが、西加座北区画では第51・61・63・90次調査、第130次調査の北部ではII-1~2期の倉庫建物に重複あるいは位置をわずかにずらして建物が連続して建てられている。中でも第51次調査のS B3174は、桁行の柱間1.05m・梁間2.05m構造の建物を倉庫とみることができるならば<sup>(8)</sup>、西加座北区画は10世紀まで「寮庫」としての機能を維持していたといえるだろう。

#### 【註】

- (7) 『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館 1998
- (8) 「V 第51次調査」『三重県斎宮跡調査事務所年報1983 史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県斎宮跡調査事務所ほか 1984

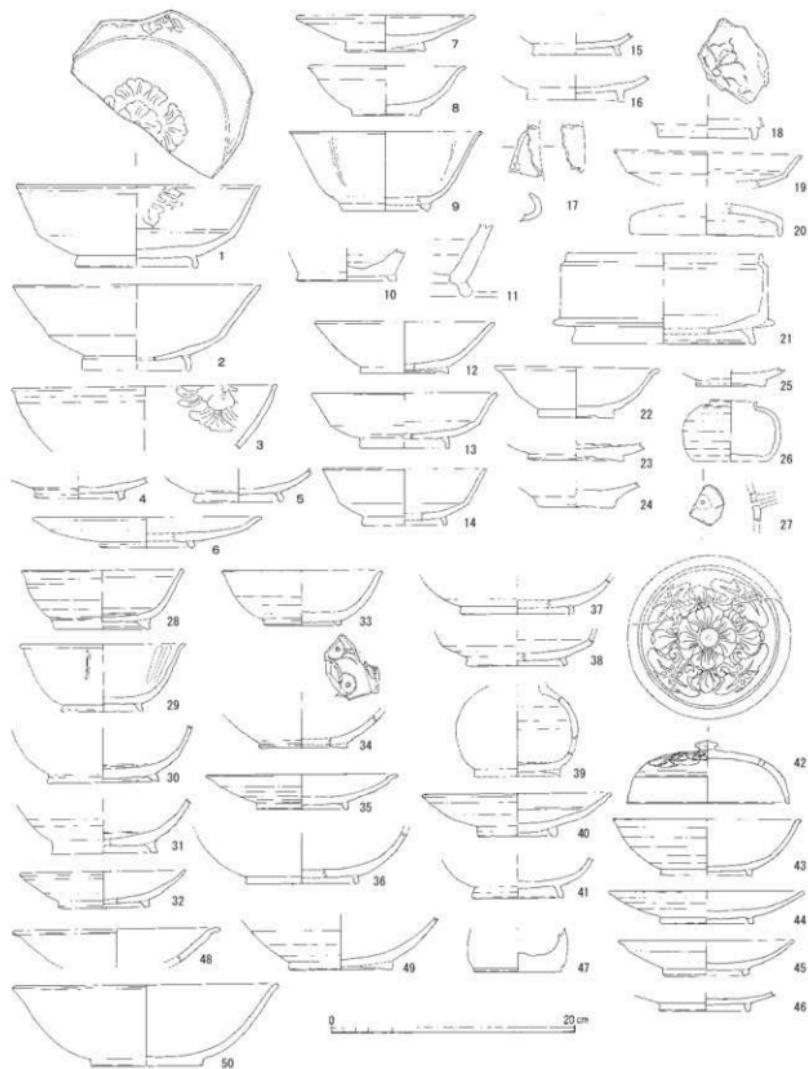


第21図 下園東区画と西加座北区画の綠釉陶器出土分布図

### (3) 志摩式製塩土器

内陸で出土する志摩式製塩土器は、食品・調味料あるいは祭祀の資材としての焼塩を運搬するのに用いたと考えられており、基本的に8世紀半ばから10世紀頃までの遺物である<sup>(19)</sup>。斎宮III-1期の遺構まで出土例が報告されているが、破碎しやすい志摩式製塩土器が、後世の遺構に混入している可能性は想定しておかなければならぬ。本報告で示した下園東区画の志摩式製塩土器は、古い遺物の混入の可能性があるものを除けば、II-1期古～中相のSK 10888(第178-2次)からII-2期のSK 10318・10325(第173次)の頃までが中心となる。

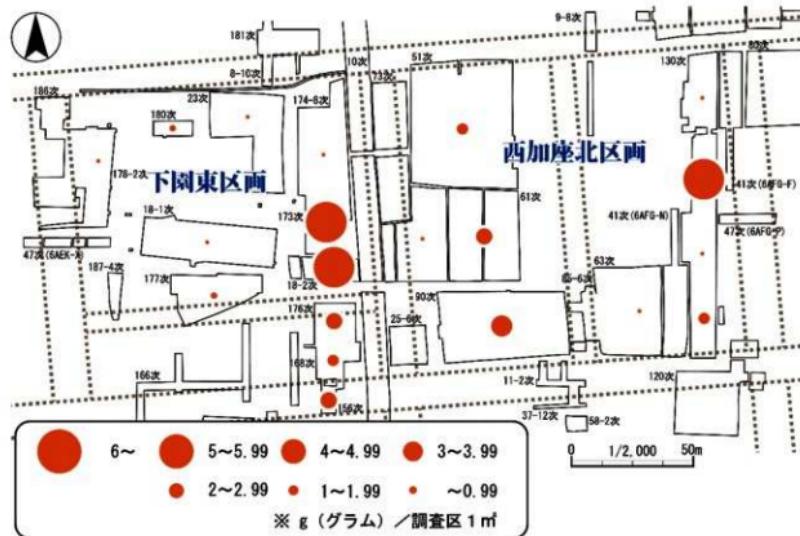
下園東区画内での分布状況を、より客観的に出土量により比較するため、調査区1m<sup>2</sup>あたりのg数を算出した。それによると第18-2次・第173次調査区といった区画東辺中央部の出土量が特に多く、区画の中央から西はほとんどない。一方、西加座北区画では区画南西部(第90次)と北東部南寄り(第130次)に多い。綠釉陶器と異なり、下園東区画と西加座北区画で出土量や分布で大きな違いはない。また、こうした分布の偏りは、製塩土器のまま備蓄した建物あるいは、その塙を使用した場所(建物)が偏在していたことを示すのではないだろうか。塙は『延喜齋宮式』では調庸として志摩国から毎年十五石、尾張国は六十五石を納めることとなっており、志摩国分は焼塩を製塩土器に詰めたまま運搬されたあと、そのまま「寮庫」に備蓄した可能性がある<sup>(20)</sup>。しかし、単純に見れば志摩式製塩土器で推定できる調庸塙は全体の約19%を反映しているのであって、残りの大部分を占め、別の輸送法が考えられる尾張国の方は含まれないことは注意すべきであろう。下園東区画で出土量が多いとみられるII-1～2期は「寮庫」を構成していた下園東B期とも重なる。同期の主要建物でいえばS B930・10311にあたる。今後、西加座北区画などの詳細な出土状況と比較する必要があるだろう。



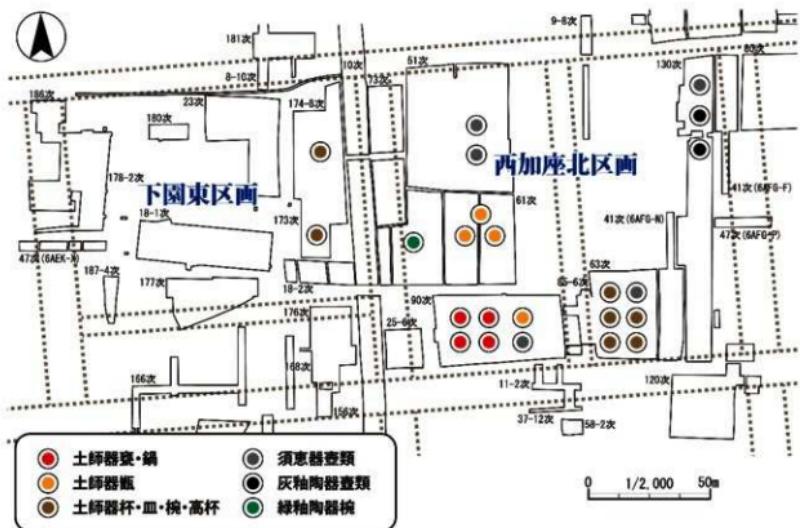
第22図 西加座北区出土の綠釉陶器

51次(1~11)・61次(12~32)・63次(33~35)・90次(36~41)・130次(42~50)

栗投(1~6, 12~21, 33~39, 42~47) 京都(7, 8, 22~25, 40, 48~50) 東濃(9~11, 27) 近江(28~32) 稲岡・尾北(26, 41)



第23図 下園東区画と西加座北区画の製塙土器出土分布図



第24図 下園東区画と西加座北区画の小型模造品出土分布図

【註】

- (9) 山本雅靖「志摩式製塙土器考」『考古学論集 第3集』考古学を学ぶ会 1990  
(10) 新名 強「斎宮跡と塙」『斎宮歴史博物館 研究紀要二十』2012

#### （4）祭祀具類

下園東区画では小型模造品や土馬は極めて少ない。形代となる小型模造品では、第173次調査の土師器壺A(616)はII-3期新相のSK10328出土である。9.0m×3.2mで深さ0.2mの大型の隅丸長方形の土坑自体には祭祀的な性格はうかがえない。第174-8次調査の土師器壺(617)は出土遺構はよくわからない。この他に比較的大型の土師質の土馬の尾部(618)があるが、出土した第186次調査区は区画西辺道路と方格街区北辺道路の交差点でもあり、区画内祭祀といいうよりも交差点での路上祭祀との関連がうかがわれるが、三重県内ではこうした出土状況の例は他に無いようである<sup>⑩</sup>。

一方、西加座北区画では数多くの小型模造品が出土しており、その種類は調査区により偏在している。列記してみると、区画南西隅の第90次調査区では土師器壺・鍋といった煮炊具が、区画南東部の第63次調査では土師器杯・皿・高杯といった供膳具が、区画西辺中央の第61次調査区では土師器瓶や縁釉陶器壺が、区画北半の第51次調査や第130次調査北部では須恵器や灰釉陶器の壺類がある。ただし、こうした陶器壺類は水滴として使用される場合を想定しなければならない。また、壺・甕や高杯などの小型模造品は南接する西加座南区画で多量に出土しており、西加座北区画の祭祀的な遺物はこれらとの関連を考えるべきかもしれない。

西加座北区画の土馬は、区画南東部の第63次調査で土師質のものが2点出土している。1点はSD2357から鞍の表現を持つ胴部から尾部が、もう1点は包含層出土の頭部である。この他西加座北区画外ではあるが、区画北東隅の交差点部分である第80次調査では5点の土馬片が出土しており、下園東区画北西隅の第186次調査の(618)と同様の使用状況が想定される<sup>⑪</sup>。

【註】

- (11) 山中由紀子「土馬」『三重県史 資料編 考古2』三重県 2009  
(12) 大川勝宏「斎宮跡の祭祀と出土遺物」『三重県史 資料編 考古2』三重県 2009

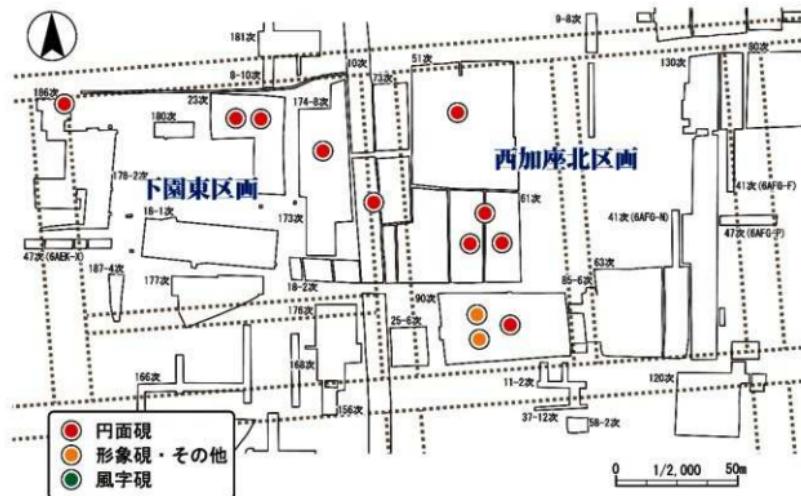
#### （5）墨書き土器・線刻土器

下園東区画の墨書き土器は、区画南東部にのみ見られる。第168次調査区の「殿部」(568)は斎宮の「殿部司」との関連が考えられる。土器の型式からII-1期新相頃のものとみられる。榎村寛之氏の整理では、殿部司の長は從七位下でその配下も六人とされている。また、その職掌も、『延喜斎宮式』の新嘗祭条に殿部が受けるものとして湯槽・円槽・足洗槽などの水槽類、大型の甕・油瓶・油壺などの灯明具があること、年料として油壺・盤・湯槽・洗床・洗頭槽・洗足槽・洗物槽・灯台が列挙されていることから、斎王の入浴や灯火・油の管理の他、輿や儀仗具の管理に関するとしている<sup>⑫</sup>。殿部に関する文字資料では第2章でも触れたように、鍛冶山地区の第29次調査で土師器に線刻した「殿」が、東加座地区の第57次調査では「殿司」と墨書きされた土師器が出土している。『延喜斎宮式』にある各種水槽類や、灯火のための油を入れた容器は、年料などとして一旦「寮庫」に収納された可能性はある。「殿部」墨書き土器は、下園東B期の建物の中に、殿部司関連の資材を収納する倉庫が特定されていたことをうかがわせる<sup>⑬</sup>。同じ調査区で出土した須恵器杯Aに「上大口」と墨書きしたもの(567)も、三文字目が「宮」の可能性もあり、殿部と斎王を関連を想起させるものである。遺構の上では、第168次調査は下園東B期以降、区画溝あるいは区画道路によつて下園東区画とは一線を引かれた個所にあり、E2期まで区画内では連続して建物が集中している。『遺構編』では南接する柳原区画に取り込まれたと想定しているが、殿部は斎宮の維持管理に必要な職掌であり、その機能を持ち続けたことも考えられる。

この他、下園東区画南東隅の柳原区画と接する道路・交差点付近からは、第156次調査で「奉」や「謹」の墨書きが、



第25図 下園東区画と西加座北区画の墨書き土器・線刻書き土器出土分布図



第26図 下園東区画と西加座北区画の陶器類（定型硯）出土分布図

第16表 『延喜式』にみる諸國の調庸雜物と殿部司の年料

## 諸国の調庸雜物

種別	物資名	量	輸庸國 諸司名	出典	種別	物資名	量	輸庸國 諸司名	出典
服飾關係	綿（あしぎぬ）	三百疋	伊勢	調庸雜物条	食料品	大豆	六石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	長絹	二十疋	尾張	調庸雜物条	食料品	小豆	六石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	白絹	三十疋	泰河	調庸雜物条	食料品	鹽の大豆	十八石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	絹	一百五十疋	邊江	調庸雜物条	食料品	胡麻子	一石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	絹	五十五疋	相模	調庸雜物条	食料品	み(匁冠に集)子 (の)	一石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	絹	五十疋	美濃	調庸雜物条	食料品	季子	一石	泰河	調庸雜物条
服飾關係	糸	二百飼（く）	尾張	調庸雜物条	食料品	祭祀	十五石	心摩	調庸雜物条
服飾關係	糸	一百飼（く）	邊江	調庸雜物条	食料品	祭祀	六十石五石	尾張	調庸雜物条
服飾關係	綿	一千一百石	相模	調庸雜物条	食料品	胡麻油	三石	邊江	調庸雜物条
服飾關係	綿	一千五百石	上總	調庸雜物条	食料品	櫻椒（ほそき）の酒	四斗四升	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	綿	一千五百石	東海	調庸雜物条	祭具足	東海	三百升	安房	調庸雜物条
服飾關係	布	五百疋	相模	調庸雜物条	食料品	鳴鳥	二百八十八升	心摩	調庸雜物条
服飾關係	布	三百疋	下総	調庸雜物条	食料品	鳴鳥	二百十二升	伊豆	調庸雜物条
服飾關係	布	六百五十疋	上野	調庸雜物条	食料品	煮鮭魚	一百四十升	駿河	調庸雜物条
服飾關係	布	二百疋	駿河	調庸雜物条	食料品	鳴鳥（いいろり）	四斗	伊豆	調庸雜物条
服飾關係	鐵文（しぢ）	二疋	常陸	調庸雜物条	器物品	鳴鳥（いいろり）	三斗	信濃	調庸雜物条
服飾關係	木綿（ゆう）	二百五十二疋	伊豆	調庸雜物条	食料品	楚割（すはり）の鰯	一百二十升	信濃	調庸雜物条
服飾關係	木綿（ゆう）	四百八疋	邊江	調庸雜物条	食料品	煮塗の年魚（あゆ）	二石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	麻	四百斤	下総	調庸雜物条	食料品	鳴鳥の年魚	一石	伊勢	調庸雜物条
服飾關係	鷹羽（にづけ）	一百斤	下総	調庸雜物条	食料品	鷹の鰯	三石	近江	調庸雜物条
服飾關係	鹿皮	八張	信濃	調庸雜物条	食料品	鳴鳥の鰯（はじし）	十斤	尾張	調庸雜物条
祭祀具	龜甲	十二枚	心摩	調庸雜物条	食料品	鰯の楚割	九十升	泰河	調庸雜物条
服飾關係	縛（くつ）	三十兩	伊勢	調庸雜物条	食料品	助貝（ひがい）の鰯	一百八斗	泰河	調庸雜物条
文頭具	紙	一千張	伊勢	調庸雜物条	食料品	鰯の秋枕（ひわらし）	一百斤	泰河	調庸雜物条
文頭具	紙	一百晩	伊勢	調庸雜物条	食料品	鰯（くさぐさ）の鰯	二石	心摩	調庸雜物条
文頭具	筆	一百晩	尾張	調庸雜物条	食料品	鰯（くさぐさ）の鰯	二石	尾張	調庸雜物条
文頭具	筆	二十八晩	美濃	調庸雜物条	食料品	鰯（くさぐさ）の鰯	一石	邊江	調庸雜物条
蠶品	蠶の糞	五六八種	奥美濃	調庸雜物条	食料品	鰯（よなづけ）の鰯	七斗	相模	調庸雜物条
服飾關係	白絹	六百疋	京庫	調庸雜物条	食料品	鰯の鮒	五石	伊勢	調庸雜物条
金屬	鐵	二百三十五口	京庫	調庸雜物条	食料品	鰯の鮒	五石	尾張	調庸雜物条
金屬	鉄	五百七十五	京庫	調庸雜物条	食料品	鰯海ぬ（いりこ）	百升	心摩	調庸雜物条
金屬	鉄	八兩（か）	京庫	調庸雜物条	食料品	鰯（よなづけ）の鮒	二石	志摩	調庸雜物条
文頭具	墨	十九挂	京庫	調庸雜物条	食料品	鰯（よなづけ）の鮒	三百四十升	志摩	調庸雜物条
食料品	麴米	三百四十二石	伊豆	調庸雜物条	食料品	海藻（め）	三百九升八斗四升	心摩	調庸雜物条
食料品	麴米	四百七十三石二斗	伊勢	調庸雜物条	食料品	鰯（よなづけ）の鮒	三百四升	志摩	調庸雜物条
食料品	麴米	五百五十九石三斗	泰河	調庸雜物条	食料品	艾葉（えふき）	十圓	尾張	調庸雜物条
食料品	麴米	二百九十三石	美濃	調庸雜物条	食料品	甘葛の鮒（いいろり）	一斗	伊勢	調庸雜物条
食料品	春米	五百二十四石一斗	伊勢	調庸雜物条	食料品	芥子（あくす）	五斗	信濃	調庸雜物条
食料品	春米	五百石	尾張	調庸雜物条	食料品	山薑（やまわさ）の鮒	二斗	飛騨	調庸雜物条
食料品	春米	二百石	泰河	調庸雜物条	食料品	山薑（やまわさ）の鮒	二斗	美濃	調庸雜物条
食料品	春米	四百石	志摩	調庸雜物条	祭祀具	鰯の鮒（よなづけ）の鮒	日百石に二束	伊勢	調庸雜物条
食料品	梗米（もちよね）	十石	伊勢	調庸雜物条	その他の	鰯の鮒（よなづけ）の鮒	百二十束	大神宮司	調庸雜物条
食料品	小麦	十石	伊勢	調庸雜物条	その他の	鮒（まぐさ）	二千四百箇	大神宮司	調庸雜物条
食料品	大麦	一石	伊勢	調庸雜物条	その他の	鮒（まぐさ）	二千四百箇	国司	調庸雜物条
食料品	米	三百六斗	伊勢	調庸雜物条					

## 殿部司が受ける年料

種別	物資名	量	輸庸國 諸司名	出典	種別	物資名	量	輸庸國 諸司名	出典
服飾關係	絹	五丈・一尺	伊勢	供薪資料条	容器・調度	明礬（あかひつ）	二合	伊勢	供薪資料条
服飾關係	織布	六疋二丈八尺五寸	伊勢	供薪資料条	容器・調度	飴苔（あらはこ）	一合	伊勢	供薪資料条
服飾關係	絹（てづくり）の布	六尺	伊勢	供薪資料条	容器・調度	穀台（あかしだい）	二具	伊勢	供薪資料条
服飾關係	絹	十両	伊勢	供薪資料条	容器・調度	穀（なりひき）	三柄	伊勢	供薪資料条
容器・調度	漆（ふるい）	二口	伊勢	供薪資料条	その他の	漆（かおりぐさ）	一両	伊勢	供薪資料条
容器・調度	漆器（おけ）	二口	伊勢	供薪資料条	陶器	池田加	一両	美濃	供薪資料条
容器・調度	漆器（じもとづくり）	一両	伊勢	供薪資料条	陶器	加	四口	美濃	供薪資料条
陶器	土臼（どう）の大盤（だいせん）	二口	伊勢	供薪資料条	陶器	那庭（たてい）	四口	美濃	供薪資料条
燃料	油	一升	伊勢	供薪資料条	陶器	油瓶	各二口	美濃	供薪資料条
食料品	米	一升	伊勢	供薪資料条	陶器	油坏・盤	各二口	美濃	供薪資料条
容器・調度	小豆	一升	伊勢	供薪資料条	陶器	圓形（もいがた）	一口	美濃	供薪資料条
容器・調度	桔梗・梅槽・洗足槽	各一樽	伊勢	供薪資料条	陶器	脚（くびき）	一口	美濃	供薪資料条
容器・調度	桔梗	一樽	伊勢	供薪資料条					

その対称的な位置にあたる区画北西隅の第186次調査では、土師器高杯や皿に「奉」や「井」・セーマン状の記号を線刻しており、交差点祭祀あるいは側溝・水路に伴う水の祭祀がうかがわれる。

一方、西加座北区画では漢字を墨書した土器が多数出土している。官司名に関わるものでは第90次調査区の「水部」「厨」があり、水部司との関連も考えられる。西加座北区画の西半には、この他にも「井」が複数出土しており、水との関連がうかがわれる。下園東区画の墨書・刻書土器は山茶椀にひらがなを墨書した(575)を除けば、多くはII-1～2期に相当するものであるのに対し、西加座北区画ではII-3～4期まで墨書土器が残っている。

【註】

(13) 榎村寛之「第三節 斎宮の官人」『明和町史 斎宮編』明和町 2005

(14) 榎村寛之「斎宮殿部司の性格について」『斎宮歴史博物館 研究紀要二十二』2014

## (6) 琥類

官衙的な性格を示す遺物として琥類がある。定型琥では、下園東区画では北東部の第23・174-8次調査と北西隅の第186次調査から須恵器円面琥が出土している。この状況は先述の墨書土器と逆の分布状況となっている。

西加座北区画では西半の第51・61・90次調査で須恵器円面琥がみられる他、第90次調査区からは須恵器鳥形琥の頭部と蓋が出土している。その反面区画東半は少なく、北東隅部の第130次調査で須恵器円面琥の可能性のある小片が出土しているにすぎない。

これらの円面琥は8世紀末からおおむね9世紀代までの時期に属するとみられるが、その一方で10世紀頃から円面琥と入れ替わっていく風字琥は1点も見つかっていない。しかし、下園東区画ではII-1期頃の須恵器蓋(608)の他、III期の無軸陶器の椀・皿類の転用琥がみられることから、実務的な文書事務は行われていたことがうかがえる。また、灰釉陶器椀を転用した朱墨琥や、赤色顔料の付着した灰釉陶器片も出土している。

琥類以外に官人に関連する遺物として、石帶が第23次調査の掘立柱建物の柱穴から丸柄が2点、西加座北区画では第90次調査で丸柄が1点出土している。これは琥類の出土状況とも整合している。

## 第4章 遺物編総括

### 第1節 出土土器群からみた下園東区画

これまで俯瞰してきた、下園東区画の出土遺物やそこからの考察等について最後に振り返りたい。まず、下園東区画から出土する遺物は大部分が土器類だが、その總体を時期別にみると斎宮II-1～3期のものが圧倒的に多い。この区画の遺構変遷の区画でいえば下園東A～C期にあたる。その後のII-4期、10世紀前半以降は、遺物量は大きく減少するようである。II-1～2期の土器が多量に出土した遺構は、SK10247・10248(第168次)<sup>(1)</sup>・10321(第173次)<sup>(2)</sup>といった区画東辺部の土坑の他、区画道路側溝あるいは側溝に重複・接する土坑が多い。区画東辺道路の西側溝SD515・520(第10次)、区画西辺道路の東側溝に関連するSK10888(第178-2次)・SD10859・SK10856・10857(第186次)である。このうち、第186次調査区の遺構からは「奉」や「井」、ドーマン状の線刻した土師器皿・高杯が出土していることも注目される<sup>(3)</sup>。II-1期古相から造営が始まった方格街区の区画道路側溝がII-1～2期の遺物を含んで埋没するのは、斎宮の度会郡移転と関連するとみられる。これまでにも、斎宮が移転する期間を含むII-2期には、方格街区を構成する区画道路の中央に廐棄土坑が多数掘削されたことがわかっている<sup>(4)</sup>。この道路上土坑と同じように、区画道路側溝も斎宮移転にあたって一齊に土器類が投棄されたのではないだろうか。榎村寛之氏は度会郡から多気郡に斎宮が戻った後、この区画道路が元の50尺を基調とする幅員に戻らず、やや湾曲し幅の狭いS形11208(西辺道路)・11210(東辺道路)に変容する動きを、下園東区画の倉庫群としての性格が失われることと連動すると指摘した<sup>(5)</sup>。

II-3期以降にはこうした出土状況の遺構はないが、SK926・928(第18-2次)、SK10325(第173次)・SK10640(第180次)<sup>(6)</sup>などまとまった遺物の出土がみられる遺構は減少し、以後はみられなくなる。III期に入っても多量の土器が消費される「内院」牛葉東区画や「寮庭」柳原区画とは明らかに状況が異なる。III-1期以降は、方格街区東部の東加座地区では急速に建物が減少することが知られており<sup>(7)</sup>、間に西加座北区画を挟むものの、これと連動した変化といえるだろう。

【註】

- (1) 「III 第168次調査」『史跡斎宮跡 平成22年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2012
- (2) 「III 第173次調査」『史跡斎宮跡 平成23年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2013
- (3) 「II 第186次調査」『史跡斎宮跡 平成27年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2017
- (4) 大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」『斎宮歴史博物館 研究紀要17』斎宮歴史博物館 2008
- (5) 榎村寛之「第3節 下園東区画と斎宮の「殿部司」の機能」『斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編』斎宮歴史博物館 2020
- (6) 「II 第180次調査」『史跡斎宮跡 平成25年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2015
- (7) 大川勝宏「斎宮方格地割の変遷・区画についての素描」『斎宮歴史博物館 研究紀要24』2015

### 第2節 特徴的な遺物から見た下園東区画

下園東B期の倉庫群は、第168次調査の「殿部」墨書き土器(568)が同時期のものであり、寮庫の各建物が斎宮の各司と個別に関連する可能性を考えなければならない。一方で、常陸や上総・下総から伊賀にいたる東日本の諸国からの調庸雜物を貢納する国別の収納管理も必要とみられる。第178-2次調査の伊賀の須恵器とみられる「安」刻書の皿(187)は、これまであまり議論されなかった斎宮と伊賀国との関連を示唆するものである。『延喜斎宮式』では伊賀国は庸米三百四十二石を課せられており、国司や運搬の賦役を担う人々、あるいは物資の移動の実態を反映している可能性がある。同様な事情は志摩式製塙土器でも考えられる。志摩式製塙土器が出土する地点が、塙の貯蔵場所なのか使用場所なのかは慎重に検討しなければならないが、下園東区画のような、祭祀性のある遺物や遺構が乏しい区画で、B期に限られるとはい、倉庫群として機能したとみられる区画内部各所の出土量の多寡は、倉庫建物の特定の機能

を反映している可能性があるだろう。東接し同様に寮庫の機能を果たしたとみられる西加座北区画を再整理する中で、合わせて比較検討することが望ましい。

その他の下園東区画の特徴的な遺物の状況を方格街区の他区画と比較して列記する。

- ① 緑釉陶器・貿易陶磁は総量的に少ない。緑釉陶器は西加座北区画と比較しても圧倒的に少ないだけでなく、陰刻花文を持つものや袋物が少ない。9世紀前葉のII-2期から出土する黒窯14号窯式期の緑釉陶器や越州窯系青磁は下園東区画では出土していない。つまり寮庫となるB期には高級陶磁器がみられない。
- ② 金属製品の出土も少ない。少量の鉄製刀子・釘とみられるものがあるだけである。また柳原区画で見られた鍛冶炉のような金属器生産に伴う遺構や轆・坩堝や金属滓も出土していない。
- ③ 官人との関連がうかがわれる硯類が少なく、墨書き土器の数も限られている。
- ④ 周辺の区画と比較して、祭祀具とみられる遺物も少ない。これも西加座北区画と大きな懸隔がある。しばしば土馬や斎車など祭祀具が出土する井戸が、下園東区画では一つも見つかっていないことも無関係ではないだろう。
- ⑤ 小大各種の土鍤が出土している。今回の報告の中では検討を進められなかったが、今後はデータを集積するべき遺物と考える。志摩国等との経済的結びつきや、斎宮と内水面漁業の関連など、これまで注意がはらわれてこなかった実態に迫るものと考える。

最後に、遺構・遺物の両面から下園東区画の変遷を俯瞰する。A期（II-1期古～中相）に造営が開始され、B期（II-1期新相～2期古相）には5間×2間の掘立柱建物による倉庫群が立ち並び、西加座北区画と並んで「寮庫」として機能した。これは時期的に南接する柳原区画が「寮庁」として整えられ、方格街区南西で八脚門を伴う木葉山西区画など少なくとも4つの区画が造成された斎宮の再編に伴うものである。下園東区画で最も大量の遺物が出土する遺構もII-1～2期のものである。

その後、天長元（824）年～承和六（839）年の斎宮の度会郡移転にあたり、区画の外周道路は埋められ、区画道路の中央にも土坑が掘削され、斎宮を形作った方格街区は、少なくとも下園東区画のような外縁部分は一旦放棄された。C期（II-2～3期）に斎宮が再び多気郡に戻り、元の方格街区のプランを活かして斎宮を再構築するにあたり、下園東区画は「寮庫」の機能は与えられず、区画内の各所にやや大型の建物とそれに付随する小型建物が散在する形になる。出土遺物が減少し、区画全体が一般的な曹司として、あまり特別な役割を担わなくなったよう見える。それは、この段階に西加座北区画では多種多様な緑釉陶器が出土するに比べ、質量ともに大きな格差が生じていることからもうかがえる。

E期（II-3期新相～III-1期）からF期（III-2～4期）には建物が徐々に区画北東部にのみ建てられるようになり、区画の衰退は明らかである。遺構だけでなくIII期の遺物も少ない。南接する柳原区画ではIII-2～3期の土器が多く出土する土坑や井戸がみられることと対照的である。平安時代を通して祭祀的な遺物が少ないと、下園東区画が実務的な曹司の性格を担い続けたことを示すとみられる。

斎宮跡の過去の発掘調査成果を再整理して総括していく報告書刊行事業は、平安時代の「内院」である鍛冶山西区画・牛葉東区画、「寮庁」と考えられる柳原区画に統いて三箇所目になる。区画ごとの精査により今まで見落とされてきた区画の性格・特徴が見え、それを他所とも比較することは、あらためて斎宮の実態解明を進めることにつながり、斎宮跡の歴史的・文化的価値を高めていくことになる。これからも報告書刊行の意義は大きい。

## 報告書抄録

ふりがな	さいくうあとはつくつちょうさはうこく さん							
書名	斎宮跡発掘調査報告Ⅲ							
副書名	下園東区画の調査 出土遺物編							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大川勝宏							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2021年 3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34度 31分 47秒 ～ 34度 32分 30秒	136度 31分 16秒 ～ 136度 37分 37秒	197403 ～ 20161107 (下園東区画)	約8,200m <sup>2</sup> (下園東区画)	学術調査ほか
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
斎宮跡 下園東区画	官 衛	奈良～平安	掘立柱建物 廻・櫛 土坑・溝 道路跡	土師器 須恵器 縄軸陶器 貿易陶器 製塙土器 土製品 金属製品	灰釉陶器 緑釉陶器 貿易陶器 製塙土器	方格街区の下園東区画の 出土遺物の総括		
要 約	<p>史跡東部の奈良時代末期から平安時代にかけて造営された方格街区(地割)のうち、下園東区画の遺物を総括した。出土遺物のほとんどは土器・陶磁器類である。一部古墳時代にさかのぼるものもあるが、おおむね平安時代全般の遺物が出土している。しかし斎宮の土器編年でII～IV期～III期の遺物は少ない。墨書き土器や、緑釉陶器などの高級陶磁器類も少なく特徴に乏しい。その中で、第23次調査で出土して唐鏡についてはその歴史的意義を考察した。</p> <p>また、須恵器壺Gや緑釉陶器、志摩式製塙土器、小型模造品、墨書き土器、定型窯の出土状況について、東接する西加座北区画と比較を行い、9世紀前葉には「寮庫」として機能した時期はあるものの、下園東区画は平安時代を通しておおむね実務的な曹司であったと考えられた。</p>							

斎宮跡発掘調査報告Ⅲ

下園東区画の調査

出土遺物編

2021年3月26日

編集・発行 斎宮歴史博物館

印刷 共立印刷株式会社